

---

# 戦国異端記

YAMASAN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦国異端記

### 【著者名】

YAMASAN

### 【ノード】

N9517L

### 【あらすじ】

よくある戦国転生ものです。

転生するのは宇喜多秀家。

島流しフラグをさけるため幼少から必死に頑張る。

戦記物とラノベの中間ぐらいをいけたらいいなあと思っています。  
気軽に読んでください。

不定期連載になると思いますが読んでいただけたら最高です。

## プロローグ

元  
亀  
3  
年。

俺はこの世に一度田の生を受けた。

何を言つてゐるのかわからんないと思うが、俺自身よくわからない。  
気づけばわけのわからんこところに飛ばされてしまった。

ちなみに今俺は〇歳である。

頭の中ではいろいろ考えているがどうやら俺がしゃべっても「ば  
ぶう」としか言えないらしい。

はいはいをしようと試みているが筋肉が足りない。

3歩ほど歩いたところで転んでしまい鼻をぶつけてしまった。

めっちゃ痛くて泣き叫んだら乳母と思われる女人が俺をあやしてくれた。

乳の大きい人でこれも子供の役得である。ついでに乳も吸わせてもらひ。子供つてすばらしく。ひとこんなことを考へてゐる場合ぢゃない。

ここぞだよ。畠に障子、ものすごく代表的な日本家屋である。代表的過ぎてセンスが古臭い部分がある。

どうやら俺はここのかちやんであるらしい。

生まれたとき周りにたくさん人がいてびっくりした。

みんなが俺の誕生を喜んでいる。前世の俺もいつも喜んでくれたのかなあ。

前世の俺はどうなつてゐるのか。死んでいるのだろうか。

思ひ出せると記憶をさかのぼつてみるとどうしても思い出せない。記憶に靄がかかつていてどうしてこんなところで赤ちゃんをやつしているのかまったくわからない。

まあ諦めるしかないのか。そのうち思ひ出しだろう。

なんていつたつてまだ生まれたばかりだしな。

元亀3年つていつだよ。

俺は頭を抱える。

せめて西暦に直して欲しいものだ。

俺の知ってる日本なのがも疑問が残るところだ。

もしかしたらどこかの異世界に飛ばされたのかもしれない。

今の俺では質問もできないので仕方なくなすがままにされるしかない状況である。

1ヶ月ぐらい時間が経過すると血相かけた顔が飛び込んできた。隣に女性も一緒にいる。

確かにこの人は俺を産んだ女性だつた気がする。

生まれたとき一度しか会ったことがないため記憶が薄い。

男の方は40台～50台前半だろう。端正な顔立ちをしている。イケメンだ。

「お福、よくやつたぞ。元気な男の子だ」

「はい。ありがとうございます。お館様」

時代劇かよ。

と突っ込みを入れたが発せられた声は「ばぶう」としかならなかつた。

「おい。しゃべつたぞ。なかなか聰明そうな顔をしているではないか。将来が楽しみだ」

「お館様に似たのでしょうか」

「これで我が宇喜田の家も安泰だな」

「京では織田がばっこしていると聞き及んでいますが、大丈夫でしょうか？」

「お前が気にすることではない。何、田舎物の織田などすぐに追い出されるだ」

織田！？ 宇喜田！？

「ばふうばふう」

精一杯驚きの声を発するも間の抜けた声になつてしまつ。

「ほへ、織田に反応するとは将来大物になるかも知れんな」

「この子も宇喜田の家を心配しているのでしょうか。お館様せめてこの子が大きくなるまで健在でいてください」

「大事無い。女子が心配することではないわ」

そういうて高笑いする。

2人が去つて言つた後、混乱した頭を落ち着けると状況を整理してみる。

今の一人は俺の両親であるう。

一方は俺を生んでくれた人だから見覚えがある。

そしてたぶんここは多分日本だろう。

建物もこれでもかというほどの代表的な日本家屋であるし、着ている服も時代劇に出て来るような格好であるが

日本服であろう。たぶん……。

時代は？平成ではない。絶対に。

俺はわけのわからぬうちに赤ちゃんになり、日本の、平成ではない時代に飛ばされたということか。

なんてこつた。

放心している場合じゃない。

情報を。情報を集めなくては。

確かに2人が宇喜田、とか織田、とか言つてたよな。

宇喜田、織田この両家が歴史上に並び立つのは戦国時代しかない。

おいおい。物騒すぎるだろ。よりによつて戦国時代かよ。

我が家宇喜田家といつことは俺は宇喜田家の子供といつことか。

まさか宇喜田秀家じゃないだろうな。

もしそうだつたらあのおっさんは宇喜田直家かよ。

宇喜田直家……

歴史は前世で好きだった。

記憶を掘り起こしてみる。

確かに、謀略に謀略を重ねて岡山辺りに一大勢力を築き上げた戦国大名じやないか。

特技は暗殺。主君を殺しに殺し、今の地位を築きあげた。

毛利元就、尼子経久と並ぶ中国地方の3大謀将の一人である。恐

ろしい男である。

確か俺が生まれて10年後辺りには病死してしまった気が……  
やばい。俺の親父は早くも死亡フラグをたてちまつたよ。

## 戦の始まり

天正 てんじょう  
6年

今や俺も7歳に成長した。

どうやら本当にここは戦国時代であるらしい。

天正3年、織田信長が武田勝頼を破った。  
世に言つ長篠の戦いである。

武田対織田。信玄を欠いているとはいえ武田軍は圧倒的重厚さを誇っていた。

俺の周りでの下馬評は武田の圧倒的勝利であった。

「織田の天下もここまでか」という決まり文句が毎日のように俺の耳に入っていた。

なので織田が武田を破ったという報はここ備前まで届いた。

長篠の戦いは1575年に起つたことは記憶している。

そこから逆算して考えると現在天正6年は1578年である。  
本能寺の変まで後4年。関ヶ原の戦いまで後22年である。  
のんびりしている暇はないというのがこの6年で出た結論である。  
幸いなことに史実では宇喜田秀家はその半生大名として安楽な生活を送ることができる。

秀吉に寵愛されるので殺されたり危ない目にあつたりする」とは滅多にありえない。

まあこの間に民に重税をしたり、家臣に反乱を起させられたり、鷹狩に嵌つたりしている。

しかし、その後が問題である。

関が原の戦いで石田三成側、西軍についたことにより、家康の怒りをかい、後の人生は島流しである。

島流しといつても家族全員で余生を過ごすことができるのと別に不自由はない。

生き残る分にはなんら問題のない、むしろ厚遇といえる。生き残る分には……

ただ俺が許せないのは家康によつてそれが行われることである。はつきりいつて家康は前世から大嫌いである。

その家康によって島流しされるのは生理的に無理である。そんなハメになることは耐えられない。

関が原の戦い、この合戦で俺の人生は決まってしまうことになるだろう。

俺もこの7年間のんべんだらりと過ごしていただけではない。生命的の保証は何とかなりそうであるが、戦国時代は戦国時代である。

油断していると後ろからズブリと刺されそうである。

なんといっても親父がそれを体現してきただけに人事ではない。少しでも死ぬ確立、島流しになる確率を減らすために勉強しなくてはならない。

前世より必死に勉強した。

といつても前世からの土台があるため、そろばん、つまり算数は問題なかつた。

漢文も何とかなつた。レ点、一一点がないのには苦労したが。大変だったのは文字である。

高校の古文はそこまで悪い成績ではなかつたのだが、この時代の文字は全く読めなかつた。

筆記体に近い流し書きというか、ほぼ落書きのような文字を読んで書かなくてはいけない。ものすごく大変であった。

変に土台があるだけに余計わかりにくい。英語の方がましに思えてきたものだつた。

「八郎、八郎」

俺が物思いにふけつていると上から声がある。

この声は桃寿丸である。

三浦桃寿丸。俺の義兄にあたる。美作の国人領主の息子だつたが

俺の親父が預かってきて養子にしている。

俺の前世の記憶では名前も聞いたことがないのでよほどひだつて上がらないやつだったのだろう。

義兄なのに俺の後ろによく付いて回っている。

将来の片腕にしてやひつと思ひ徹底的に俺好みに矯正してやつた。

ちなみに八郎とは俺のことである。幼名といつやつだ。

「またこんなところにいたのか」

「なんのようだ？」

俺は田圃（たんぼ）の一畝から起き上がる。

「父上が出陣なさるそうだ」

「ほう。織田とか？」

桃寿丸は目を見開いて答える。

「よくわかつたな」

「規模は？ いつ発つ？」

「……すまん。わからん」

うだつの上がらないやつだ。これで俺より五歳上だからひどいものだ。

もう一回矯正しなおす必要がありそうだ。

「俺に報告するときは、5W1H。誰が、何を、いつ、どこで、どうして、どのように徹底しつといったはずだが？」

「うつ……すまん。忘れていた」

「復唱……！」

「復唱……！」

後ろで律儀に復唱する桃寿丸をほつておいてそろそろ俺も戦場の空気に慣れておくべきだ。

と考える。なにしろもうすぐ、正確な日付はわからないが親父が死ぬ。

確か病死である。暗殺や戦場で死ぬのなら手助けできるが病死はどうしようもない。

俺は文系人間である。医学的知識など皆無である。

「桃寿丸。親父に会いに石山行くぞ」

3回目の復唱に入つていた桃寿丸にそう告げる。

石山城。現在の岡山城にあたる。1970年、つまり俺が生まれる2年前に前領主を自害させ、親父が奪い取つた城である。主だった家臣や商人を亀山城から移住させ、今では一大城下町となつてている。

岡山城とその城下町を見るたびに親父の偉大さが身にしみる。すでに親父は昨年浦山宗景を追放し、備前、美作を統一している。まあ簡単に言えば岡山県ほぼ全域が親父の手中にわたつたわけである。

岡山県といつて馬鹿にはできない。戦国時代、西国は日本のなかでは先進国といつてもいい。

前世の俺の岡山のイメージとは全く異なつている。

といつても西に毛利、東には織田が台頭してきている。

岡山県だけでは心もとのないのも事実である。

親父の代で播磨、今の兵庫県辺りまで制圧してくれないかな。などとありえない」とを考えたくなる。

「よくきたな」

上座から謀略マンの声がする。もちろん親父だ。

「父上、此度の戦参陣させてもらえないでしようか?」

「なんだとーまだ元服もしていないではないか。戯言は闇だけにしておけ」

怒られてしまった。というかそんな冗談7歳児に聞かせるなよ。  
「私も次期当主として戦場の空気になれたく存じます。指揮はとりません。見学するだけです」

「つうむ。その意気込みは買うが、こんなところでお前を失うわけにはいかん。それに今回は毛利も出る。こんな戦でなくもつと華々しい戦をお前には用意してやるつもりだ。それで我慢してくれ」

希代の謀将と恐れられている直家も俺には甘い。

やはり、晩年できた子供はかわいいものなのだろうか。

「なればこそです。毛利と織田、両勢力を見る絶好の機会です。それにも危なくなつたら逃げますから」

俺の返答を聞くと、親父は笑いながら「う。

「そうか。逃げるか、逃げるときたか」

語尾にwwwがつきそつなぐらいである。

「わかった。許可を出す。しかし条件がある

「なんでしょうか」

「此度の戦、忠家が指揮を取ることになった。忠家のいうことをよく聞くのだぞ」

「わかりました」

「よろしいのですか。まだ元服もしていない」というのに。私は反対です。何かあつてからでは困ります」

横からしゃしゃり出てきたのは宇喜多忠家うきたただいえ、親父の弟、つまり俺の叔父にあたる。

何でお前がいるんだよ。とつっこみたい。ああつっこみたい。

「まあ大丈夫だろ。此度の戦は織田は出てこんよ。いや、出てこれない。

ゆえに城攻めになる。城攻めなら危険も少ないだろう。

それに八郎の心意気も買ってやらんとな」

忠家は眉をひそめた後、ため息を付き了解する。

「わかりました。八郎殿、前線には決して出られぬよつて  
「承知しています」

ふう。ため息を漏らす。こつまでたつても親父と会つのは緊張する。

肩をならしながら廊下を歩く。

「八郎。あいかわらずすじいな。父上の前であれだけしゃべれるのは尊敬する」

「ん? なんだ桃寿丸か」

「しかも戦に行くんだろ? 僕でさえまだ行つたことないのに。よく行く気になれるよな。ほんとに6歳かよ」「何いつているんだ? お前も行くんだよ。」

「え? 僕も?」

桃寿丸には再教育が絶対に必要だ。

## 上月城の戦い 前編

うん。小競り合いだと思ってたんだ。有名な戦じやないだらうと。  
高をくくっていたんだ。

正直、毛利の力を甘く見ていた。

毛利軍がここまでとは思わなかつた。背筋が寒くなる。  
織田と毛利で有名な戦は備中高松攻めだけじゃあなかつたんだな  
あ。と改めて実感する。

今、俺の目の前に毛利軍6万が陣取つてゐる。陸軍だけで六万で  
ある。

多少の誇張もあるだらうが、どう見ても大軍としか言いようがない。

「庄巻の一言である。各地に炊き出しの煙が上がつてゐる。  
さらに海には村上水軍の船が所狭しと敷き詰められている。  
播磨灘はりまなだにはネズミ一匹出入りすることは不可能だらう。  
毛利が言つには700隻だそうだ。  
発する言葉もない。

俺は今まで宇喜多に転生できて幸せだと思つていて。  
何もしないでも一国一城の主になれる。生活の保証はされていて  
と思っていた。

とんでもない幻想だつた。

今は味方だからいいものの将来、一時的であれ敵になるかと思つ  
軍勢を見て恐怖する。

今回、目的となつてゐるのは上月城である。  
播磨・美作・備前はりま・みまさか・びぜんの国境にある要衝である。

この城は最近織田に奪われたり、奪い返したり、奪うの失敗した  
りしている城である。

宇喜多・毛利勢にとつてはこの城は中国地方の防衛の要である。

その城が今羽柴秀吉に奪われたのである。

そして守っているのは、毛利と因縁深い尼子である。

中国地方の3大謀将の1人尼子経久の子孫である。

偶然にもここに二大謀将の子孫が揃つたことになる。

これに対し毛利は尼子<sup>あまく</sup>残党の討伐を決意。

毛利軍総大將輝元は35000の大軍を率いて郡山上を出陣する。さらに小早川隆景、吉川元春の毛利<sup>じょうせん</sup>両川もそれぞれ出陣する。

毛利軍総勢51000である。

それに対し俺の宇喜多家は総大將を宇喜多忠家にすえ、10000の兵を率いている。

上月城に立て籠もる尼子勢は3000である。

総大將は尼子<sup>あまく</sup>勝久である。

数だけで考えるなら20倍である。攻城戦3倍の原則を圧倒的に超越している。

これだけなら毛利・宇喜多連合軍の圧勝なのであるが、ここに織田という要素が出てくる。

尼子のバックには織田がいるのである。

織田の救援はまだ来ていないが、羽柴秀吉率いる16000が来るらしい。とのことである。

少し長くなってしまったが、今回の戦の背景、勢力状況である。

「げに恐ろしきは毛利なり。か」

目の前に広がる上月城包囲網を見ていうとやう思はずにはいられない。

「すつげーな。さすがは毛利」

横の桃寿丸も同じような感想らしい。

せつかく俺が時代と環境を考慮しているのに……。

すでに毛利は包囲を完了しており、すでに空掘や塹壕を構築している。

この時代に擬似的とはいえ要塞構築の概念と技術があつたことは

驚きである。

忠家さんは？」

「向こうで軍議してゐるよ」

そういうて桃寿丸は天幕がはつてあるほうを指差す。

天幕には宇喜多の家紋が描かれている。

何気なく上方を見ると丘の上に小さな人影が見えた。

「ん？ 誰かいいるぞ」

「え？ どこどこ？」

「あそこ丘の上だよ」

「丘？ ああ、ほんとだ。何であんなところにいるんだ？」

「まさか……敵の間諜！？ 行くぞ、桃寿丸」

「ええっ！！！ いくの？ 危ないよ」

「いいから、いいから」

そういうて俺は桃寿丸の腕を引きずりながら、丘の方にかけていこうとする。

「どこへ行かれるのですか？ 八郎様」

「ちょっとあそこ丘まで」

ん？ 聞いたことある声だなと思い振り返る。

そこには忠家さんが鬼の形相で立っていた。

「お館様があつしゃいましたよね。私のいうことを良く守るよつと。

私が戦場に連れて行く条件として勝手に出歩かない。私の田に見える範囲にいること。

私がいないときは天幕の側にいること。以上をお守りいただくなとをお願い申し上げたはずです」

「うう……軍議だつたんじやあ」

「軍議は先ほど終わりました。

はあ……まあいいでしょう。あなたがそれを守れるとは思つていませんでしたから」

「じゃあ、いつてもいいのか？」

「いいでしょ。しかし、この者を護衛としてつけてください。

決してこの者の側を離れぬように」

そういうと忠家さんの後ろにいた人が前に出でくる。

「小西行長といいます」

年齢は20歳前後だろうか。胸にロザリオをつけている。かつこつけかよ。

俺も前世の中学校のころつけてたときがあつたなあ。

「この者は兄上がじきじきにハ郎殿の警護にと連れてきてください。つたのだ。

絶対に側を離れないでください、絶対にですぞ」

忠家さんが必死の形相で迫ってきた。

「わかりました。わかりました。心配性なんだから。忠家さんは「一応の了解を取ると忠家さんは小西行長に後は任せたぞ。とつげた後もと来た道を戻つていつた。

ん？ 待てよ。え？ 小西……小西行長！…………

あの！！！ キリシタン大名として切腹させられる、あの！！！ 秀吉の家臣として水軍を率いて、武将としても官僚としても優秀な人物じゃないか。

確かに関が原で西軍に味方して家康からの心証が悪くなつたんだよな。

親父の家臣だつたの！！！ 将来大名になるすごい人物じゃないか。

今のうちにサインもらつとこつかな。

「あの丘の上に行きたいのですか？」

俺が考えこんでいると小西行長から声をかけられる。

「いいの？」

「大丈夫でしょう。もちろん私も行きますが

「よしそれじゃあ、行くぞ、桃寿丸」

今まで俺の後ろで隠れていた（本人はそのつもりだろう）桃寿丸を引き連れて再度丘の上に向けて出発する。

丘までの道はさほど険しくなく、案外すんなり行くことができた。少し開けたところにすると30人ぐらいの人が宴会していた。

「なにしてるんだ？」あいつらは。

横にいる小西行長に聞いてみる。

「彼らはこれから始まる戦を見物しに来たのでしよう。」

「見物！？そんなことする人がいるんだ。」

俺たちより少し後ろにいる桃寿丸が呟く。

俺も疑問に思つたので聞いてみることにする。

「そんなことされて情報とか大丈夫なの？」

行長が少し感心したような顔をして答えた。

「戦を見物することは結構良くあることですよ。

見物しながら昼飯を食べる人もいるくらいですから。

いちいち取り締まついたらかぎりがありません。

それに情報として大切なことは今何をしているのかもちろん大切ですが

「これから何をするのかの方がわからなければ何とかなるものですよ。」

それに包囲を敷いている」とはすでに織田に伝わっているでしょ  
うから」

行長が教え子に諭すように言つ。

「そういうものか」

やつぱり将来、大名になる男はすごいものだと感心するしかない。

「せつからくですからここから見学しましよう。

ここでしたら矢や鉄砲が飛んでくることもありますし、陣営も

良く見えるでしょう」

そういうなり行長はたむろしている人影の一 角に向かっていって  
しまった。

「本当にこれから戦が始まるとんだ」

桃寿丸がいまさらなことを呟く。

「八郎様、あそこの輪に入れてもらいこましちょう

行長が戻ってきて俺らを導いていく。

どうやら見物人は商人らしい。

結構手広く商売しており、堺さかいにも店があるらしい。

戦を見るのが好きらしく暇がつきしだい今日のように戦見物をしているらしい。

商人が進んで解説していく。俺も陣営を見ることに不満はないのでされるがままにしている。

毛利は上月城を包囲する一方で空堀を掘り塹壕を掘り、堀をめぐらし柵などで攻城線を築いている。

このようなものを陣城というらしい。

さらに別のところにも織田家の救援対策の陣城を築いている。

商人は一通り説明し終わると

「この戦3ヶ月ぐらいかかるでしょうな」と締めくくつた。

「どうですよろしかつたら、この戦が終わるまで私と一緒にここから見物しませんか。

私もあなたみたいに熱心な聴衆がいた方が張り合いか出るといつものですが

「いいのか?」

「もちろんですとも。なに今更に三人増えたところで変わりませんから。」

俺は行長をすがるような目線で見る。

「いいですよ。私は最初からそのつもりでしたから。」

「さっすが行長」

「うして俺らは」の商人のお世話になることになったのだ。

## 上月城の戦い 中篇

約一ヶ月後、俺らは未だに商人のお世話になつてゐる。  
たまに忠家ただいえに会いに行くぐらいである。

忠家も行長がいれば安心なのか小言も少なくなってきた。  
たまに陣の説明やら戦の講釈をしてくれる。

嫌がる桃寿丸とうじゅまると一緒に聞くのだがこれがなかなか面白い。

忠家は苦労人だけあつて人に教えることがうまいのだろうか。

商人は商人でこれもまた過去にみた戦のことを俺に話してくれる。  
ぜひ長篠ながしのの戦いの事を聞いたかつたが、残念ながらその戦にはいけなかつたらしい。

ぜひ行きたかつたと悔しがつていた。

「ん? 何か見えたよ。」

桃寿丸とうじゅまるが不意に発言する。

「え? どこどこ? あれか? ほんとだ、援軍かな?」

「毛利の?」

「方角的にむりだろ。」

俺が突っ込む。

「遂にきましたか。羽柴軍が到着したのでしょうか。予想より早かつたですね。」

今まで黙つてみていた行長が解説してくれる。  
「羽柴軍! ? 遂に本格的な戦が始まるのか。一ヶ月、一ヶ月もまたせおつて。」

1ヶ月も待つた反動だろう。商人がハツスルしている。  
ハツスルダンスでも踊りかねないぐらい飛び跳ねている。  
「1万5千程度ですね。ここからでは確かにことはいえませんが。羽柴勢が動かせることができるのはこれぐらいでしょう。」

「ほう、あなたもなかなか戦好きじゃな。」

商人が同士を得たとばかりに目を輝かせている。

「いえ私はかじつた程度ですよ」

「そうなのか。まあなんにせよこれから戦が始まる。来たかいがかったというもののじや。」

残念ながら商人の期待とは裏腹にこの後小競り合いは起こつたものの大規模な戦は起こらなかつた。

毛利は徹底的に兵糧攻めに拘り、強襲をかけようとはしなかつた。羽柴秀吉も6万の大群に1万で挑むことはしなかつた。

終始、ちょっとかいはかけてきたものの全面的な攻勢は行われなかつた。

一方の上月城に籠つた尼子勢は悲惨なものだつた。

兵糧攻めというと平和的な戦になるものとのんきに構えていたが間違ひだつた。

行長がいうには兵糧攻めは普通の野戦より悲惨な結果になる」とが多いらしい。

耐えかねた脱走兵が何人も投降してきた。

兵糧も尽き、城には怨嗟の声がたちこめてみえるぐらいだつた。包围が開始されて三ヶ月、羽柴が救援に駆けつけて2ヶ月。

遂に羽柴が撤退準備に入つた。

丘の上からでは全くわからなかつたが、毛利軍から伝達された情報ではそういうし。

それに乗じて毛利軍は総攻撃をかけた。

もちろん我が宇喜多も参加している。

まさに圧勝だつた。

完膚なきまでに打ち破つた。

羽柴軍を散々にし、これから東進し、いざ信忠軍、といふことになり追い討ちはかけない。

という毛利軍からの伝達を聞く。

丘の上から見ていた俺たちでもこれから追い討ちをかけると思つ

ていただけに意外だつた。

「追い討ちかけないんだ」

桃寿丸が首をしきりにかしげている。

「小早川隆景か……」

俺が呟くと行長が目を見開いて驚いている。

「八郎様は本当に7歳ですか？」

幼子とは思えません。」

「えつ！！！」

図星を突かれてびっくりする。

独り言を聞かれてしまった。

「ねえねえ、何で追い討ちかけないの？」

桃寿丸が尋ねる。

いいぞ、桃寿丸。空気は読めてないがいいタイミングだ。今だけはお前の応援をしてやる。

「そうでしたね。このまま追い討ちをかければ羽柴軍は完膚なきまでに叩けるでしょう。

しかし、その後ろには信忠軍、さらには後ろには信長軍が控えています。

今回の戦のそもそも目的は上月城の占拠と尼子残党の排除になります。

上月城をとれば織田軍はあいそれと中国地方に手出しきれないでしょう。

ここで欲をかけて危険を冒すより、徹底的に初志を貫く。

恐ろしい男ですよ、小早川隆景は。」

「ふーん。そういうことか。慎重なだけじゃなんだね。」

桃寿丸はバカではない。頼りない男ではあるが、教えたことは吸収できる。

どうやら宇喜多勢も帰つてきたらしい。

宇喜多のよくわからない漢字をほどこした旗も見えてきた。

忠家叔父さんに挨拶しないとまずいだろうな、と思いつつ丘の

上を降りる」とした。

丘を降りてきた俺達を迎えたのは大変に機嫌のよろしい忠家さんの姿だった。

「これはこれはハ郎殿我が軍の健闘ご覧いただけたでしょうか？」

「圧倒的大勝ですぞ。」

「うん、すばらしい戦いだつたよ。」

「私もこのような戦いをハ郎殿にお見せすることができて喜ばしい限りです。」

そういうて満面の笑みを見せる。

「後は残った上月城のみですね。」

何、すぐ落とせます。援軍は来ないでしょ? から、士氣もおちま

すからね。」

## 上月城の戦い 後編

忠家叔父さんの言つたとおりにほどなくして上月城は落城した。  
総大将である尼子勝久は自刃したことである。

その報を丘の上で聞いた商人は

「良いものが見れました。これで私は帰ります。3ヶ月もあけてしまったので仕事が溜まりに溜まってましてね。  
ここであつたのも何かの縁です。堺に来たときには是非、家にお寄りください。」

そう行長に告げると帰つていった。

俺らも丘を降りて忠家叔父さんのところに向かつ。  
天幕へ向かうと忠家叔父さんは終戦処理の真っ最中だつた。  
どうしたもんかなと思つていると、後ろから不意に声をかけられた。

「これはこれはハ郎様。今までどこにいっていたのですか？」

戦は既に終わつてしましましたよ。

その様子ですと私の活躍は見てもらえなかつたようですね。  
大将は後ろにいることが多いとはいえ、あまりに後ろですと兵が付いてきませんよ。」

「げつ嫌なやつが來た。」

「こいつは宇喜多忠家の嫡男で宇喜多詮家といつ。ことある」「」と  
俺に突つかかつてくる嫌なやつである。

桃寿丸

桃寿丸より少し年上なので今回の戦にも参加していたらしい。  
切れ長の目にいやみつたらしい口調、火傷して女に嫌われて家臣

に殺されればいいのに。

忠家叔父さんはものすごくいい人であるのにどうしてこんな男が忠家叔父さんから生まれてきてしまったのだろう。と常田頃から思わずにはいられない。

「おう、詮家殿。お主も元気そつだな。あきじえ」

戦場は体力を使うと聞くがどうもそつではないらしい。

とても戦の後とは思えないくらいに元気そつだな。」

桃寿丸は横でおろおろしている

「ふん、相変わらずさかしいやつめ。

そういうえば、これから首実検が行われることになつてているがハ郎殿はいかがする。

せつかくの戦勝ですから、次期宇喜多家当主となられる方には是非見ていつてももらいたいものですね。」

前半部分は聞かなかつたことにしておいてやる。

首実検とは配下の武士が戦場で討ちとつた敵の首の身元を大将が判定し、

その配下の武士の論功行賞の重要な判定材料とするために行われた作業である。

俺は記憶を掘り起こす。今回は一応総大将は忠家さんなのだから俺は別に参加しなくてもよかうなのだが、そのような言い訳詮家には通じそうにない。

「首実験か。おもしろそうではあるな。

この年で首実検に参加したというのも前例がなさそつだしな。」

売り言葉に買い言葉である。首実検とは簡単にいえば生首晒しだある。

「ええよ。絶対夢に出でくるよ。正直逃げ出したい。

が、俺の心とは裏腹に足は進んでいき、忙しそうにしている忠家叔父さんに声をかけてしまう。

「忠家さん。首実検に俺も参加させてもらえないでしょうか。

またとないいい機会ですし。」

やめろよ、俺、この口は何をしゃべっているんだ。首実検見たい

なんてキチ外だぞ。

「八郎様、いい心がけですが、やはり少し早すぎるようになります。初陣の機会までとつておくのが良いと考えますが。」

さすが忠家さん、常識人。これで俺もすんなり断れるわけだ。

「父上、いいではありませんか。本人が見たいというのなら是非見せてあげるべきだと思います。

「こいつらものは早すぎるといつものは」やこません。」

詮家、お前何言つてんだ。せっかくいいところだったのに。

忠家さんは俺と詮家を交互に見比べるとため息をついていう。

「仕方ありませんね。私についてきてください。」

「八郎様、よかつたですね。首実検、見たかったんでしょう?」

詮家がいい笑顔を俺に向ける。

「忠家叔父さんの説得をしていただき感謝しますよ。詮家さん。  
俺の口はどじまる」ことを知らない。

くそつ！売られた喧嘩は買うしかない。

「いやはや、八郎様には驚くばかりです。

たまに私よりはるか遠くを見ている気さえしますよ。

さすがは兄上の子というべきでしょうか。いやはや未恐ろしい。

忠家さんが俺のことを褒めちぎつてくる。背中をバンバンたたかれた。痛い。

それは違いますよ。今回ばかりは本当に。

そんな俺の様子を詮家が悔しそうに見つめているのが視界の隅に映つたが気にしないことにした。

「まで、お前も行くんだよ。見逃してもりおつなどと甘く考えはよすぎだな。」

「こいつ忍び足でこの場を逃れようとしていた桃寿丸を捕まえる。

「ひえ」

声を上げる桃寿丸の首根つじを捕まえ、忠家さんの後ろに立つこといく。

「みのがしてー」

桃寿丸の声はよく響いた。

別のところに作つてあつた天幕のなかに入ると、すでにある程度の準備はできているようだつた。

これから始まることに内心泣きたいものであつたが、詮家の前でそんな姿は見せられない。

悲しいが男のプライドである。

忠家さんが一番上座に毛皮をひいて座つている。手には扇子である。

堂々としたものだ。俺も見習いたい。

その周りを甲冑をかぶつた部下たちが護衛するように並んでいる。皆、臨戦態勢さながらの様子である。俺たちはその一番下座に座つている。

忠家さんが合図をすると部下が入つてくる。手には案の定生首を持っている。

首を台に乗せ、親指を首の耳に差し込んで、ひざまづいて首の右の横顔を忠家さんに見えるようにしている。

これが次から次へと入れ替わり立ち代り行われている。

思つてたほどひどいものではなかつた。

出てくる生首はある程度化粧されているだらつものが多かつたし、両田は悶じられていて、合戦の最中に死んだとは思えないものだった。

しかし、氣味が悪いことは変わりない。

胃から押し寄せてくるものがある。

気分悪そうにしていると、後ろに控えていた小西行長こにしうきながが桶を持つ  
てくれた。

「吐けということか。」

叫びたかったけど叫べなかつた。そんな雰囲氣ではない。  
仕方なしに桶に今日食べたものを出していく。  
途中からは出すものもなくなつてしまつたが……  
それでも目だけは外すまいと努めた。

ちなみに横にいたはずの桃寿丸とうじゅまるはすでに見当たらなかつた。  
後で行長に聞いたら、泡を吹いて倒れたので、急いで運んだらし  
い。

詮家は生首など見もせず、そんな俺と桃寿丸を見ながら一ヤ一ヤ  
していた。

## 上月城の戦い 後編（後書き）

最近、桃寿丸がかわいくて仕方ありません。

いつも読んでくれている人ありがとうございます。  
できれば感想が欲しいでゲソ！！！

## 山陰の麒麟児

俺が桶の半分ぐらいを吐瀉物で埋め、胃液を搾り出さうとするに出てくる生首が途絶えた。

忠家さんただいえが俺のところに来た。

「戦後処理もすんだゆえ石山に帰らうと思こます」

石山とは本願寺ではなく宇喜多の本拠地の岡山城のことである。

俺は異論はないので、というかもつ早く帰りたい。

「わかった。歸るまでが戦争だぞ。」

遠足じゃないんだからと自分に自分で突っ込みつつ桶を後ろに隠し、威儀を保とうとする。

「ははつ」

そういう残すと部下のところに行き大声で指示を飛ばす。

そして俺と桃寿丸、小西行長こにしじゆきながは他の宇喜多軍とともに歸路についた。

もちろん毛利軍も一緒である。

俺も桃寿丸も行長も馬上の人である。

俺は馬に乗るのは下手である。先生として付いてくれた忠家さんに匙スプーンを投げられた。

決して戦場で乗つてはなりませんぞ。と念を押して言われた。しかし、ゆっくりと移動するぐらいなら問題ない。

途中、福岡といつといふを出た

福岡といつても九州の福岡ではない。前世での岡山県瀬戸内市あたりだらう。

そして吉井川を渡ればもうすぐ岡山だ、といつといひで俺は奇妙なものを見た。

檻の中に入っている。

なんだろうと思ひ近寄つていこうとすると行長に止められる。

「あれは毛利軍の虜囚りよしゅうです。あまり近寄らない方がよろしいかと。さらし者にされているところを見るによほど毛利は虜囚のことを嫌つてているのだろう。

「なんという名なのだ？あの虜囚は？」

「彼は山中幸盛やまなかゆきもりです。尼子あまいの家臣でしよう。毛利と尼子の因縁は根深いです。

おそらく程ないうちに毛利に殺されるでしょう。」

「そうか。」

答えてから考える。山中幸盛、どこか引っかかる名前である。

2・3日過ぎても引っかかりは取れない。

途中吉井川を渡つた。

あと少しで岡山城である。

しかし俺の疑問はなかなか解決できていない。

うーん、山中幸盛……

考え込む俺を桃寿丸が不思議そうに覗き込んでいる。  
無視だ、無視。

毛利、尼子、山中……

これらのペースを当てはめると

あれ？ そうじゃね。ひらめいた。

そうだ、そうだ。前世で結構有名じゃないか。

戦国時代を少しかじつているならわかる名前である。

何で今まできづかなかつたんだね？

虜囚ということは上月城に籠つていたということだ。

ということは、尼子側である。

そして尼子で山中姓で尼子再興のためひたすらに働く男。

やまなかじかのすけ  
山中鹿之助だ。

そりだそりだ。幸盛なんて変な名前付けてるからわからなかつた。  
鹿之助だよ、鹿之助。

「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」の鹿之助だ。  
山中鹿之助は後世に名の残るほど、有名な人である。  
戦もうまかつた、と聞いている。武勇にも優れてい。  
ぜひ俺の家臣にしたい。

そういう気持ちがむくむくと湧き立つてきた。

本能寺の変まであと4年、関が原までは20年ちょっとである。  
それまでに、どちらで動くのかはまだ考えていない。  
もちろん他にも介入できるところはあるだろう。  
俺の田指すところはとりあえず島流しは嫌だ、とこいことである。  
それには徳川の世にしてはダメである。  
どちらにしても俺の直率の家臣、俺の手足になってくれる家臣が  
どうしても必要である。

山中鹿之助、是非欲しい。

尼子家の再興を望んでいるのだから、毛利ににらまれるとこいつ  
メリットはある。

しかし、どうせ毛利とは近いうちに決別する、はずである。  
問題ないだね？

「小西行長、俺は彼が欲しい。」

俺一人ではこゝへり家臣が欲しいと書つてもどうもつもない。

忠家さんに頼んでもダメだろ?」

忠家さんは宇喜多軍大将としての立場がある。

俺は山中鹿之助を救出するつもりである。

あくまでも個人としてである。宇喜多を出すのは得策でない。

「うーん、難しいですね。」

そんな俺の気持ちを理解してか、しないかわからないが行長は面白そうに考え込んでいる。

「お前ほどでも案がないか。」

「いえ、あるにはあるのですが……」

「聞かせてくれ。」

行長は少し迷った後、俺に話してくれた。

「まず、毛利軍にこのまま石山城を通り過がつてもらい、備前から出て行つてもらいます。

そのあと、備中に入つてから隙を見て護送しているのを襲つしかねいでしうね。」

「そうか……」

「ですが問題があります。まずはこの計画に同調してくれるもの、つまり襲う兵がいません。」

そして毛利軍が隙を見せるか。といつことですが、かなり難しいでしょう。

まさに神に頼むしかないでしょうね。アーメン。」

そういうて行長は手を十字に切る。絵になるやつだ。

「むう……では無理なのか、惜しいな、惜しすぎる。」

「そんなに気になるならとりあえず毛利軍についていつたら? 何とかなるかもしれないよ?」

無責任な発言をするのは最近影が薄くなりがちな桃寿丸である。

「お前……少しばかり考えていいよ。」

「いえ、結構いい案かもしません。毛利としては尼子の火種は絶つておきたいところでしょう。

といふことは郡山まで行く前に毛利が殺害しようとするかもしません。

そこならあるいは……可能性はあります。

「行長がそういうのならそうかもしれんな、よし、じゃあ毛利軍をつけるか。」

「ええええええええええ。危ないよ、絶対に、しんじやうつて。」

「大丈夫。大丈夫。気づかれないって。」

「八郎様、私も賛成するわけには行きません。私はお守役を仰せつかりっています。

危ないことさせることは。」

「行長までそんなこといつの？困ったなあ。」

俺は頭を抱える。考える時間は余りない。岡山城はすぐそこまで迫っている。

「とりあえず忠家さんに頼んでみるかな。行長つて兵を率いたことがある？」

「いえ、私は商人上がりなので……水軍なら多少の心得がありますが。」

「じゃあ行長に兵を付けることは適わないか。」

俺がそういうと行長が意外そうな顔をする。

「商人上がりの私に兵をつけてくださるといわれるのですか！！！」

この時代、商人は徹底的にさげずまってきた。

江戸時代の身分制度である士農工商がこれを如実にあらわしている。「俺が兵を持つてゐるなら全軍お前に預けてもいいけどね。まあ夢物語か。

そんなことより何とかしろよ行長。桃寿丸は……いいや。」

「そのようにいわれましても、今回は縁がなかつたということで諦め「絶対ヤダ。もういいや。俺は行く。桃寿丸行くぞ。後は任せた、行長。」

俺は馬をおり、桃寿丸の首根っこをつかみ、行長に捕まらなこよつ  
に速攻軍列を離れ山の中に入る。

「ちよ、お待ちください。」

とこう声が後ろから聞こえたが無視する。

「これも神が与えてくださった試練といふことか、アーメン。」

## 家臣たち

「すみません。私の不徳です。この罰はいかよつとも。」

「ゆきながただいえじゅっぺ 行長が忠家に頭をたれている。」

「いや、罰を受けるのはハ郎殿だ。今度ばかりは絶対許さんぞ。」

それにしてもハ郎殿は本当に七歳なのか……。

「山中幸盛を助けると、毛利を襲うと、何を考えているのだ。」

「真に申し訳ございません。」

「なんにしても……なんにしても……だ」

そういうて、忠家はその場で地団駄を踏む。

「とりあえず搜索のために兵を出すしかあるまい。」

「二百いや、八郎様のことだ三百は出さないと安心できないか。誰か率いるものはおらぬか。」

忠家は諸将を見渡す。

誰も名乗り出るものはない。

行長は名乗り出たいが、黙つてしているしかない。

詮家は声を潜めて笑っている。

他の将もやつと戦が終わって帰つてきたといひである。今更子供の御守などしたくない。

その時、1人の男が前に出てきた。

「私が行きましょ。」

「おおつ、明石全登殿。いつてくれるか。そなたなら安心できよ。」

「お任せを。」

「私も汚名返上のため同行をお許しください。」

「つむ、許そづ。」

「ほう、迷惑をかけたな。」

追つてきた行長に俺はあっさりと捕まってしまった。  
目的を知らされているため当然といえば当然である。

行長は泣きじゃくっている桃寿丸とうじゅまるをあやしている。

「迷惑なんてものじゃないですよ。帰りますよハ郎様。」「  
帰る?何言つてんだ。これからが本番だよ。ほら、兵も揃つたし。

「行長が口をあんぐりとあける。

「これが狙いだつたのですか。」

「さあ?どうだつたかなあ。兵を率いているのは誰だ?」

「私です。明石全登あかしじたけのりです。以後お見知りおきを。」

何度も親父の側で見たことのある顔である。面と向かうのは初めてである。

「明石、明石か……」

前世で明石といえれば明石元次郎あかしじょんじろうである。

丹露戦争のときの諜報活動は有名である。あと確か台湾總督とうわんそうとくもしていた気がする。

それの祖先ということになるのかな?

これは使えるかもしない。

「明石全登、なんという漢字を書くのだ?」

明石全登は地面に木の枝で漢字を書いた。

「そうか、これでたけのりか、難しいな。これからばぜんと呼ぶぞ。」

「それはよろしいのですが、帰りませんと。忠家様が心配しておら

れます。」

「忠家叔父さんが？ 相変わらず心配性だなあ、  
気にするこことはない。俺からいつておくから。  
全ての責任は俺がかぶる。」

「ですが……」

「なんだ、まだ納得できないのか。仕方のないやつめ。  
宇喜多直家が嫡男、八郎が命ずる。全ての指揮は俺が取る。いい  
な。」

俺はぜんとを睨み付ける。早くしつかりした名が欲しい。八郎では  
は締まらない。

「わかりました。」

ぜんとは困った顔をしている。

「よし、ぜんと。お前が指揮を取れ。毛利をつけるぞ。  
目的は山中鹿之助の奪取だ。  
行長はぜんとの軍師だ。

双方とも期待しているぞ。」

「ははっ」

二人は頷いて俺が去つていくと顔を見合せた。

「本当にの方は7歳なのか？ 忠家様の苦労がよくわかる。」

「諦めよ、ああいう方なのだ。」

一人は苦笑するしかなかつた。

すでに岡山城を過ぎ、備中に入つた。

備中とは今でいうと岡山県の西部である。

すでに俺とぜんと率いる200名は宇喜多と足が付くものを山の  
中に隠してある。

盗賊と見間違えられてもおかしくない格好である。

「備後までですかね。」

行長が念を押す。

「わかつていい。そういうえば、ゼンとも十字架をつけているが、キリスト教徒なの？」

「はいそうですよ。洗礼名はジョアン・ジュストです。」

ゼンとは十字架を握り締める。

「そうか、行長と一緒にだな。」

「おおっやはり行長殿もですか、そうではないかとは思つていたのですよ。」

「明石殿もキリストンですか、奇遇ですね。」

他愛ない雑談をしているとふと毛利軍に動きが起つた。

1人の男が馬に乗つて駆けてきたのだ。

そして、山中鹿之助の近くの兵士に何かことを指示を出した。

「行長殿、どう思う?」

「あれは、たぶん吉川元春でしょう。」

「そうか、私もそう思う。」

「とうとう動いたか。」

俺は飛び跳ねる。

そして毛利軍に本格的に動きが起つた。

山中鹿之助を護送していた兵士たちが、隊列を離れ、別の道に向かつて歩き出したのだ。

「良し、追うぞ」

俺らもそれについて行く。

「おひ、出る。」

「ほつ、こじが拙者の死地か。尼子再興の野望もここまでか……」

「毛利に逆らうからこいつなのだ、俺らを恨むなよ。恨むなら吉川

と毛利を恨んでくれ。」

「これも運命か。如何ともしがたし。口惜しいが、経久様、今参ります。」

「その夢、俺に預けてみないか！……」「誰だ！……！」

「その命、私がもらおう。」

「誰だ！……貴様、尼子の残党か！……」

「悪党どもに名乗る名はないわ！」

もちろん俺の顔には布を被っている。

横には同じ格好をした桃寿丸が恥ずかしそうにしている。こういふのは吹つ切つた方がいいのに。

「くそつ……へんちくりんなかつこうしゃがつて……」

「山中鹿之助、尼子再興のために人生をかけた男よ。」

「我は山中幸盛だ。人違いではないのか」

「いや、お前は鹿之助だ。少なくとも今日から鹿之助だ。」

尼子を一時的でさえ復興させ、数多の武将を討ち取つてきた男よ。お前の力が欲しい」

「ほう、拙者の力が欲しいと。しかし、この状況ではどうじょうもないわ」

「私が欲しいのは貴様の返答のみだ。それ以外を問つているのではないわ」

もう一度尼子を再興の道を手指したいとは思わないのか？」

「拙者に機会をくれるということか……」

「そうだ。お前は亡き勝久殿のためにも尼子再興をもう一度志さなくてはならない。」

俺の元でな。

あがけ、鹿之助！最期までみつともなく足搔いて、そして死んで逝け！」

「確かに我の悲願は尼子再興のみ。しかし現状ではどうとなるとも思えんがな。小童。」

貴様一人で何とかできるとでも?」

「ふつ」

俺は右腕を高く上げる。

背後に控えていた兵士が一斉に「」を構える。

「鹿之助を置いていけ。そうすればお前らの命は助けてやる。」「ひえええ。」

毛利の兵士が逃げ出していく。500対30ではそうなるわな。

「くそつ逃げるな。相手は頭のおかしい盗賊だぞ。」

指揮官であるう人物が部下をどじめようとするも効果は上がらない。

「よしつ敵は逃げ出したぞ。追えつー」「

ぜんとは部下に叱咤をかけながら駆けていく。

毛利軍は一矢交えることもなく逃げ出してしまった。

後には鹿之助だけが残されている。

俺は黒い布を取りながら、鹿之助に手を差し伸べる。

「俺の部下になれ。報酬は尼子の再興だ。」

「拙者があ主の部下になると、笑えぬ冗談だ。」

「力は先ほど見せたはずだが?」

「もう……確かに、お主、何ものだ?」

「俺か?宇喜多直家が嫡男、八郎だ。」

「宇喜多……そうか、宇喜多か。宇喜多なら尼子再興も可能かもしれない。」

「いいだろう、お主が尼子再興を助けてくれるといつなら部下にでも何でもなつてご覧ぜよう。」

鹿之助が俺の手を握り返してくれる。

鹿之助の力に引っ張られふらりとするもののない根性で耐え忍ぶ。

「うして、鹿之助が仲間になつた。」

「そういえば行長も俺の部下にならない？」

「いえ……ありがたいお話ですが、商人上がりの私には荷が重い話です。」

「ふーん、そつかあ。秀吉のところでも行くのかなあ？」

「いえいえ、滅相もありません。」

厚顔無恥なやつめ。

「ふーん。俺の部下になつたら、ヨーロッパ留学つけてあげるナビ？」

「ようろうっぱですか？」

「うん、南蛮人の本拠地。バテレンの総本山つてとこかな。」

「キリスト教の？ほんとですか？可能なんですか？かなり遠いと聞きますけど。」

行長が詰め寄つてくる。

「たぶん……五、六年じゃないかな。留学させてあげるよ？法王とかいるよ。キリストの一一番偉い人。」

「なります。ならせてください。」

「行長が平伏する。商人上がりだからなのだろうか。現金なやつめ。「私も行かせてもらえないでしようか。部下でも裸踊りでもやりますよ。」

「せんと……そういえばお前もキリスト教徒だつたか。」

「いいけど、お前ら宗教にはまるのもたいがいにしておけよ。」

「なせです。キリスト教はすばらしいですよ。今の腐つた仏教よりはるかに。」

「まあそなうんだらうけども、結局は人の作ったものだからさ。」「神はいますよ。」

「行長どぜんとは目が真剣だ。ちょっと怖い。」

「まあ、いいや。行けばわかると思うよ。」

「見てきたようにいわれますね。」

「少し知識があるだけさ。」

俺はこの話はもつお終いと手を振ってみせる。

「お前、今度ばかりはお咎めなしこうわけにはいかないぞ。」

「俺を見下ろす親父の目がある。」

男色、謀略、暗殺なんでも『それの守喜多直家だ。』

「戦場離脱、主の許可を取り戻す部下をとる、今度ばかりは許すわけにはいきません。」

「ぜひお耳に聴をお聞かねぐださー。」

備後から岡山城に帰つてきたら、待つていたのは忠家叔父さんの雷だった。

「ううん、俺は別に気にしてないんだけどな。」

「ただ部下を持つことは許すことはできんなあ。特に行長はなあ」  
「行長ばかりではありません。山中鹿之助も毛利氏のことを考えれば引き渡すのが最善でしょう。」

「山中鹿之助か……いや、鹿之助は八郎が持つておけ。しかし一応名前は変えておけ。」

まあ今の鹿之助で十分だる。余り目立たないようにな。  
問題は行長だ。小西行長、そちは承諾しているのか?」

鹿之助は一足先に俺の屋敷に帰つている。

行長は俺の後ろで今度の釈明を手伝つてもらつていて。

「はい。大丈夫です。今後も請け負いますゆえ」

「そうか……行長もお前が持つのもおもしろいからわかった。お主に行長と山中鹿之助をつけよつ

「しかし、それでは他のものにもしめしがつきますまい」

忠家叔父さんが食らいつく。

忠家  
ただいえ

「それもやうか、すまんなハ郎。

お前の自主的という形で蟄居ちつきよする。そうだな、3年程度でどうだ

? 忠家

「3年ですか? 少しあくないですか?」

「罰を『えり』といったのはお前だぞ。これでしまいだな。

そうだ、鹿之助と行長のことは外に出すではないぞ。

行長はしばらく俺の家臣いわみで、お前に預けるという形をとる」とい

する。

鹿之助はハ郎についておけ。ハ郎と同じく蟄居ちつきよしておれば大丈夫だろつ

この場合外に出すなどいふのは物理的に出なくて言論的にである。話が漏れることを恐れたのだ。

俺が早期に俺自身の部下を持ちたかったことにも関わっている。

これは宇喜多家の家風に影響する。

宇喜田直家ひきたなおじやとは謀略など表ではいえないことのみで一国を取った男である。

その家臣も大なり小なり謀略と関わっている。

もし鹿之助を匿かくましていることが家臣いわみにでもばれた場合その家臣は

喜んで毛利氏に密告しに行くだろつ。

そして毛利氏で好待遇を得ようとするだろつ。

宇喜田家の家臣は爆弾と思つていいだろつ。

「3年かあ。長いなあ

城を出たところでため息をつく。

「耐えてくだされ。この行長も時間ができしだい顔を出しますやん。

書物を読むことも、鹿之助にものを教わるのも良いでしょつ。

有意義な時間をお過ごしくだされ

「3年かあ。長いなあ

城を出たところでため息をつく。

「耐えてくだされ。この行長も時間ができしだい顔を出しますやん。

書物を読むことも、鹿之助にものを教わるのも良いでしょつ。

有意義な時間をお過ごしくだされ

うげつ。この時代の書物は漢文が多いから嫌なんだ。小説でもあればいいのだが孔子とか孟子とかのお堅い書物ばかりである。勉強しあうといふことか。

「ハ郎。ハ郎」

後ろから呼び止められる。桃寿丸とうじゅまるだ。手を振りながら走つてくる。あつ。こけた。おおつ。起き上がつた。涙目だ。

「どうだつたんだ？怒られたのか？」

「こつひどくな。これから3年蟄居だ。桃寿丸の方はどうだった？」

「今日は見逃してくれるって。ただ、父上の下で勉強するようになつて城勤めを始めることになつちゃつた」

え？ 何？ この待遇の違い。これが口くちづりの行いといつやつか。  
「そうか、親父のところなら学むぶことも多いだらうな。頑張つて來  
い」

「うん。ハ郎も蟄居、頑張つてね」

蟄居は頑張るものではないと思つが、満面の笑みで応援してくれ  
る桃寿丸に免じて突つ込まないおいつ。

俺の蟄居先になつたのは山の中にある小さな寺てらだった。

本當は自宅の一室いっしつらしいが俺は正式な自宅じやくというか城、居住を持つ  
つていないため特別に寺てらをあてがわられた。

「これはまた趣のあるところですね」

「行長、これはぼろいというのだ」

「主殿、このようなとこ向むかいませまい。寝れるだけましだ  
といつものです」

鹿之助。泥づをすすつていたお前と不幸比ひべをするつもりはないぞ。

「住職。住職はいるか」

「はいはーい。今行きますよー」

中から間延びした声が聞こえてきた。

出てきたのは女の子だった。女の子と少女の間ぐらいいだろひ。  
かわいい。目がパツチリしており、短い黒髪がボーアイッシュな雰  
囲気をかもち出しておりいい感じだ。

「住職？」

「いえ、えーっと……あなたは？ どちら様ですか？」

おどおどと声をかけてくる。

警戒されているのが一発でわかる表情と態度である。

「ハ郎です。こっちが鹿之助でこっちが行長。今日からこいつりでお  
世話になるものですけど」

行長と鹿之助が俺の言葉に合わせて会釈をする。

「あー、えーっと」

指で宙に文字を書いている。別に困らせるつもりはないんだが。

「おう、お香。どうした？ お客さんかい？」

中から住職と一発でわかるお坊さんがいた。  
袈裟をかけているのでわかりやすい。

「おう、きたか。お前がハ郎か。連絡は請けておつたぞ。」

俺のことをどう連絡されたのか知らないが、一国の城主の御曹司  
に向かつてこの態度……

お香といわれた少女とは全く正反対の態度である。

「これからよろしくお願ひします」

「そうかしこまらんでも良い。2人と聞いていたが、もう1人は？」

「私はすぐ帰らせてもらいます。これから仕事もござりますし。」

「そうか、そうか、では用意しておいた部屋でよいな。私は慶明だ。  
この子はお香という。現在この寺で預かっている。ハ郎とも年が近  
いゆえに身の回りの世話はこの子にさせることにあるか」

「よ、よろしくお願ひします」

お香が慶明の後ろに隠れながら答えた。  
めっちゃ警戒されている。

一通りの紹介を終えた後、部屋に通された。

「こちらでござります。日常生活で必要なものは一通り揃っていると思いますが、必要なものがございましたら声をかけてください」

お香は俺の部屋まで案内してくれた。

俺は持ってきた荷物を置いて足を伸ばした。今から3年間ここで過ごすことになるのかあ、なんか感慨深いものがあるなあ。

「主殿はこちらの部屋でしたか。拙者は隣の部屋になり申す。これから楽しみですな。みつちり稽古つけますからな。」

鹿之助はがっはつはつと豪快に笑う。

「行長は?どこいった?」

「先ほど、城づとめに戻るといつて帰られました。」

「そうか、これからよろしく頼むぞ。鹿之助。」

## 蟻居及び近隣情勢 その1

てんしょう  
天正 7年

俺の蟻居生活は1年を過ぎた。  
ちうきょ

お寺からは未だに出れない。

蟻居とは前世でいう謹慎である。

表向きは自発的ということになつていて、

蟻居生活は意外と快適である。前世ではひき籠りであつたため問題なくすごせている。

娯楽が全くないのが大変不安だつた。もちろん娯楽がないのは変わりない。

しかし最近では漢文を読んだり、古文を読んだりするのもなかなか楽しくなつてきている。

源氏物語など萌え小説として読めるものだ。

何よりお香が俺のことを甲斐甲斐しく世話してくれるのが嬉しい。腫れ物に触るようになると、声をかけたら逃げられることもたくさんある。

あれ？ 少し涙が出てきた。

しかし、衣・食・住が保証されていて女の子が世話をしてくれるなんてすばらしい待遇である。

しかもそれが美少女だから王侯貴族の生活そのものだ。  
そういうえば俺王侯貴族の一員なんだよな。一応。

寺からは出れないが寺の中では自由である。

最初の三ヶ月は鹿之助に武道を教わっていたが、俺に才能がないこと、やる気もないので匙スプーンを投げられた。

「まあ、主が武器を取るときは戦も負けでしょうから。気にする」とないですよ」「

氣を使われてしまった。

武道に当てていた時間はお寺の手伝いをすることにになった。

残りの時間は慶明や、鹿之助の話を聞いたり、漢文を読んだり、古文を読んだりしている。

蟄居チリ居といつてもは出歩くのはダメだが、訪ねてくる人を迎えるのは問題ない。

よつて時たま、俺を訪ねて人がやつてくる。

忠家おじさんや親父などである。

親父は政務で忙しいらしいが、できる限り時間を見つけては顔を出す。

「元氣でやつてるか？ 大事無いか？」

などを聞くだけ聞いて、忙しい忙しいといいながら戻つていく。

本当にあの直家なのかと思つてしまう。

忠家叔父さんもやつてくる。

「問題は起こしてないか？ 慶明殿に迷惑をかけてないか？」

とか聞いて、鹿之助から俺の最近の動向の報告をきくと慶明殿と一緒に「南無妙法蓮華經」を一通り唱えた後、帰つて行く。

行長もちょくちょくやつてくる。

行長が来るときは桃寿丸とうじゅまるもつれてくる。

行長は必ず京や壇さかい、織田方の情勢を持つてくれる。

最近ではそれに対して、俺や桃寿丸とうじゅまる、鹿之助、慶明、行長ゆきながで話し合いつづか、今後の情勢を議論することが日課になつていた。

俺はある程度の歴史の流れ自体知っているが、そこまで詳しくわからない。

なかなか楽しいものである。

前回までは、こんな感じであった。

上月城の戦いで本格的に中国に手を伸ばした信長であったが、現在では中国地方まで手を伸ばせなくなっている。

信長の家臣である、荒木村重の謀反にあつたからである。

荒木村重。あらきむらしげ俺の前世では聞いたことがない名前だ。

この荒木村重という人物は、摂津を信長から任せられていた。

摂津とは大阪と兵庫の間である。

もともとは摂津を守る守護である池田氏の家臣であつたが、織田の三好三人衆の調略に乗じて池田家を掌握した。

その後、信長の家臣となり武功をあげていつたらしい。

一時期では、信長の家臣として上から柴田、丹羽しばた たきが（にわ）、一滝

川わ、明智、羽柴はしば あき、荒木と名を知られていたほどである。

その荒木が突然の謀反を起こす。

荒木村重が謀反を起こしたことで、信長の戦線は4つになる。石山の本願寺、播磨はりまの三木城、摂津の荒木村重、丹波の波多野である。

この4つには共通点が存在する。

毛利を頼っていたこと、包囲戦という形式を取っていることだ。

いつかは毛利が織田を倒す。京に乗り出していくことを期待していると考えられる。

実際、毛利はその圧倒的な水軍力でもつて本願寺に物資を送つている。

しかしそれも信長の命を受けた熊野水軍、九鬼嘉隆くきよしたかが毛利軍を破

つたことにより途絶えた。

世に有名な鉄甲船である。

そのほかの3つは内陸国である。毛利は補給と物資を簡単に送ることはできない。

この点、信長の戦略は徹底していたといえる。

元を断つ。物資の補給を途絶えさせる。

そうすれば物資の補給、兵の多めで誇る信長軍に抵抗できぬ」とは不可能になる。

信長の戦略眼の恐ろしさである。

さすが、信長といえる。俺は田を輝かしながら行長の話を聞いたものだった。

このよつな情勢に対し、議論する。この時代、京の情勢の情報は大変貴重である。

争点は、毛利が来るか、織田はこの危機を乗り越えるかといふことである。

一時期は備前と播磨の国境まで迫ってきた織田信長は中国地方まで手を伸ばせなくなっている。

桃寿丸と鹿之助は、毛利は来るよ派である。

「毛利は義理堅い。本能寺への支援を見るがいい。此度も参陣するだろ?」

「僕も毛利は怖いと思う。信長は謀反とか起こされてるから地盤がしつかりしてないからなあ」

という主張である。

それに対しても慶明の考へは信長は、一時毛利と休戦を結ぶのではないかということである。

第一次信長包囲網のときのよつに、土下座外交、各個撃破を行つのではないかと見てゐる。

「信長に人望というものがここまでないとは」

行長と俺は、毛利は来ないよ派である。といつより来れないよ派である。

「毛利は来れません。現在の毛利は輝元を小早川と吉川の2人で補佐している形です。

このような体制では、毛利は内に内に籠ることになり、遠征は難しいでしよう。

それに毛利の家風もあります。毛利元就は子孫に中央に関わることを禁止する家訓を残していると聞きます。

京に進出するのは控えるのでないでしようか?」

俺の意見も行長と大差ない。一つ付け加えるなら、補給の問題である。

毛利から京は遠い。その間の、宇喜多領、播州、摂津、を通つてやつと京に着く。

織田に对抗するにはどんなに低く見積もつても兵3万は必要だろう。

補給線がない。

仮に船で渡り上陸するとしても、3000名ほどしか輸送できない。

これは俺の考え方である。

前世の史実でも信長はまだ死ぬようなことはないのだから、毛利は来ていないのである。

前回の行長<sup>ゆきなが</sup>来訪はこんな感じであった。  
そして、久しぶりに行長がやってきた。

「ハ郎様、一大事です」  
行長が血相変えて飛び込んでくる。横には桃寿丸<sup>とうじゅまる</sup>もいる。桃寿丸  
は肩で息をしている。

俺のために水を運んできてくれたお香<sup>こう</sup>がビクッとして心して水を少  
しこぼしてしまった。

「んん？ 行長かよく来たな」  
「直家<sup>なおいえ</sup>様や、忠家<sup>ただいえ</sup>様からおつて報告があると思いますが、我が家  
が降伏いたしました」

「真か？ 父上<sup>ちじょう</sup>が降伏したと？」

「はい。その通りです」

「相手は織田か？」

「ご明察です。ハ郎様。余り驚きませんな」

「まあ、いつかはそうするだろつと思つていたしな。あの父上だ

し」

そう、前世の本能寺の変では秀吉は毛利を攻めていた。  
そして、その後宇喜多家は秀吉の下で繁栄するのである。  
流れとして、降伏するはある程度の予想はついていた。前世の  
歴史と変わりないだろつ。

今のところ、俺がいることで歴史は変わっていないと見てよい。

「さすがですね。桃寿丸様は腰が飛び上がるんばかりに驚いておられたのに」

「行長！ それは言わないのでつて言つたでしょ」

「いや、失礼した。

私も少し余裕が出てきたのでこちらに住居を移そうと思つたので拝謁に伺つたまでです。

いかがでしょう？」

「俺はいいが、住む部屋があるかどうかは慶明に聞いてくれ。俺は人質にいかなくていいの？」

「いや、もう驚いたりしませんよ。私の口からは何もいえませんが近いうちに忠家様か直家様が来られるでしょう」「ああ、人質になるということね。人質かあ。やはり余りいい気分にはなれないものだ。

「で、京や織田家の様子はどうなつてる？」

「長くなりますゆえ、今日の夜にでもお話ししましょう。」

行長は、席を立ち、慶明に挨拶に行つた。

部屋があるかどうかを聞きにいくのだらう。

「人質に行かれるのですか？」

お香が給仕の手を止める。

俺はお茶をゆっくり飲み干す。

「何だ聞いていたのか？」

「すみません。すみません。」

いつもの調子でお香はあやまつてくる。俺のことが怖いのだろうか？ 一年前から一向に変わらない。ついからかいたくなつてくる。

「聞いたな？ なら生かしてはおけん。そこに直れ、手打ちにしてくれる」

「冗談半分のつもりで口調を荒げる。

だが俺への反応は予想外なものだつた。

「いやああああ。すみませんすみません。許してください。」

マジ泣きである。

え？ そこまで？ なんで？

俺の思考回路が真っ白になると同時に、騒ぎを聞きつけた慶明が入ってくる。

「どうした？ これは、いつたい？」

「いや、その……冗談のつもりだつたんだ」

言い訳にもなっていない。

大体の事情はわかったのか、慶明はお香を俺から引き剥がし、連れて行く。

「遊びが過ぎるわ。女子供を脅して楽しいものでもないわ。」

言い返す言葉が見つからない。

悪いのは俺である。

1人残された部屋で寝転ぶ。

あの反応はないよなあ、もう少し冗談といつものをわかって欲しい。

精一杯自己弁護するものの、悪いのは自分という意識があるため氣分は晴れない。

自己嫌悪の気分でいっぱいである。

1人で考え込んでいると慶明さんが入ってきた。

「どうでしたか？」

「だいぶ落ち着いたようじゃ」

「この度はすみませんでした」

「いや、昔はもつとひどかった。だいぶよくなつた方だよ」

あれでよくなつてているのか。昔はどんだけひどかったんだよ。

「話しておかなかつた私が悪いんでしきうね。それにしてももう少し考えて行動してもらいたいのですね」

「悪かった。それにしてもどうしてあんなこと……」

「私が話せるることは限られているが、それでよろしいか？」

「つむ、よろしく頼む」

「5年も前のことか。わしが戦場の跡で拾つたのだよ。

両親らしいむぐりの横に座つて泣いておつたのが彼女だ。」

「五年前つてまさか」

「そう、宗景とお前の父、直家の戦いだ。」

「そんな……じゃあお香の両親の仇は、俺の父親つてことか。そ

のことをお香は？」

「もちろん知つてこる。が、今時そのようなこと巷であふれかえつてあるわ。

お香も仇などとは考えておらんだろ？

しかし、預かつて気づいたのだがどうも待をみると拒絶反応を起

こすようだなあ。

お前を預かるときもどうつか考えたのだが、よく聞けばまだ幼子と聞く、これならお香の治癒にもいいじゃね？ことで預かつてみたのだが。

失敗だったかなあ……

そういう事情があつたのか……完璧に俺のミスである。

悪いことをしてしまった。

「それは、本当に申し訳ないことをしてしまった。」

「私にいつもしようがない。後であやまつておきなさい」

慶明さんは、そのまま席を立ち部屋から出て行つた。

また一人つきりで部屋に残されることとなつた。

一人つきりでぼんやりと天井を見ていたが、考えが煮詰まつてしまつてどうしようもなかつた。

「とりあえず、謝りにいくか

俺は意を決して立ち上がつた。

「入るや」

お香の部屋に声をかける。

「どうぞ」

中からか細い声が聞こえてきた。  
そのままふすまを開け中に入る。  
中は俺の部屋と大差なかつた。  
畳に床の間があるだけだつた。  
女の子の部屋とはこんなものかと思つが、前世の記憶と比べても  
仕方がないと気づく。

そういうえば、俺前世では女の子の部屋に入つたことなんでないん  
だつたな。と改めて思いなおす。

何と比べるのかと内心苦笑する。

「先ほどは、すみませんでした」

申し訳なさそうにうつむいている。

「いや、悪かつたのはこっちの方だ。本当に申し訳ないことをし  
てしまつた」

「いえ、そんな……」

お香は言葉に詰まつてゐる。

「手打ちとかほんの軽い冗談のつもりだつたんだ。

許してもらえないかもしけないが、謝ることしかできない。『め  
んなさい』

俺は正座し、両手を畳につける。

「いえ、そ、そんな。そんなことをしていただかなくとも」

「いや、これはけじめだ。すまないこととした」

「あ、頭を上げてください。私、きにしてませんから」

俺は頭を上げる。精一杯努力して笑つてゐるお香の姿が映る。  
罪悪感でいっぱいになる。

「……」

「……」

とりあえず、許してもらつたみたいだが一人して沈黙してしまう。

「あ……」

「う……」

またしても沈黙してしまった。タイミングが良くなかった。

軽口を叩くしかない。

「こんなにかわいい子を殺すなんてもつたいないこと俺にはできないよ、はははは」

「え……そんな……いえ……」

あれ？ 場を和ませようとしたのに向こうの空気。余計ひどくなつてない？

なんか恥ずかしい」とつてるし。

「私がわいくなんてないですよ村でも顔のことや体形のことでいじめられてたしでもほめてくれて嬉しかったです」

しばらくうつむいていたお香だが一気にまくしたててきた。

「え？ いじめられてたの？ そんなにかわいいのに？」

「いえ、私なんて……」

再びうつむいてしまう。

空気が悪すぎる。

とりあえず、謝ったし許しももらえた？と思ひ。向こうの辺で退出すべきなのかもしれない。

「俺はこの辺でお邪魔するね。ほんとに今日まだねんなさー。」

俺はふすまを開け、その場を離れた。

そのまま部屋に戻る。

まもなく慶明が晩御飯ができることを知らせに来る。食卓につくとすでにみんな揃っていた。

桃寿丸もいる。

「今日は泊まりか？」

「うん。もう遅いし明日帰るよ」

ちなみに、この時代基本的に一日一食である。昼食は存在しない。自然とおなかが減るものである。

そんな中に出されるのは精進料理といつていいほどのものである。精進料理。簡単に言えば、粟やひえに味噌汁（具はわかめしかない）漬物、煮物程度である。

そしてさらに問題なのは、肉を食べる機会が全くといつていいほどないのだ。

甘いものなど一切食べていない。10年近く甘いものを食べていない。

「八郎様、今日は猪が取れましたぞ」

そんなもので成長期の俺が我慢できるわけがない。

鹿之助に頼み、肉をとつてきてもらうことにしていく。

毎日ではないが、自分で肉をとる機会を作らなくては、肉にはありつけない。

慶明さんに殺生はダメと言われるかと思つたら、そうでもないらしい。

慶明さんも肉をとつてきたときは嬉しそうにしていて。この時代の坊主の堕落ぶりがあらわれている。あれ？ でも前世でも肉食べたよな。変わりないのか。

たまにお香と田があうが、すぐに田を伏せられてしまつ。謝った。俺は謝った。許しももらえたはずだ。

罪悪感に押しつぶされそうになりながらも、食事を終えた。

食事が終わると、恒例の行長の報告に入る。  
時期はすでに冬に入っている。みんなで囲炉裏に座りながら行長の話を聞く。

お香も当然参加している。

「前回はどうまで話しましたか？」

「信長の4正面作戦のところからかな」

この時代京の情報は余り入ってこない。

備前

から京は遠い。

親父とかはある程度わかるかもしぬないが蟄居中の身としては表立つて聞くこともできない。

行長の情報は貴重である。

「丹波が落ちました。」

行長の一声はここから始まった。

「丹波と申すと明智光秀か？ いかよにして落とした？」

鹿之助が真っ先に反応する。

「そうではありません。そう、急がないでください。

確かに丹波に当たっていたのは明智光秀ですが、落としたのは違います」

「羽柴秀吉か」

俺が答える。

「「」名答です。秀吉殿は戦の定法、弱いところから叩くところを実践しました。

補給が少なく、兵が疲れている丹波に目を付けたのでしょうか。ちなみに丹波というのは京都と兵庫県の間である。平地が多い場所らしい。

行長は続ける。

「秀吉殿が丹波に入つてからは瞬く間に丹波を平定したと聞きます。

信長殿は秀吉殿の働きを見て、大いに喜んだらしいです。」

「明智光秀殿はおもしろくないな」  
慶明は頷きながら言つ。

「え？ どうして？ 丹波が平定できたってことはないじやないの？」

桃寿丸は首を傾げる。

「もちろん織田にとつてはいいことだが、明智光秀は長い期間丹波の攻略に時間をかけていたのだ。

これに秀吉が介入して一気に形勢が変わるとなるといい感じはないだろ?」

慶明が返答する。

「慶明殿のおっしゃる通りです。確たることは聞いておりませんが、光秀殿は悔しがっていると風の噂で聞きました。どうやらすでに光秀と秀吉の対立構造ができつつあるらしい。」

「丹波が落ちたことがしれると播磨はつまの荒木氏もすぐに攻略しました。

荒木村重は妻子と家臣を置き去りにして逃亡したそうです。信長殿はこれに対したいそが激怒し、城に残った妻子、家臣、避難した領民までも全員殺戮べつしょしたそうです。

残りの別所氏の三木城、本願寺が落ちるのも時間の問題でしょう」と締めくくった。

「丹波が落ちるといつまでなんなりいくとわな。パズルみたいだな」

「パズルですか? なんですか? それは?」

「いや、独り言だ。きにしないでくれ」

俺と行長が会話していると、ついていけなかつたであらうお香があずあずと発言した。

「あの……なんで丹波が落ちると他の3箇所も攻略されてしまうんですか?」

桃寿丸もそだそだといわんばかりに首を振っている。

桃寿丸……お前は気づいてるよ。

「士氣しきですね。反信長連合は4箇所でせめざつてござるゆえに、一箇所が崩れると存外にもろいもの。」

鹿之助が言葉を返す。

それで合点がいったのか桃寿丸もお香も感心している。

「やはり、今回も鍵は毛利か。」

俺は食後のお湯を飲む。すっかりぬるくなっている。

「はい、ですが今回は我が宇喜多家が信長に降伏したため事情が少し変わりますね」

「なに!? 行長、なんと申した……!」

鹿之助が行長の胸倉をつかみかからんとする。

「宇喜多が降伏したと言ったまでです」

鹿之助は元織田家の家臣である。それだけに思つていろがあるのだろう。

「それでは八郎様も人質となれとでもいうのか、行長……!」

「私には何もいえません。ただ、近いうちに直家様か忠家様が来られるでしょう」

これには慶明も驚いている。

「お前はそれでいいのか……! 人質だぞ……!」

「私はどこまでも八郎様についていくまでです。あなたは違うとでも?」

「うつむ……すまなんだ」

鹿之助は腰を下ろす。

「私も同じ気持ちです。ですがこればかりは……」  
できれば俺のいないところでやつて欲しいものだ。  
こそばゆいといつかむずむずしてくる。

「」のまま今日の話し合には氣まずい空氣のままだった。

「今日はお疲れでしきから考えるのは明日にしましょう」と慶明がお開きしてくれなかつたら針のむしろ同然だつただろ

う。

床に入る。  
今日はいろんなことがあつた。

人質行きが決まり、お香に嫌われ、仲直りして、大変な一日だった。

俺の知る限り歴史は前世の歴史と変わらず動いている。

ということは俺の死はまだまだである。そして、島流しの運命を変えるにはどこかで歴史に干渉しなくてはならない。

そういえば、俺の嫁つて史実では誰なんだっけ？

お香……じゃないよな……

バカなことを考えてしまった。  
異様に恥ずかしくなってくる。  
もう今日は寝よう。そうしよう。

## お香の苦惱

お香は苦惱していた。

宇喜多直家、私の両親の敵である。

両親はしがない村の百姓だった。貧しいながらも私や弟たちを愛してくれた。

今思えば楽しい日々だった。

しかし、戦争によつて両親も弟たちも殺されてしまった。

私は山で山菜を摘んでいたため難を逃れたのだった。

私が見たのは、たぶん父であろう頭の潰れた男の姿と、腹から子宮にかけて真っ二つに切り裂かれた母の姿、手足のない弟の姿だった。

後に聞いたところによると、宇喜多直家がかかわっていたらしい。

今の世の中では仕方ないとよく言われる。領主を恨むのも筋違い

らしい。

慶明さんにも忘れた方が良いといわれた。

両親がいないのは私だけではない。あふれかえつている。慶明さんに付いて村を回るときなど同じような戦災孤児があふれていたこともある。

それを考えれば私なんて恵まれた方である。

慶明さんに出会えたからだった。

もし出会いなかつたらその場でのたれ死んでしまつか、人買いに売られてしまつただろう。

慶明さんには感謝しきれないぐらいたく感謝している。父と同じような暖かさもある。

最初のころは刀をさしている人を見るたびに悲鳴を上げた。

最近ではそのようなこともなくなりだいぶ良くなってきたと思つていた。

そのような時に慶明さんはあの男を連れてきた。

侍、よりによつて宇喜多直家の息子だつた。

殺したいくらい憎い。私の前に現れたらただではおかないと思つていた。

しかし、実際に私の前に現れたのは私のかつての弟ぐらこの年齢の子供だつた。

私の決心は揺らいでしまつた。

それでも、と思いなおし懐に収めた短剣で暗殺を試みた。

それも私の覚悟が足りないのか、未遂に終わつてしまつた。

どうしても手が震えてしまい行動を実行することができなかつた。そのときにある男は私を叱責したのだつた。

ばれたのではないか？

そう思つた瞬間怖くなつてしまい、泣き叫んだ。  
あのころと同じよつこ……

「入るぞ」

再び私の前に現れたとき私は処罰されるものだと思つた。  
相手はこの国の領主の世継ぎなのだ。

「どうぞ」

私は覚悟を決めていう。

「先ほどはすみませんでした」

もちろん本当に許されるとは思つていらないが、少しでもまともな死に方がしたいと思つたことは事実だつた。

「いや、悪かったのはこっちの方だ。本当に申し訳ないことをしてしまつた」

頭を下げてきた。まさか侍が頭を下げるなんて予想していなかつた。

私が混乱しながらそれでもこれ以上の失態は避けなくてはと思つた。

てこると、やたらに思いがけないことを口にされた。

「こんなにかわいい子を殺すなんてもつたいないこと俺にはできないよ、ははははは」

かわいい？ 私が？

私をお世辞にもかわいいといつてくれる人はいなかつた。村でも、町でも。

せいぜい母に「よく気がつく子だね」ぐらいしかいわれなかつた。髪も長いわけでもないし、ふくよかでもない。

このようなこといわれたのは初めてである。

悪い気はしない。それどころか顔が赤くなつてしまつのが自分でわかつてしまう。

相手は侍だ。自分に言い聞かす。

その後何を言つたのかわからぬ。完全に混乱してしまつていた。宇喜多八郎、普通の侍とは少し違うのかもしねりない。

そんなことを思つた。

一ヶ月ほどの時間が過ぎた。

その間寺での生活は平穏そのものだつた。

行長が加わることによつて、俺の読書、兼勉強もよりはかどる」ととなつた。

行長が京に行くことがなくなつたので、各地、主に織田のことば一切わからなくなつてしまつた。

しかし、行長の見聞は計り知れない。朝鮮語もできる。計り知れないやつだ。秀吉が重宝した理由がよくわかる。

鹿之助の尼子復興活動のことも聞かせてもらつた。

思わず涙が出てしまつた。俺が大成したら絶対幸福にさせてやる。毎日は勉強、寺の手伝い、夜は家臣から話しが聞くのが主な生活である。

問題はお香である。

一応、許してくれたらしいが、相変わらず俺との距離は縮まらない。

「」の中では一番年が近いのだからもう少し仲が良くなりたいものである。

そう、お香である。

お香のこと面白ことがある。

俺はお香はかわいいと思う。将来は美人になるか、このままかわいさを残して成長するのか大変楽しみである。

俺はロリコンではない（2次元以外）が、お香に触手が動かないかといえば……いろいろ規制もあるのでいえない。

しかし、である。

どうにもおかしいことに誰もそうは思わないらしいのだ。

「気立てのいい子ですが、美人というのはどうぞじょうへ…」

というのが一般的見解らしい。

俺は前世では女の子の趣味は悪くなかったはずなのに……  
そうかっ！――前世で女の子の趣味が悪くなかったからこそなのだ。

今は400年余り昔である。さらに西洋の価値観があまり、全く  
といつていいくらい入ってきていないのだ。

現在と美人の基準は違うのである。違つて当たり前のんだ。  
なんだ、俺ここではB専なのかあ……

勝つたような負けたような微妙な気分である。

「失礼します」

お香が入ってくる。

「うおつ

いきなり考えていた人物がやつてきたのでびっくりしてしまう。

「どうかされましたか？」

おずおずと聞いてくる。やはりかわいい。誰がなんといおうと俺の価値観でかわいければそれでいいと思う。

「いや、何が用？」

「鹿之助様が鹿をおとりになつたので八郎様に見せたいとおっしゃつていましたので、お呼びに参りました」

「あいつ、俺が鹿之助なんてあだ名つけたからあてつけてやがる。鹿しか取らないじゃないか」

「そのようなことは」

お香は軽く笑う。

「やっぱ笑つた方がかわいいね」

最近ではなんとか俺の前で笑つてくれるよつになつた。ほんの少しではあるが、大事な一步である。

「失礼しました」

すぐに元に戻つてしまつた。残念だ。

「鹿之助にすぐいくからつて言つておいて」

「わかりました。それでは失礼します」

なんだかんだで蟄居生活も悪くないなと思い始めた今日この頃である。

## 戦国の異端児 12話

俺の元に忠家叔父さんがやつて來た。ただいえ

行長に人質になることを教えてもらつてから、結構時間がたつた。心の準備はできている。

「我が宇喜多家は織田家に降伏しました。しいては真に不憫なことながらハ郎様には人質として姫路城まで行つてもらわなくてはなりません。

つきましては、ぜひ宇喜田直家様にあつていただけないでしあうか？」

「親父に？ わかつた」

「それでは、本日中にもここからお立ちになるところとお願いします」

「また、急な話だな、わかつた。すぐ支度しよ！」

そういうわけで俺、小西行長、山中鹿之助、慶明、お香は揃つて岡山城まで行くこととなつた。

慶明とお香は俺が人質に行くと告げたら

「姫路ですか？ 私もあなたとその家臣の話を聞いていると俗世と関わりたくなつてきました。私も付いていつてもよろしいか？」  
といつてきた。

「慶明さんが行かれるのでしたら私も参ります」

ということで、なし崩しでお香も一緒に来る」となつたのである。

岡山城で出迎えてくれたのは親父である。

親父は前あつたときよりずいぶんやつれていた。

年のせいだらうか。

「八郎や、よく来てくれた。人質の件は本当にすまないと思つて  
いる」

「いえ、人質は武門に生まれたものの勤め、父上がお嘆きになる  
ことは「じぞこますまい」

「そうか。そういうてくれるとうれしい。私としては人質になど  
だしどうなかつたんだが……」

「父上、此度の降伏よく決心なされた。これで宇喜多家も安泰で  
しょう」

「あいかわらず、頼もしいことだ。行長、鹿之助、ん?また家臣  
を増やしたのか?

女子もあるではないか

お香と慶明のことであろう。

「まあそのようなものです。」

「うんそつか、そのまづら、八郎をしっかりと支えてやつて欲し  
い。頼むぞ」

「ははっ

みんなが頭を下げる。

「兄上、そろそろ八郎様の出発の時間です」

忠家が水をさす。

「うん?  どうか?  わかつた。それでは退出するが良い

親父は名残惜しそうだ。

「親父は変わったな。どうしたのだ?」

俺の前を歩いている忠家に声をかける。

「「」病氣です。」

忠家が声を潜めて答える。

「長くないのか?」

「……たぶん」

「そ、うか、もう少し生きてもらいたかったな。」

「……」

「忠家、俺は若くしてこの城を継ぐことになるだろ？。

「譜代の家臣、一門衆をまとめることはまだ無理だ。見かけがこんなだからな。」

お主が頼りになるだろ？。俺を裏切るな。そうすれば宇喜多家の安泰ぐらいはなんとかしてやるつ」

忠家は涙をこぼした。

現在宇喜多家は存亡の危機といつてもいい。

つい先日まで仕えていたといつていい毛利家を裏切り織田方についた。

織田は我ら宇喜多家を信用していない。今後、織田家が本格的に毛利侵攻をするまでそう長くはないだろ？。

しかしその長くはない時間を宇喜多家が守りぬかなくてはならない。織田家の毛利家からの防波堤の役目を果たさねばならない。

しかも領主は病氣で危険な状態である。

「ハ郎様。これから毛利と戦い、さらには織田と渡り合つていかなくてはございません。」

そのお覚悟があありで？」

8歳に聞かせる言葉としては過ぎたものと忠家も思つていてるのだろ？。

「俺に任せろ。お前は何も心配しなくていい」

8歳が50代の大の男を慰めてくる。

忠家は声を殺して泣いていた。

その日のうちに姫路城に向けて出発することになった。同行者が結構多くなってしまった。

人質第2号として桃寿丸。

俺の家臣である小西行長、山中鹿之助。

そして連れ添いとして慶明、お香。

俺の相談役とし長船又三郎貞親ながふねまたさぶろうさだちか、岡平内家利おかへいないいえどし、富川平助秀安とがわへいすけひでやすの三人をついた。

忠家の英断である。この三人は実質宇喜多家を取り仕切っている男たちである。

宇喜多家の首脳部を俺の元に移動させた。

これは歴史とかなり違つていてるだろう。

宇喜多家の死は近い。それまでにこの三人に忠誠を誓わせることができれば宇喜多家をほぼ掌握できることになる。

疑問に思つかもしない。親父が死んだら宇喜多家の家臣は全て俺のものとなるのではないか。

このような考え方、俺の前世の江戸時代にできた。

親父の家臣は親父のためなら命を捨てられるといついてきたものである。

俺のためではない。そうでなければ戦争などできないだろう。

忠家は俺に全てを委ねるつもりである。

毛利氏との戦いは残つてゐる。宇喜多が織田に付いたことで、織田の尖兵として毛利と戦わなくてはならない。

その時期にこの3人をつけたことは忠家としては腹を切るような思いであったに違いない。

「八郎、どうなるんだろうね、僕たち  
桃寿丸は全体的に暗い。まあ人質としてはこっちの方が正解とい  
える態度だ。

「桃寿丸、それと……慶明もだ。あとお香もか。すまないが、こ  
れから俺のことは八郎様と呼んでくれ。  
敬語もつけてくれ。特にあの三人の前では」

俺は声を潜める。

「家臣になれってこと? 僕はいいけど慶明さんたちまでそうす  
ることはないんじゃない?」

「いや、そういうことじゃない。とりあえず俺がこの中で一番偉  
いというか一目置かれてるという印象だけでも着けておかないと  
かんからな」

「まあ僕は将来八郎の……八郎様の家臣になるのだからいいよ。  
思つてたより早かったなあ」

「私も構いませんよ。無理してついてきた身です。それぐらいの  
ことは、八郎様」

「わ、私もですか!!!! ……わかりました」

備中びっちゅうから備前びぜんに行き播磨はりまにつく。

宇喜多家と織田家はすでに隣接している。

「これが姫路城があ、感慨深いなあ

前世では一度は行きたいと思っていた。まさかこんな形で訪れる

「ことになろうとは。

確か黒田官兵衛高から秀吉に譲られた城だつたなあ。

城内に入ろうとすると、門番に呼び止められた。

「八郎様ですね。こちらへ」

誘導されるままに奥に入つていく。

「この中でお待ちください」

部屋の中に通される。秀吉の現在の居城といつからぢれぐらうき  
らびやかなのだろうかと思つたが、案外質素だつた。

「まもなく筑前守様が参られます」

桃寿丸が平伏する。

そのほかの面々もそれに翻つ。

俺も慌ててみんなの真似をする。

頭の方からかすかに衣擦れの音がする。秀吉が入つてきたの

だろう。

「これはこれは、宇喜多殿。遠いところまで来ると腕をつかみ、顔を上  
げてくだされ」

秀吉は上座から立ち上がり俺のところまで来ると腕をつかみ、俺  
の顔を上げさせた。

不思議と悪い気はしない。

「宇喜田直家が嫡男おやくなん、八郎と申します」

俺はわくわくしながら顔を上げた。かの有名な豊臣秀吉との初対  
面である。

ドギがムネムネしてくる。

あれ？ 猿には似てないよな？

予想に反して秀吉は猿には似ていなかつた。  
50代ぐらいのちょっと瘦せた子男である。

いかん。いかん。

相手は秀吉である。外見で判断したら恐ろしことになつてしま

う。と心を入れ替える。

「筑前の守様、お会いできて光榮です」

「そなかしこまらずとも良いわ。人質生活はつらいこともあるかと思ひが、これからこの猿めを仮の父と思つてよいぞ」

「ありがたき幸せに存じます」

「はつはつはつは、宇喜多殿は堅苦しくていかんわ」

「なにぶん、緊張しておりますので、粗相がありまして多めに見てくださいますよう、よろしくお願ひします」

俺は目の端で秀吉の後ろに座る人物を捕らえた。

顔と体はドクロのように瘦せている。

足を投げ出して座つてゐるみたいだが、その足は紺に覆われた布で隠されていて良く見えない。

戦国時代で秀吉の下につき、足が悪い人物は一人しかいない。

黒田官兵衛孝高である。

次の瞬間、黒田官兵衛と目が合つた。

俺は即座に目をそらした。

「ん？そこには小西行長殿ではないか？久しづりよのぉ

「ははっ！しばらくぶりです。」

「元氣そだの、どうじや、わしの配下に來ること考へてもらえたかのぉ？」

行長……お前やつぱ面識会つたんだ。まあある程度は予想はついていたが。

「ありがたい申し出ですが、私にはもつたないお話です。」

「むう、そうか？まあよい、気が向いたらいつでも来るが良い。

厚遇するぞ」

俺の目の前で家臣を勧誘するなよな。

次に秀吉は、鹿之助の方を見るが一瞬ぎょっとするような表情を見せた後すぐに破顔した。

「これはこれは、鹿之助殿。生きておられたのか。よかつた、よかつたあの時は助けられなくて真にすまなかつた。

わしへの。ずつと心にのじつとったのじゃ。いやあ真にめでたい

い

しりじらしき、しらじらしきが、なんともいえない」の愛嬌。これが器量といつものか。

「その方らは？」

「長船又三郎貞親にござります」

「岡平内家利にござります」

「富川平助秀安にござります」

それぞれが返事をする。

「宇喜多の重臣ではないか。いやいや失礼した。」

「いえ、われらは八郎様の相談役で参りました。」

戸川秀安が代表して答える。

「そうか、そうか、八郎様は家臣からの信頼が厚いと見える。うらやましい限りじゃ」

「秀吉様、そろそろ」

後ろに控えていた黒田官兵衛がいう。

「もうそんな時間か。いやいや、上様も人使いが荒くての。おちおち話もできぬわ。

では、八郎殿。何か困ったことがあつたらわしに何でも言つてください」と残して秀吉は出て行つた。

台風のような人だつたなあ。終始ペースを握られてしまった。しまつた！―― 左手の指の数見るのを忘れてしまつた。

「官兵衛、どうみる？」

秀吉は官兵衛を連れて廊下を歩いている。

「まだはつきりとしたことはわかりませんな

「おんじには悪いが、播磨の田舎侍よつよつせびだわるわ」

「耳が痛い限りで」

「小西行長、山中鹿之助、宇喜多の首脳部があの小童に付き従つ  
とる」

官兵衛は首をかしげる。

「一瞬ですが、私と田が合いましてな。心のうちを見透かされた  
気がしました」

「おんじもそう思つたか、ならわしの勘違いじゃなかつて。長  
生きはするものじゃな官兵衛」

秀吉は忙しい。これから三木城の攻略にあたらなくてはならない。  
秀吉は知らない。この八郎と名乗る戦国の異端児がこの後秀吉の  
人生を大きく変えることになるとわ。

## 三木城 13話

みきじょう  
三木城

前に述べた織田に対抗する4つの勢力のうちの最後の一つである。俺は秀吉に頼んで見学させてもらひました。

また見学をしている。

前回の上月城の戦いといい、今回といい俺、見学しかしてない。まだからといって戦闘の指揮を取りたいというわけでもない。できれば俺は戦争はこめんである。

け、けつして戦闘狂なんかじゃないんだからね

まあそれは置いておいて

前回の上月城の戦いで俺の田辺では、織田が備前に進出したといふことで織田の戦闘を見ること、毛利の軍首を見ること、あと純粋に俺が戦争に慣れておこうということである。

運がよく、小西行長、山中鹿之助といふ有能で信頼できる家臣を得ることができた。

今回は長船貞親、岡家利、富川秀安に危機感を持たせることを目標にしている。

直家以来の家臣であるこの3人の重臣たちに織田を裏切ることは得策でないと思わせなくてはならない。

本当は俺自身に忠誠を誓わせることができればいいのだが、今の俺では難しい。

9歳児にそんなことできるところまでは無理がある。

そういうわけで羽柴秀吉に頼み込んで三木城攻めを見学することを承諾させた。

ながふねさだちか おかいえとし とがわひでやす  
長船貞親、岡家利、富川秀安の3人は3者3様の表情を浮かべて  
いる。

3人とも表情を変えることができただけ、さすがといえよう。

「すごい人数だね？ なんか華やかだし、戦争してるとは思えな

いね

とうじゅまる

桃寿丸が織田の軍勢を眺めてため息をつく。

うーん。惜しいんだが、もうちょっととこうとか。

「織田家はこれだけの人員をもって城を包囲してる。しかもはたから見ても華やかだとわかるということは？」

俺は桃寿丸をいたずら気分で試してみる。

「といつことは……織田家はおつきいってことだね」

間違つてはない。間違つてはないが、もう少し踏み込んで欲しいところである。

まあ簡単に理解できるものでもない。

「行長、鹿之助、ちょっと」

俺は両名を手招きで呼び寄せる。

一人は慌ててこちらに駆け寄つてくる。それを見た慶明もおもしろそうにこちらにやってくる。その後ろをお香がトテトテとついていいく。

「桃寿丸、お前を敵の大将とするよ」

「ええ！ いきなり？ まあいいけど……」

「で、鹿之助は桃寿丸の家臣、俺は行長を家臣と仮定するわけだ。俺がお前の領地に踏み入ったとする。どうする？」

「戦う」

「いや……まあそんなんだけど、そつだな……兵数は俺のほうがたくさんだとすると？」

「それは困ったなあ、鹿之助どうする？」

家臣に広く意見を求める」とは悪いことじゃないが、丸投げかよ。

「篠城、でしううな」

「正解。基本的に篠城戦になるんだ。」

「でも援軍がない篠城戦はしちゃいけないんじゃないじゃないの？ 信長もそれで桶狭間で合戦を選んだんでしょ？」

「それも正解だけど、置いといて話を進めるよ。

俺が桃寿丸の領地に兵を引き連れていく。そうすると桃寿丸は篠城するわけだ。

俺はもちろんお前の城を蟻の一匹出れないように囲む。」

「じゃあ僕は食料が尽きるまで徹底的に抗戦するよ」

だいぶ桃寿丸のやつ乗ってきたな。

「そう、そうなる。こっちに鉄砲があれば俺もやりようが出てくるのだが、まあこれもややこしくなるから置いといて。

俺は無理やり攻めると被害も大きくなるので無理に攻めるることはできない。

ここで調略、謀略が出てくるわけだ。俺は桃寿丸の家臣、鹿之助にお前を裏切るように勧誘する。

これが成功すれば城をとれ、失敗すれば城は取れない。

いうのは簡単だが、ここで成功する可能性はかなり低い。

「じゃあ、どうなるの？」

「基本は俺はこのまま城を囲んである程度時間がたつたら帰るしかなくなる。」

「え？ 帰っちゃうの？」

「帰るしかないだろ？ ね。

これが旧来の今までの戦争のやり方というわけだ。

まあ例外も多くあるけど、それは置いとくよ。

こんなことの繰り返ししているから戦国時代みたいな100年単位の戦争状態になっちゃうわけだ。」

「小規模な戦いか、城を含めた戦争ばつかで死傷者が少ないからつてこと？」

「そうやう、ここまでは大丈夫みたいだな。

じゃあ、今回の戦いにうつろつか。

俺はお前の領地に攻める。お前は篠城するわけだ。ここまでは一緒にだ。

だけど、俺は決して帰らない。城を囲んだまま2年でも3年でも耐える。」

「旧来の戦い方でも帰らなければいいだけじゃないの？」

「前はそんなことできない。なぜだとと思う？」

「職業軍人？ を使っているから？」

「そう、それは大変重要な。でもまだある。兵站の維持と、補給を絶やさないからだ」

「兵站？ 補給？」

「前線で戦う兵に届けるのが補給。兵站は補給を整えるためのシステムって考えでいいと思うよ。」

「システム？ なにそれ？」

「すまん、すまん。仕組みというか、体制、制度かな」

「そうか、兵站、補給か」

桃寿丸はしきりに首をかしげている。

兵站、補給。日本史でも異端なことに信長、秀吉はこの2つを大変効率的に使つた。

三木城の合戦は前世の有名な小田原兵糧攻めの簡易縮小版といえよ。

この後、俺たち一行は姫路城に帰つた。

帰るころに三木城が落ちたとの連絡があつた。

城主の別所長治およびその一族は全員切腹。それによつて城兵の命は助けられた。

秀吉の以後の城攻め処置はこの時確立した。

三木城 1-3話（後書き）

どのような感想であれいただけると大変励みになります。  
書こうといふ気になります。

人質生活。

する事はたくさんある。俺以外の人質との親交を深めたり、秀吉の部下と親交を深めたりしなくてはならない。  
島流しを回避するために。

とまあ人質生活はなかなか大変なのだ。

そんなわけであるが、元来怠惰な俺はそんなことをする気はもうとうない。

引きこもりに多くをもとめないで欲しい。期待をかけないで欲しい。最低限していればいいのだ。

部屋でボーッとしているのも飽きてきたので、適当な書物を取つてみる。

俺の部屋には足の踏み場もないくらいに本が散乱している。  
書物は貴重なものらしく、行長や慶明に怒られるがやめられない。

「八郎様、いらっしゃいますか？」

「んん？」

俺は顔だけ障子の方に向ける。

お香が入ってきた。

「これを八郎様にと、行長様が」

見ると、俺の要求していた精銳部隊千人の概算らしい。

「後で見ておくからそこら辺置いといで」

今は仕事なんかする気になれない。

再び本の世界に入ろうとする。

「八郎様、少し散らかりすぎじゃないですか？」

お香が俺に向けて喋る「」とはめったにない。俺の質問などに返答することはあるても向こうからは少ない。

俺は少し驚いて、再び顔を向けた。

あれ？ かすかに怒つているよね？

眉間にピクピクしてゐる。

「お香……さん？」

恐る恐る声をかけた。

「ハ郎様、本を読むことは結構です。お仕事もしつかりやっています。

私はハ郎様のそういうところは尊敬しております。侍ですかどうしかし、これは何ですか！」

「え？ 部屋？」

「違います！ こんなに散らかして、片付ける女中さんとかはないんですか？」

「いや、知らない女の人が部屋に来ると落ち着かなくて」前世での母ちゃんの暖かい置手紙とH口本がトラウマになつてゐるのだ。

「もういいです。今から私がやります。ハ郎様も手伝ってくれますよね？」

顔は笑つてゐるが声が恐い。

問答無用である。

「はい……わかりました」

お香はテキパキと部屋を片付けていく。

本は本でまとめて、いらないものはどんどん部屋の外に出して、庭に捨てていく。

「あ！ それはダメ！」

お香がギロリとこちらを睨む。

ひつ！

ああああああ。俺が作った木彫りの美少女フィギュアが  
「これもいらないものですね、あとこれも、これも」

戦国時代に前世の下着を広めようと思つて作ったのに……  
こんにやくで作ったオナホールが……  
製作日1年を費やした同人誌が……

俺は庭の宝物を漁つていぐ。どれも俺の思い出なのに……

「さて、燃やしますね」

お香はそういうと、火打石をカツカツといすつた。

あーあ……

終わつた、燃え尽きたよ。パトラッシュ。

燃え尽きるとお香の人格は元に戻つていた。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

「いや、いいよ。俺が悪かつたんだし……」

「すみません。ついゴミの山を見ると見境がなくなつてしまつて」

「ゴミの山……」

「すみません、すみません」

必死に謝られるどどうしようもなくなる。  
目には涙が溜まつている。

かわいい。

いかん、いかん。

また泣かしてしまつ。何とかしなければ……

そうだつ！

「うん！ 部屋が綺麗になつた！ もしよかつたらお礼をしたいんだけど、この後暇？ デートしない？」

「デートですか？ 何ですかそれ？」

「んんっと、どこかへ行つて、食事したりすることかな？」

城下町でも行つてみよう。俺ここに来てからまだ一回も行ったことないんだ

「一回も行つてないんですか？」

「いろいろ忙しかつたからね」

暇なときもあつたが出不精な俺は部屋でグダグダしているだけだつたのだ。

「私でよければ……」

「よしー、決まりだね。俺一回も行つてないから案内ようしけね

勢いでデートすることになつたわけであるが、いかんつ。今更ドキドキしてきた。

横を見ると人形のような顔に、艶やかな髪色をしたお香の顔が見える。ツインテールだ。

「何かついています？」

視線に気づかれた。

「いや、今日もかわいいなと思つて」

「え……いえ、その……」

普段の会話では萎縮することはだいぶくなつてきたのだが、こいつ攻撃にはめっぽう弱い。

からかい半分でやつてしまつている俺も、俺だが、嘘は言つていないので問題ない。

「ヒロが一番大きい通りなんですよ。活気がありますよね」

「おおっ。これはすごい」

事実、ヒロから来てから一番の発展具合だ。  
楽市樂座の効果というわけか。俺らも乗り遅れないようにしない  
とな。

通りは前世と比較しては元も子もないが、ヒロに着てからはこ  
こまで活氣があるのは初めてだ。  
じつたがえしており、あらゆる者が雑多に並んでいる。日本もア  
ジアの一員といふことがわかる。  
ぱっと見でも、いろんな文化が受け入れられているのがわかる。  
歐米文化は入ってきてないし、鎖国もまだしていない。その影響  
であろう。

「これは？ なんだろう？」

「きれいですね……」

俺は適当な店に足を止めると商品に手を取った。

「お目が高いですねー。それは最近南蛮から入ってきた商品なん  
ですよ。珍しいもので、大変貴重なんですよ」  
商人がもみ手をしながらヒロに向ってきた。

「ふーん」

俺は前世でも良く見た形をした商品を手に取った。  
指輪か。

でも何だか安っぽいぞ。露天に並んでいるんだから仕方ないか。  
これを前世に持つていつたら俺金持ちになれるのかなあ。本物の  
金とか真珠とか使っているなら大金持ち確定じゃね？

「いかがですか？ 彼女への贈り物として」

「彼女！ そう見える？ まいっただねえ」

やうにってお香のほうをちらりと見る。お香は指輪に夢中で「ひ

ちの声は聞こえないみたいだつた。

「「」これ本物？」

「もちろん当店は本物しか扱つておりません」

本物でも偽者でもいいか。そんなのは本人の心しだいだろ？

「気に入った？」

「とても綺麗です。でも私にはもつたいないですから」

「これ貰うよ。どれぐらい？」

「そんな、いいです。私にはもつたいないです」

「いいから、いいから」

俺はお金払い、商品を受け取つた。

「指出して」

お香はおずおずと右手を出した。

「もしよかつたら左手を出して欲しいんだけば？」

「左手ですか？ わかりました」

俺はひざまづき、片膝をついた。ゆくゆくとお香の薬指に通して  
「」  
いぐ。

「お嬢さん、結婚していただけませんか？」

「え？ その？ え？」

お香はテンパつてこむ「」  
とさせている。

「「」めん、ごめん。冗談だよ」

「そう……ですよね」

「プレゼント。なん一つと、贈り物かな」

「私ですか？ でもいいんですか？」

「いいよ、いいよ。どうせ自分のものなんて向も買わないんだか

「」

「あの……ありがとうございます」

「「」んな感じだつたんだ」

「ほう、だから私の書類にも田を通していないと」

田の前にいる行長は怒っている。

「これから、これからするから」

「今すぐしてください。自分で[[計画]を立てたのですから責任があるのです」

「ううーっ、わかつたよ」

「お茶ここにおこておきますね」

お香がお茶を持ってきてくれた。

「がんばってくださいね」

そういうお香の手には指輪が光っていた。

天正 てんしよう  
10年。

西暦 1582年。

本能寺の変が起ころる年として有名だが俺の親父が死んだ。

宇喜田直家、享年 53歳だった。

この時代人間五十年といわれていた時代だから十分生きたといえる。

実際は去年死んだのだが、毛利への対外工作的に公式発表は今年ということになった。

忠家が親父の死に様を手紙でよこしてくれた。

親父は、床の中で家臣たちを並ばせ、「わしと共に殉死じゅんししてくれるもの、誰かいないか?」と問いかけた。

家臣は互いに顔を見合わせ、「我々はこれから八郎様を盛り立ていかなくてはなりません。どうしてもといわれるのでしたら、国中の高僧を集め、殺しましようか?」と答えた。

これに親父はおとなしくなってしまつたらしい。

親父がどういう意図で発言したのかわからないが、晩年の親父を見ていると何も考えていなかつたのかもしれない。

もともと親父が死ぬことはある程度覚悟していたため、準備はしていた。

俺は親父が死んだとの報を受けると用意しておいた手紙を2通取り出した。

この3年間何もしていなかつたわけではないということだ。

1通は秀吉宛、もう1通は信長宛である。

秀吉殿には親父が死んでしまつたため俺に跡目を継がせていただきたい。

しいては俺の後継人になつて欲しい。といった旨をしたためいる。

信長には秀吉に送つたのの確認である。

秀吉殿に私の後継人になつていただきたい。しいては認めていただけないでしようか。といった感じである。

2通の手紙を取り出し、人を呼ぶ。

「五右衛門いるか?」

「あ・いしかわ~ごえ~もん・じこひ~じぞ~います~」

「この2通の手紙を秀吉殿に渡してくれ。1通は秀吉殿に。もう1通は秀吉殿から信長様に頼む」

「あ・わかり~もうした~」

あいかわらずうるさいやつである。

この石川五右衛門は俺が人質生活に入つてから仲間にした人物である。

秀吉の下に人質に来てから俺は手紙を書きまくつた。

それはもう前世の関が原の戦い前の家康並に書いた。百通、2百通は軽く超えているはずだ。

さて先は北は伊達の片倉小十郎、南は龍造寺の鍋島直正まで、さらには現在していいるかしていないかわからない真田十勇士、風魔小太郎にまで送つてゐる。

とりあえず、自分の信用できる家臣が欲しかった。

手紙の内容は、簡単にこんな感じだ。

「俺、今はただの人質だけど、そのつち宇喜田家継ぐよ。  
俺の家臣にならない？ 将来は約束するよ・ 金銭契約でビリ・  
」この手紙を書いて一番はじめに来たのがこの石川五右衛門だった。  
最初から強烈で、ぼさぼさの頭に、顔に墨を塗つていて、歌舞伎  
役者そのものだった。

イメージどおりというわけだ。

「あ・いしかわ～こえもん～で～ざわ～います  
うつとうしい、俺の第一印象だ。

石川五右衛門が本当にいるとも思わなかつたし、俺自身いちいち  
出した手紙を把握していない。

追い返そそうと思ったが、まあ話だけ聞いてやることにした。  
せめてもの情けである。いつから手紙を出した手前、負い田も  
ある。

石川五右衛門、前世では大泥棒と名高い男である。

五右衛門風呂という言葉がある。

これはこの石川五右衛門が秀吉の金のしゃちほこか何かを盗んだ  
ことによつ、秀吉に捕まり子供と一緒に煮殺された拷問道具からの  
名前だ。

この時、子供を風呂に入れさせないように絶命するまで、抱き上  
げ続けた。という天晴れ五右衛門説と、子供を下敷きにし踏み殺し  
たという外道五右衛門説。

苦しまないようになつかせつけようと水に入れて呼吸停止させた慈悲  
深き五右衛門説がある。

まあ簡単に言えば存在 자체怪しこやつである。

では、本当はどうなのか興味深いところである。

「この～いしかわ～ごえ～もん～は～」

異様に長くなりそのうでかいつまむ。

当初は伊賀の下人をやつしていたらしい。忍者というやつだ。  
それが織田家の伊賀討伐で住むところも食い扶持もなくなってしまつたらしい。

途方もなく歩いていると、石川とかいうやつに泥棒をやらないか  
と誘われる。

明日への道がわからないのでどうとでもなれといつことで、いわ  
れるままに三好氏の蔵に押し入り、黄金の太刀を盗んだ。  
これで当分食つにこまらんだろうと思つていたら、石川に裏切られ、  
罪を擦り付けられ役人に差し出されそうになつてしまつ。  
慌てて逃げ出したもののお尋ね者になつてしまつた。

しかたなしに身分が高そうな屋敷に入り盗みに入つて食い扶持を  
つないでいた。

そうすると自然と仲間が増えてしまった。

俺にこんなたくさんの人達が食い扶持稼ぐものを無理だ。

簡単にいうとこうである。

最後の方は涙目で、顔から墨すみが落ちてきていた。  
怖い顔が余計怖い。

話を聞いてみると元忍者とのことで、前世では秀吉の寝所まで侵  
入している（眉唾物だが）ので諜報に使えると思った。

諜報に使える部下は欲しかったところなのでどうあえず雇つ」とした。

これが失敗だった。

こいつ極度の目立ちたがりだった。

まず、試しに徳川家康の動向を探つて来いとの命令を出した。

### どうじつけ【動向】

(1) 人や物などの動き。  
(2) 事態の動いていく方向。社会や組織などの現状の傾向や今後のなりゆき。

のはずである。

こいつは家康の寝所に忍び込むと狸の置物を置いて、服部半蔵と切りあつた末帰ってきたのだ。

しかもご丁寧に石川五右衛門ここに見參と墨で書いてきたらしい。俺は動向の意味を小1時間かけて叩き込んだ。

さらに明智光秀を探つて来いと命令したら、坂本城から花火を打ち上げる始末だった。

「次、同じようなことしたら島津家に行つてもうらうからね」

といつたらだいぶおとなしくなった。

敵地で派手にやるのはどこかの蛇ぐらいで十分である。

なにはともあれこの2通の手紙で俺が跡を継ぐ分には問題ないはずだ。

秀吉は天下をとつた後とは違い、今の時期は人の命をいとおしむ

人物であるはずである。

宇喜多家が俺をなくした場合旧臣じきみが自便じめいに行動を起こすのをとめるという利点もあるはずだ。

なにより前世では俺を残し、宇喜多家を最大限に利用した。

案の定、それから数日後、俺と秀吉は岡山城、現石山城に向かうことになった。

秀吉、俺たち宇喜多家入質組み一行、の他にも2万の軍勢と一緒にである。

この2万の軍勢、俺たち宇喜多家への圧力もあるがそれと同時に毛利家への侵攻もするつもりらしい。

これが前世で有名な備中高松攻めである。

味方にするかぎり織田家、しいては秀吉はおおいに頼りになるだろう。

宇喜多家入質組みも3年前、姫路城に来たときよりも人数が増えている。

岡山から連れてきた桃寿丸とうじゅまる、山中鹿之助やまなかしかのすけ、小西行長こにしうきなが、慶明けいめい、お香おこう、そして長船又三郎貞親ながふねまたざるふねねだむちか、岡平内家利おかへいないえとし、富川平助秀安とがわへいすけひでやすら爺さんどもはそのまま一緒に来ている。

その他にも、小西行長の親父である小西隆佐及びその家族、石川五右衛門、最近加わった後藤又兵衛で全員である。

小西行長の父である小西隆佐こにしりゅうさは俺が堺に行つたときに確保した。人質の最中、行長に連れられて堺に行つた。

その時、行長の実家に案内してもらったのだ。

行長の実家は堺で薬屋を営んでいた。

試しに全員まとめて部下になるように誘つてみたところこい返事

をもらえた。

もちろん、薬屋と同時並行ということであるが、一気に部下が増えたことは喜ばしい限りだ。

ついでに小西行長に頼んでヨーロッパから大型ガレオン船と西洋馬の購入をお願いした。

もちろん二コニコ出世払いである。

どうやらかなりの金額になるらしい。俺は一気に負債を背負い込んでしまった。

もう1人の人物。

最近加わった後藤又兵衛、またの名を後藤基次といつ。

この男は俺の手紙に応じて家臣になりにやってきた。

元々、後藤又兵衛は黒田官兵衛に仕えていた。

しかし、荒木村重が信長に謀反を起こしたことで非常に困難な立場に追い込まれることとなつた。

有名なことであるが荒木村重は黒田官兵衛を幽閉する。

荒木村重。前世では名前も知らなかつたが結構重要なやつである。後藤又兵衛の叔父、その子供らが村木方に組したため後藤又兵衛の立場は追い込まれることになる。

又兵衛は一族の謀反に関与したと見なされるはめとなり、黒田家中からの退去を余儀なくされる。

退去された後仙石久秀に仕えることなつたらしいが、どうもあわなかつたらしい。

まあ凡将として有名な仙石久秀ならしかたないが。

仙石久秀。前世では漫画として有名な人物であるがその人格、戦績には問題も多い。

どちらかといつたら人格が戦績に直結している。

少年のころから気が強く、機転も利いたが、思慮の浅いところがあつた。そして見栄つ張りであり自己顯示欲が強いところがあつた。

「馬鹿よりも小童の方がましだ」

俺のところに来たときにも又兵衛が発した最初の一言である。  
後藤又兵衛の名声と有能は前世においてよく知っているため快く  
迎えたことはいつまでもない。

岡山城で俺たちを迎えてくれたのは宇喜多忠家叔父さんだつた。  
わざわざ城の外に出て迎えてくれた。

「八郎様、お帰りなさいませ」

「忠家叔父さん、どうしたの？」

「忠家叔父さん、どうしたの？ その頭？」  
「お館様が亡くなってしまったので、これを機に出来家をせてもうり  
いました」

「そうか、迷惑をかけたな。子息のことは不憫であつたな」  
「これより少し前、毛利との戦で忠家は子供を一人なくしている。  
宇喜多基家である。俺がキレイな宇喜多詮家の弟ということにな  
る。じうせなら詮家が死ねばよかつたのに。あきいえ

「いえ、武将になつたときから覚悟はしています。

それにして、立派になられましたな。3年でここまで成長なさ  
るとほ、この忠家嬉しいおもいますぞ」

「すでに家臣は集めてあるのか？」

「はい。城の方に案内いたします。秀吉様もいらっしゃる」

俺は忠家叔父さんに連れられて城に入つていく。  
忠家叔父さん、羽柴秀吉、俺という順番で進んでいく。  
大広間にはすでにみんな集まっていた。

近い方から桃寿丸、忠家叔父さん、詮家、明石全登含む一門衆、  
その下座に長船又三郎貞親、岡平内家利、富川平助秀安ら譜代の家  
臣、さらに下に有象無象の家臣、そしてやつとその下に小西行長等  
の俺の直卒がいる。

秀吉は俺の斜め後ろにどうぞうと存在している。

姿は小男としか思えないがやはり存在感は圧倒的だ。

最初秀吉は俺を膝に抱えて自分が後継者ということをアピールしながら宇喜多家をまとめるつもりだったらしいが、俺が失礼のないようにお断りさせてしまった。

恥ずかしかったこともあるが、宇喜多家ぐら自分でまとめないと今後が不安になる。

それに余りに秀吉に頼りすぎると前世と同様、半分傀儡政権になりかねない。

頼るときは必要限度、そして最大限に影響力は最低限に抑えておかねばならない。

今は秀吉が後見人となってくれている。今回秀吉が連れてきた軍勢、秀吉及び織田家の力で半分以上家臣たちを押さえ込んでいる。この状況で家臣をまとめられなかつたら今後もまとめることはできぬのである。

うう……緊張してしまった。

いかんいかん。桃寿丸のがうつてしまつた。

ここにしつかりしなくては示しがつかない。

ゆづくらと上座まで歩いていき、どかつと腰を下ろす。

「宇喜多家当主、宇喜多ハ郎である」

声が少し上ずつてしまつたかもしれない。

秀吉以外一斉に頭を下げる。

腹では何を思つてゐるのかわからないが、とりあえず織田家の威

光には頭を下げるくらいらしい。

「私は若輩おくれんのかみ筑前守殿に後見人を頼むこととなつた。皆よろしく頼む」

ちなみに筑前とは北九州のことである。筑前守とは北九州を守護する豪族に朝廷からたまわるものである。

九州征伐を考えでのうえでの措置である。

もう一つ付け加えるとすると明智光秀にも日向守といひ名を朝廷から貰つてゐる。

日向とは富崎県のことだ。信長は同じ九州を明智と羽柴に任せようとしていたのかもしれない。

互いの競争意識を刺激させようと考へてゐる。と思つ。

少し現実逃避をしてしまつた。

ここからが本番だ。しつかりしなくては。

「面を上げる。これから新体制を発表する」

ゆつくりと家臣が頭を上げる。

誰が一番先に頭を上げるだらうか。

……詮家か。

「今後宇喜多家の水軍は小西行長、貴様に一任する。それと同時に補給担当にもつける。よいな」

行長が一瞬驚いた後答える。

「はつ わかりました」

「次は財務担当に小西隆佐。私の直轄地の財政は貴様に任せる。新たに情報統括担当を作ることにする。これには石川五右衛門に

当たつてもう一つ。

さらに後藤又兵衛、山中鹿之助は私の率いることができる兵を一任する。

織田家との交渉は慶明殿に任せたい  
呼ばれたものは全員各自声を上げる。  
驚くものもいたが不満はなさそうだ。昇進したことになるので不  
満が出ようはずもない。

問題はここからだ。

「これはどういうことです？」

一門の者や譜代の者を差し置いて……

「のよくな、このよくなビこの馬の骨ともわからない者たちを抱  
えあげるなど前代未聞だ」

明石全登が真っ先に声を上げる。

後半になるほど声が荒くなっている。

「水軍は先代より私が任せてくれました。私にこのよくなもの  
下につけといわれるのですか」

譜代の家臣である花房又右衛門<sup>はなぶさまたうえもんまさゆき</sup>正幸も立ち上がる。

「八郎様は先代亡き後も毛利から守つてきた私どもをいかに心得  
る。

忠家様、貞親様、秀安様、家利様、このよくなこと我慢できるの  
ですか」

明石全登が怒声を張り上げる。

忠家も他の3人の家臣も頭を下げたままである。

「明石全登、花房正幸、その方ら2名は私の家臣にはなれないと  
俺は緩やかに言つ。ここで焦つてはいけない。わかつていしたこと  
だ。

「……そういうことをいつているわけでは

「そういうことだ。忠家、明石全登と花房正幸を放逐する。」  
ざわつ

一斉に周りの空気が変わる。

放逐とは宇喜多家から追放されることである。かなり重い罰の1つである。

「横暴ではないか」

「我らをなんと思つていいる」

「八郎様はうつけか」

「若いから仕方がないにしても限度があるが」

「八郎様、放逐はやりすぎです。私の顔に免じて許してやつてもられないでしようか。」

忠家が俺をたしなめる。

「忠家もか……わかつた。今回は忠家に免じて許してやるが。ただし、花房お前だけだ。全登、お前は許せん。お前のおかげで部下に亀裂が入つてしまつたではないか。

明石全登、貴様はこの場で鞭打ちの刑だ。鞭を持って。俺じきじきにやつてやる。」

「八郎様、頭に血が上りすぎです。怒りをお納めください。」

忠家が俺を必死に止める。

「忠家、貴様もこの者らと同じところわけか？」一回せきこたゞ

「いえ、申し訳ありません」

近習がおずおずと鞭を俺に差し出す。

「そこに直れ、全登」

「宇喜多家はお前の代で終わりだな。このよつなこと許されるものではないぞ」

「明石殿は罪を受け入れる気はないと見える。貞親、秀安、家利、この者を抑えろ。」

「ははっ」

今まで黙っていた3家老が声を上げ、明石全登を抑える。

「いくぞ」

思った以上に冷静な声が出ることに俺自身が驚く。  
激しい音と共に血の臭いが当たりに充満する。

同時に明石全登の背中の皮が剥がれる。

鞭の先には血と肉がこびりつく。俺はそれを手でぬぐうと再び鞭を入れる。

一回「」というめき声と血があたりに響く。

「八郎様、すでに氣絶しております。もう十分でしょう」

忠家が俺の肩をやさしく叩く。

俺は鞭を近習に預けると、再び上座に戻り、腹のそこから声を出す。

「他に意見のあるものは？」

思った以上に重たい声だった。

「ははっ」

家臣達が一斉に居住まいをただし、頭を下げる。

「それでは、我々宇喜多は羽柴筑前守様と協力して毛利家とあたることにする。

忠家、大将を命じる。しかるべき人選を考慮した後、俺の下に来

い

「仰せのままに」

「以上で、解散だ。」

俺は席を立ち、部屋から立ち去る。

横目に明石全登を抱えあげる宇喜多詮家と花房正幸の姿が見えた。

俺が正式に家督をついでから3ヶ月が過ぎた。

羽柴秀吉は俺が家督を継いだのを確認するとその足で毛利まで進んでいった。

忠家叔父さんはそれに従つている。

忠家叔父さんは直家以来の家臣で小つるさこ重臣を集めて出発していった。

もちろん俺と協議した上、この間にある程度国内、備前、美作の改革のしたじを作つていこうとするためである。

「八郎様、もう行かれるのですか？」

お香が声をかけてくる。そんな目で見つめられると返答に困つてしまつ。

「これから船を見に行かなくちゃいけないからなあ……行長がつるさくつて。

また帰りによるから心配するな

岡山城に帰つてきたからお香は忠家叔父さんに「俺の側室に」といわれたらしい。

「私にはもつたいないです」と断られたらしいが。

それから、慶明が正式にお香を養子とし、城下の一角に居を構えることになったのである。

まあ側室ではお香に失礼だからなあ。正室にしなきや〇〇するわけないよなあ。

ただ、まだ12歳の俺としては正室、つまり結婚するところ」とはもう少し待つて欲しいとも思つ。

まあそれでも俺としてはお香はかわいいし、いつかは正室にしたいので足しげく通つているわけである。

我ながらみつともないとと思うものの、諦めきれないのが現状だ。

「慶明さんから頼りはあつた？」

「いえ、まだです。やはり忙しいのでしょうか」

慶明さんには秀吉と一緒に毛利に向かっている。

今後秀吉との外交パイプは慶明さんを通じて行うことになったからである。まあ俺が勝手に決めたわけだが。

「最前線に行くわけじゃないし、無事に帰つてくるって

「そうですね」

朗らかな笑顔で返していく。内心では不安だらう。

そもそも慶明さんに外交の才能があるとは思っていない。  
ない、というわけではないが、外交というのは比較的高いスキル  
が必須となる。

お坊さんといつのは外交には有利に働くものである。毛利の安国  
寺惠瓊は有名だらう。

が、問題は慶明は日蓮宗である。日蓮宗は商人には好かれている  
が、武士や百姓には人気がない。  
武士には臨済宗、百姓には一向宗となつていて。日蓮宗では余り  
いいイメージを相手に与えない。

ではなぜ慶明を秀吉との外交パイプにしたのか。

まずいえるのは秀吉だからである。秀吉は前世を見る限り、無神  
論者である。信長論者といった方がいいかもしない。  
であるならば、慶明の人柄を見て判断するであらう。  
そしてもう一つは、お香がいるからである。

慶明はお香に對して父親といつていいほど愛情を注いでいる。ならば、秀吉に寝返るようなことはしないはずである。

秀吉の人たらしの才能は絶対的なものがある。いつでもしないと対抗できない。

「何を考えておられるのですか？」

お香が無垢な笑顔を沿えて言つ。

「いや、俺も親父と大して変わらないなと思つてね。」  
転生した場合親父の血はどうなんだろう。この体に流れているのは変わりないのだが。

俺は自嘲氣味に笑つ。

「そのようなことありません。八郎様は、八郎様です」

「そうか、ありがとう」

俺はお香の頭に手を添える。

「じゃあ、行って来る、帰りにまた」

「はい、いつてらっしゃいませ」

岡山城から川を下ると児島湾に出る。

そこに俺の今回の田当てがある。

船頭に導かれていくとそこにはすでにドックが作られていた。

先日、遂にガレオン船が届いた。ヨーロッパからの輸入品である。当初はスペインから輸入しようと思ったのだが、俺の野望はすぐなく断られることとなつた。

仕方なく、イギリス、ポルトガル、オランダ、あたりに打診した。

イギリスはアジアに勢力をまだ伸ばしていないし、オランダは新興勢力過ぎるので途中で「」破算になってしまった。

日本に最も交流の深い（現時点では）ポルトガルに狙いを定めざるを得なくなつた。

ポルトガル本国とスペインとが同じ君主を仰ぐこととなつてしまつていた。

そこを狙い、植民地の技術者や、軍関係者をなだめ、すかし、騙し、手に入れたのだった。

手に入ると急ピッチでドックを作り、国産化を開始しよつとした。総指揮は小西行長である。

ガレオン船を見たとき

「これでよひうつぱとやらに行けるのですね。確かにこれだけ巨大ならどこでも行けそうですね」

と田を輝かせていたので、精一杯頑張つてゐるのだらう。まあどんなに頑張つてもあと3年は様子を見ることになるだらうことは黙つておくれ」とした。

「おーっす。行長いるか？」

作業をしている人たちが一斉にこちらを向く。

何でこんな子供がこんなところに？ というような顔をしている。案の定、あからさまに鬱陶しそうに声をかけられた。

「おい、童、こんなところに来ちゃ危ないぞ。家に帰りな」  
体格がよく、髭はもじやもじやで海賊の親玉のよつな男である。

「小西行長はここにいる？」

俺の態度に髭の男は怪訝な顔を浮かべる。

「なんで小西様を知っているんだ？」

めっちゃふしんがつていてる。やつかいだな……めんぢいのは「」めなんだけど、と思つてみると奥のほうから

「どうした？ 何があつた？」  
と小西行長の声が聞こえてきた。

「おおーい、こひらこひら」

俺が手招きをする。

小西行長は俺を視線の端でとらえると慌ててこひらに駆け寄ってきた。

「今日おいでになるとは聞いていましたけど、相変わらず突然ですね。共のものは？」

結構な距離を走ってきたのに息が乱れない。さすがである。  
俺ならヒィヒィだね。

「俺一人だよ」

「また1人ですか！ 鹿之助を共としてお連れくださいと何度も言つたはずですが……」

「んー忙しそうだつたから置いてきちゃつた」

「馬の耳に念佛とはこのことですね」と行長がため息をついた。

「あの……すみません。行長様……」の方は？

「ああ、紹介していなかつたかこひら宇喜多家現当主、宇喜多八郎様だ。

八郎様、この者は見てくれば悪いですが造船技術にかけては日本1の男です。  
家の商売をしていたのですが、こちらに引き抜かせてもらいました。腕は確かですよ」

「そうか、大変だと思うが早急に後3隻は欲しいのだ。見合ひだけの金は渡すから頑張ってくれよ」

「ええ！ 八郎様ですか！ 部下を柱にくくりつけ、火であぶつたり、鞭で叩いたり、爪をはいだり、耳を切り落とした、あの？」さすがにそこまでやつてない。あつてるのは鞭だけじゃないか。  
まあ広まっているならそれでいいか。

「これが今建造中の船？」

俺は苦笑しながら横の巨大な建造物を見上げる。

「はい。まだこれからといったところですが、竜骨の部分は終了しましたので後は何とかなると思いますよ」

行長も同じように建造中の船を見上げた。

「大砲の方は？ 生産できそう？」

船を買ったとき

「今、解析させているところです。これはあんまり芳しくないみたいですね。工房の方が困っていましたよ。これから行かれるのですか？」

「そうだね。この後よるか。」

西洋から購入した巨大ガレオン船にはおまけで大砲が付随していた。

この時代の日本の大砲は、重さの割りに砲身小さく鉄砲ほど重要度が低い。

この大砲を独自に製造できるようになれば、日本の火気戦法は大いに変化することになるであろう。

ヨーロッパでもコンスタンティノープルがオスマン帝国の圧倒的火力によって膝を屈したように。

大砲以外にも西洋の軍馬も取り寄せた。

日本の馬と西洋の馬の違いはその体格の大きさである。

日本に近代的騎馬隊が作成されるのは明治時代まで待たなくてはならない。

一足先に騎馬隊を作つておけるなら作つてしまつた方がいい。

朝鮮出兵、史実どおりあるかどうかわからないが、大陸で戦うなら必須である。

が、それよりも重要なのは馬は大変貴重な代物なので、贈り物に使えることである。

信長に献上すれば大いに喜ばれるだろう。信長の馬好きは大変有名だ。

その他、伊達政宗や羽柴秀吉、前田利家、状況によつては徳川家康にも媚を売つておいて損はない。

あとは活版印刷かっぱんいんきつだ。

もともと中国で生まれた活版印刷だし、木版印刷の技術はあつた。よつて、思つていたより簡単に技術的問題は解決できた。

戦国時代の一般的な文字は草書体である。

つながつていてわかりづらい文字である。

日本語とはとても思えない。努力してある程度は読めるようにしたわけだが……

この文字では活版印刷はとてもできないので、楷書体、カタカナを使うことにした。

このような感じで技術的な問題は解決に向かつたわけであるが、問題は別のところにあつた。

紙の値段が高く、刷つても採算が取れないのだ。

識字率もそこまで高いわけでもなく、本を刷つても売ることはなかなかできなかつた。

需要があまりなく、供給だけが増えてしまつてゐる状態である。現在では刷れば刷るほどお金がなくなつていく具合である。

完璧な赤字である。

今後に期待ということだらう。

活版印刷、火薬、羅針盤、課題は山済みであるが、何とか揃えたことになる。

が、より切迫した問題がでてきた。

俺が無駄使いをすげてしまったため、宇喜多家の財政状況が火の車になってしまった。

財政担当、小西隆佐は毎日俺に泣き言を言ってくる。とりあえずは、小西家、戦場で知り合つた堺の商人に借金をして何とかまわしてもらつていい。

それでも一步踏み間違えれば宇喜多家の財政は破綻する。考えたら身震いしてきた。

「八郎様、八郎様」

気づくと行長がこちらを心配そうに覗き込んでいた。

「ああ。すまん。考え方をしていただけだ。兵のほうはどうなつている?」

俺の質問に行長は少し困ったような顔をする。

「旧来の宇喜多家の家臣は私の下になるのが嫌のようで花房様を筆頭に反発がひどいですね」

「花房らはほおつて置け。俺に考えがある。

対策は打つてあるのか?」

「とりあえずは村上水軍に敗れて各地に散り散りになつた兵力を集めています。

それを私の家の船乗りの下におかせています。

しかし、これだけ大きい船操ることは初めての経験らしく皆戸惑っています」

行長は申し訳なさそうな顔をする。

「どうせ一から教育するなら庶民から雇つた方がいいかもしけないな。

水軍兵学校でも作るか、それなりつこでに士官学校も欲しいな。また金がかかるな。

予算を追加しておくからよろしく頼む。報告だけはしっかりしろよ

「わかりました。期待にこたえられるよう精進します」

「よし、じゃあ次は工房か。」

「俺は伸びをしながら次の目的地へと向かおつとする。

「あ、待つてください。護衛をつけますから」

「げつ！ すたこりさつさだぜー！」

俺は駆け足で逃げ出した。

「ずいぶんと腰の軽い殿様ですね。大丈夫なんですか？」

海賊の親玉、もとい行長の家臣がもじやもじやの髭に手をかけながら行長に問いかける。

「ん？」

行長は不思議そうに問いかけなおした。

「いえ、殿様はもつとずつしり構えていなくひや。ついてくるもんもついてきませんぜ」

行長は会得したように頷くとかすかに笑いながら答えた。

「おまえ、一度も見たことのない領主と、一度でも顔を合わせたことのある領主どちらに命をかけるといわれたらどちらにかける？」

「そりゃあ、顔を合わせた方がいいですね」

そういつた後、あつと声を上げた。

「の方はあれでいいんだよ。さて、仕事に取り掛かるか

「お香、お香、かえつたよー」

夕暮れ時にお香の家を訪ねる。

春の陽気も、夕暮れには涼しくなって寒いくらいだ。

城に直行すると、仕事を押し付けられるためここに来て休息するのだ。

最近では日課になりつつある。

お香もわかつたもので、すぐに奥から顔を出す。

「今、お茶を入れますね」

「すまんね、あと軽く食べるものが欲しいな」

「いつもの湯漬けですか？ ちょうど今日鮎を売りに来て  
いたのでついでに買つてしましましたので」

「おお、鮎か。いいねえ」

「少しお待ちください」

湯漬けとはお茶漬けのお茶がないバージョンである。

お茶の代わりに昆布や鰹のだしを白米にかけて食べる。  
ちょっと物足りないが、これはこれでなかなかおいしい。

食べ物といえば俺はこの時代の食べ物にほんざつしていた。  
味のバリエーションはないし、肉はない、調味料も少ないので自  
分で作つてしまおうと試みた。

まず肉である。鶏、牛これらはすでに日本にいた。

しかし食用に耐えられる物ではなかつた。

牛は農業に利用されているので筋張つていて固かつた。鶏は大量  
生産できていない。

食用牛を放牧させ、鶏も全て宇喜多家が買い上げるということを  
確約し、農家と交渉した。

不承不承ながら、農家を頷かせた。

豚は中国から取り寄せた。

これも農家に命令して、育てている。

まだ実験段階ではあるが、戦国時代の下地として穀物の過剰生産があるので成功するだろつ。

もつと手を広げて、毎日でも肉が食べられる環境を作り上げなくてはいけない。

あとは甘いものが少ない。

砂糖が貴重品なため仕方がないといえば仕方がないのだが、元来の甘い物好きとしては黙つていられない。

とりあえず、領地内でサトウキビ作りを奨励した。

これも結果が出るのはまだまだ先のことだろつ。

今はまだ食べれないのかと落胆にくれていたところ、ある思い付きが芽生えた。

バターを作ればいいのだ。

牛はすでにある程度いるので、乳を搾らせ、とっくに入れ、思いつきり振る。

脂肪が分離したところをねり、水分を抜き、塩をふりかけバターを作つた。

よし、これで小麦粉を焼けば何とかできるはずである。

ブリオッシュの完成である。

と思っていたら、日本にある小麦粉はお菓子作りには耐えられるものではなかつた。

ブツンッ

俺の中で何かが切れる音がした。

まず、お菓子が作れる小麦粉を手に入れなくてはならない。これは簡単である。輸入すればいい。

次はこれを国内で栽培しなくてはならない。日本の風土には合わないことぐらいいはわかる。

合つていれば自然に作られるようになつてゐるはずである。

湿度が低い場所、北海道、カルフォルニア。ぱっと思いつくのは  
ここに辺だ。

待つてろよ。こんちきしょー。

バターが作れるということはチーズもいけるのではないかといふことで、牛乳を鍾乳洞に放置した。

案外簡単にチーズを作成することができた。

チーズとバターがあればグラタンやドリアン、ほうれん草のソテーなど料理の幅は広がる。

とりあえず、宇喜多家の料理人に作り方を教え、城下で料理屋を開かせた。

これがなかなか好評で、夕方には列を作つて並んでいるところを良く見かけるようになった。

珍しいものが食べれる。と評判である。

さすが日本人。食に関しては貪欲である。

「八郎様、できましたよ」

お香が湯漬けを持ってきた。

ご飯の上にすり潰した鮎が乗つてている。一緒に持つてくれたご飯の上にすり潰した鮎が乗つてている。一緒に持つてくれた

急須からお湯をご飯の上にかける。

鯉のにおいがご飯から上ってきた。

「いただきます」

俺はそういうと箸を取り、まず汁をすすつた。  
鯉と鮎の塩味が下の上から皿に入り込んでくる。

「ふう」

一息ついたあと、一気にご飯をすすつた。

あつたかいご飯に、塩辛い鮎がお湯で調和されてなんともいえな

い味になる。

一気に、あまり上品でなくすすつていぐ。

「『』馳走様でした」

「お粗末さまです」

「おいしかったよ」

「見ていればわかります。ほんとにおいしかつに食べる」と。見て  
いるだけで私もおなかがいっぱいになります」

お香がコロコロと笑つた。

それにつられて俺も笑つた。

「ハーハーのが幸せといつのだろ」。

## 18話 本能寺の変（前書き）

まことにまで読んでくださった皆様に感謝を申し上げます。正直、皆様がいなかつたらここまで書くことはできなかつたでしょう。

本当にありがとうございました。

ここまで17話もかかつてしましました。

17話です。長かった。

当初の予定ではもつと早くここまで来る予定だつたのに……よつて少しさしょる、ペースを今後あげる予定です。もしわかりにくいつづれいましたが、感想などで伝えてくださいと嬉しいです。

さて今後ですが、佐藤大輔氏の「信長征海伝」、「新・信長記」と話の流れが一緒になるところがあります。

最初から氏の作品の続きを書きたいということで始めました。

パクつてますのでよろしくお願いします。

17話は批判が多くつたことを受けまして少々プロットの変更を行つもりです。よつて矛盾が生じます。17話ではこういつていたのにここでは違うという場面があると思います。「」承ください。17話を書き直せばいいのですが、それよりも続きを書きたいと思います。時間ができたら17話も書き直したいのですが今のところ難しいです。それでも大本は変わらないといいますか、大部分は変わりません。

長くなりましたが、今後も続読してくださると嬉しいです。感想、評価もお待ちしております。

## 18話 本能寺の変

1582年 天正9年 皇紀2242年

「あ、いやー、殿のご賢察通りであります。動き出しましたぞ

ー

「動いたか、引き続き頼む」

石川五右衛門の報告を受け取った俺は胸が高まるのを隠すことはできなかつた。

俺は今、花の都、京都に来ている。もちろん観光などではない。本能寺の変で死亡する織田信長を助けようとしているのだ。

そもそも関ヶ原の戦いは豊臣家と徳川家の戦いである。織田家が生き残つた場合、関ヶ原の戦いが起こる確率は圧倒的に低くなる。俺が島流しにされる事もなくなるであら。

もちろん織田を生き残らせるということは俺が織田家で生き残つていかなくてはならないことを意味する。

織田家は前世でいうブラック企業だ。生き残るのは過酷を極めるだろう。

そのためのガレオン船であり、西洋馬なのだ。信長に媚を売りまくつて生き残つてやる。

多大なリスクは生じるが男なら一度は考えてみたことがあるのではないか。

織田信長が生き残つていた場合、日本はどうなるのか、産業革命、植民地競争、第2次世界大戦、これらに遅れることもなかつたのではないか。

この夢を実現することができる。やらいでか！――

関が原の戦いを有利に進めることも考えた。

時間を考えれば、俺が宇喜多家を今のように無理やりでなく、しつかりと掌握するこことができる。

しかし、こうこう展開にありがちなのが時間の修正力である。戦国自衛隊のようになってしまってはたまらない。

よつて、低リスク、高リターンを望める本能寺に賭けたのだ。

「既、準備は良いか？」

俺は後ろを振り返つて声をかける。

全員白装束である。

田は血走り、いまにもはねきれそつである。  
1万の軍勢を500で防ぐとしているのだ。  
狂わないとやっていられない。

ここでは狂つていいことが正常なのだ。

「おおおつー」

後ろから怒号が鳴る。

「大丈夫です。後は殿の号令を待つのみです」

「うむ、よくやつてくれた。行長。良くぞ兵を損なわず京まで連れてきたな。」

これらの兵は忠家ただいえが毛利方面に行く前に頼んでもよつすぐりの精銳を集めてもらつた。

もちろん京まで行軍したわけではない。

信長に謀反の疑いをかけられてしまつては元も子もないのだ。

よつて兵を小部隊に分け、ある者は商人、馬借に、ある者は乞食に身をやつし京まで入ったのだ。

10人単位の小部隊を京まで別々の経路を使い、あらゆるものに変装させ、3ヶ月の時間を一杯まで費やした。

武器は輸送した。鉄砲を中心に岡山から京まで瀬戸内海を通りて船で運んだのだ。

ほぼ全員に鉄砲を支給してある。戦国時代で鉄砲の有用性に気づいた大名の一人は俺の親父なのだから、俺は少しこに入れするだけでよかつた。（ライフリングはまだまだであるが）

こうしてここ、京にいる。

これはいうほど簡単なことではない。

兵といつのは大人數で固まって行軍しないと落伍者、脱走兵などで壊滅することも珍しくない。

いくら精銳揃いとはいえ500もの兵をここまで来れたことは奇跡に近いだろ？

もちろん小部隊ごとに隊長を決め、徹底的に脅し、褒賞を約束するなどあらゆる細工を施した。

それでも向こうを出発したときと比べて、兵は3分の2ぐらいになっている。

京で何をするかまでは兵には教えていなかつたので計画が漏れる可能性は多分ないだろ？

これは信じるしかない。

それでも小西行長の功績は大きい。

「どーの一、明智光秀の部隊、2つに分かれましてー」「ぞーいますー」

五右衛門が息を切らせて再びやつてきた。

「きたかつ！ 一方は妙覚寺の信忠様に向かうのだな」

「そのようです。齊藤勢およそ千が妙覚寺でござりますー。我々の方は明智秀満率いる三千でござりますー」

「危ういな」

織田信忠を救出するための別働隊は山中鹿之助が率いている。本能寺は今ある五百のみで対抗しなければならない。

五百対三千、しかも向こうには光秀率いる主力が残っている。多分1万程度だろう。

部隊を2つに分けるか……

いや、兵力の分散は各個撃破につながってしまう。

「行長、いい案はある？ 兵を2つに分けた方がいいかな？」

「殿、いつておきますが私もこれが初陣なんですよ。あまり期待しないでいただきたい。

兵を分けるのはあまり良くないかと。ただでさえ人数が少ないので

ですから」

俺も小西行長も今回が初陣である。

今回の作戦は俺の横暴で行つた。小西行長も、山中鹿之助も当初は反対した。

俺が最後まで責任を取らなければならぬ。

腹をすえなければ。

俺は胸に手をやる。

お香から貰つたお守りがそこにはあった。

京に出立する前にお香には「戦に行つてくる」とだけ伝えてあつた。

お香は悲しそうな顔をしたあと、出立前にお守りをくれたのだ。

「八郎様の無事を祈っています」

悲しそうな微笑とその言葉で送り出された。

よしつ！ 心を奮い立たせると、地図を取り出す。京の地図だ。

石川五右衛門に命じて書かせて置いたのだ。

もともと京を中心に活動していた石川五右衛門だ。期待以上の綿密な地図となつていてる。

「妙覚寺は鹿之助に任せよ。今更変更しても仕方ない。で、こ  
」が本能寺」

俺は地図の一点を指差す。

そこから地図を右側までなぞつていぐ。

「で、今我々がいとこいがこい」「

「光秀はどうに進行していぬ?」

五右衛門のほうに話を振る。

「斎藤勢は鴨川上流方面から周りてくるでござります。秀満はそ  
のまままつすぐ本能寺に向かつてくるでござりますー」

俺は言われたとおりに地図に書き込んでいく。

となると我々が秀満と相対する前線はこりへんか。

前線になるであろう位置に線を引く。

「行長。お前は急いで信長様にお会いし、謀反の団を云々、脱出

しほ。俺が時を稼ぐ

「ですが……」

俺は続きを遮った。

「逃走経路を作ったのはお前だ。そのほうが確実だ。俺は何とか  
なる」

無理やり口端を上げ、笑いを作る。

「わかりました。殿、ご無事で

行長はすぐさま本能寺に向けて馬を駆け出した。

「五右衛門、変化があつたら早急に教えろ」

「あいー。わかりましたー」

五右衛門も再び敵情視察に向かつたために駆け出していく。

「よしつ、早急にこの位置まで移動するべ。我に続け

歴史は変化する。ゆっくじと、着実に。  
田の本から始まつた波はやがて激流に変わつていく。

夜の幕は今開始されたのだ。

完全な奇襲だった。

「敵は本能寺にあり」

この言葉を聴いたときは奮い立つたものだった。

逆を返せば敵は本能寺までいない。

この根底をくつがえされてしまった。

初めは味方の兵が暴発したのだと思った。

先発隊として送り込んだ足軽が次々と倒れていった。

鉛球ひでのうが秀満ひでのり自身の下へ届いたとき、初めて気づいたのだ。

「鉄砲隊！ 前へ！」

動搖を押し殺して叫んだ。

「はなてええええ」

大きな身振りをしながら言い放つ。心と体を切り離す。何度も戦場を駆け抜けるうちに身についたことだった。

味方の鉄砲が轟音を放つ前に、敵の銃撃によつて幾人かが倒れる。うめき声を上げているが今はほうつておくしかない。

うめき声を上げたいのはこちらの方だ。と叫びたいがどうしようもない。

すでに引き返せないとこ今まで来ている。

我らが大将明智光秀はすでに反逆ののろしを上げた。

今更、どうすることもできない。

信長の首級をあげないかぎり生き残ることはできない。たとえ事前に謀反がばれていたとしても。

奇襲は受けたものの手勢はある。敵勢は全員白装束で決死の覚悟をしている限り、少數なのであるう。

勝機はある。

今は本能寺これのみだ。

相手は廃屋で簡易な遮蔽物を利用している。が、時間がなかつたのだろう。

あまりできは良くない。

1箇所突撃できるであろう地点を見つける。時間との戦いだ。

「鉄砲やめ！ 鋒矢！」

鋒矢とは「」の形に兵を配置することである。陣形の一つだ。上の部分で敵に突撃する。突破力に高い陣形の一つである。

一斉に隊形が整えられていく。

「目指すはあそこだ。すすめえええ」

遮蔽物の合間に向かつて突撃を敢行する。

遅れを少しでも取り戻さなくては。こんなところに戦っている場合ではない。

「すすめえ！ すすめえ！」

焦りは声となり部下を叱咤していく。

「レツツウ！ パアリイイイイイイ！」

不意に前方から声が聞こえた。敵の大将か？ まだ声が幼い。

轟音が響いた。

左右、前方。三方向から一斉に響く。

はめられたつつ！

気づいたときは遅かった。

左右の兵が倒れていき。意識が遠くなるのを感じた。

「本能寺が落ちました」

斥候が戻ってきて報告した。

「信長は！ 信長の首はあつたのか！」

「焼けているためしかとわかりませぬが、南蛮の甲冑の遺骸が見つかりました」

「案内せい」

京は夏真っ盛りである。

夜といえども盆地特有の気候は肌にべたつく暑さをはなっている。さらに入間の焼けた臭いが合わさり、不快感を倍増させている。それでも今はその不快感を全く感じなかつた。

俺が天下人だ。

俺が王だ。

何度も信長にこけにされ、屈辱を受けた。

殺してやるうと思ったことは一度ではない。

そもそも奴には天下人などもつたいない。  
教養も、戦術も、私の  
方が上ではないか。

信長が勝つていたことは、生まれながらの地位、それだけだつた。それだけで私があのよつな下劣なものの下につかなくてはならなかつた。

それも、もう終わりである。

白装束の軍勢が出てきたときはこれまでか、とも思ったが、どこ  
の軍なのかもわからなかつた。

先鋒を叩いただけで消え去ってしまったのだ。

まあそれもよし

「このよき夜に不口解な」とほゝゑものだ。

現場に着くとすでにある程度人が集まっていた。

「どけ！ どけ！」

声を張り上げて人群れを搔き分ける

そこには11の焼死体があつた。

確かに信長独特的の南蛮甲冑をこねてゐる

横にはモニターの歹体がある。

にせんばあいに焼いていたい

「米蘭記」

光秀は呟いた。

「ふはははははははつ くはつ  
だははははははつ かはつ  
ふ

「第六天魔王かつ  
あはつ  
ひーひひひひひ。」

笑い声はいつの日途切れるとはなかつた。

報は速やかに伝わつていつた。

そしてここ備中高松にも届くことになった。本能寺の変から三日の夜のことであった。

秀吉はこの報を聞くなり奥に引きこもつた。すすり泣く音は途切れることがなかつた。

周りのものはこのままでは埒が明かない。何とかしてくれ。と頼つてきた。

やられてしまふ。

黒田官兵衛孝高は足を引きあらせた。

しばらぐすると秀吉からお呼びがかかつた。  
天幕の中に入ると、他の武将もいる。羽柴小一郎秀長  
蜂須賀小六らである。

真ん中には秀吉が小さい体をさらに小さくさせていた。

「かんべえええ。よく来たなあ。上様が、上様がああ

「聞きました。お亡くなりになられたそうぞ」

「上様は、わしを、わしを百姓のの身分からここまで上げてくだけつた」

……話はまだ続いている。

報を聞いてからずっと、「のよひに泣いては思ひ出話を語り、泣きながら上様とのことを語つた。いい加減うとうざつする。

しかし今回は少し違つた。

どうも様子が違う。泣きながら話をしてくるのだが、とにかく  
ろで冷静にこちらを見つめられた。

そろそろか。

秀吉殿も大変だ。苦笑するのを手で隠す。

「秀吉様。いつまでもお嘆きになつても上様は帰つてきませんよ。  
今こと不忠な行為で天下を取つた明智光秀を成敗する時です」

天下をおわせる。

「おまえ！――！」

秀吉は怒号を張つた。

「秀吉様が討たないで、如何しましよう。我々こそ上様一の忠臣  
なのですぞ」

「もうよい。さがれ」

秀吉はまだ怒っているかのように官兵衛を退かせた。

演技だ。もちろん最初は演技ではなかつただろう。本心で泣き、上様を慕つたのだろう。

秀吉のいいところである。

しかし、本心が演技になつた。

私を呼んだのも仇討ちを献策させるためだろ。このようなことは非常に難しい。

秀吉殿も大変だ。

わしは秀吉殿を使って天下に絵をかける。壮大な、誰も見たことのないような絵を書ける。

「えけい 恵瓊にえけいこれを」

官兵衛はすぐこちらにきてほしいといつ皿を書かせた手紙を急使に渡した。

毛利との講和はえけい 恵瓊の働きが必要だ。

秀吉と毛利との和議は早急に進められた。

- ・高松城の開城
- ・高松城城主、清水宗治の切腹
- ・毛利家の領地のうち、備中、備後、美作、伯耆、出雲の五ヶ国を信長に献上すること。

この3点で合意を得た。ちなみに伯耆、出雲は島根県東部と鳥取県西部である。

毛利家としては飲める条件であった。

大阪、京への制海権を失い、さらに長年の織田家との戦は毛利家の台所事情にかなりの圧迫を見せていた。

官兵衛と恵瓊の努力により一夜のうちにこれらのことが決定された。

もちろん一夜にして講和の提案がなされ、採決されたわけではない。

もともと秀吉は毛利を攻めるときに恵瓊を使い、何度も使者を行き来させてある。

講和の基本枠は既に定まっていたのだつた。

それを今回少し譲歩させて、早期に結んだのだった。

そして、翌日から撤退が開始されることになる。

「宇喜多殿からお先に」

官兵衛はこの撤退の総指揮を任せている。

宇喜多家は前線に近い所に本拠地がある。混雑を避けなくては。それに宇喜多は信用できない。今ここで宇喜多に反旗を翻されれば秀吉殿はどうしようもなくなる。

八郎を連れてこればよかつた。

あの小僧を岡山城に置いてきたのは間違いだつた。

本人が残りたいと頑迷に要求したこと、宇喜多家家中が一応八郎の本でまとまつたこと、後見人として指名され、信長にも認められたため強く出れなかつた。

痛む足をさすりながら官兵衛は忠家に慎重に撤退を指示する。

雨が降るか。

この撤退、吉と出るか凶と出るか。

翌日、本能寺から五日。

全ての将に撤退の指示を出すと本當に入り、全てのものに飯をとらせた。

これから行軍が始まる。今のうちに栄養を取らせなくてはならぬい。

次はいつ飯を食べられるかわからない。

そのうちに秀吉が心配そうな顔をして陣當に入ってきた。

「かんべえ。小早川隆景は大丈夫じゃと思うが、吉川の親子は気性が激しいゆえに我らを追つて来るかもしれません。

したら、どうしようぞ？ 本能寺の件、毛利にばれたらわしらはおしまいじゃ」

撤退中に追撃されることは軍勢の死を意味する。

秀吉もこのことは金ヶ崎の戦いで身にしみている。

「小早川は信義に厚く、目先に飛びつくようなことはせんじょうう。山陽は小早川が主ですから。」

「そうか？ それでも吉川が独断するかもしれん」「それでも大丈夫です」

微笑しながら地図を出す。

「高松城は先ほどまで水浸しでした。先ほどここの堰<sup>せき</sup>を切りました。しかし依然として水は残っています。

そして私が撤退するときに、他に20箇所程度堰<sup>せき</sup>を切れます。高松城から南は水浸しになり一切の馬、人、車は通れなくなるでしょう。」

秀吉は安心して帰つていった。

これが後に中国大返しと呼ばれることになる。

中國大返しとしてよく勘違いされているのは、72時間耐久フルマラソンのように撤退したという誤解である。

そのようなことはありえない。

足軽の武器や武具を別で運び、要所要所に水や食料の補給地点を作り走らせる。

某大河ドラマであるシーンであるが、このよつなこと実際に起これば京についたときに秀吉には一兵もいないだろ。う。

軍勢は一度崩壊すると、取り戻すことはできない。

実際は肅々と、地味に隊列を組み、京までの道のりを歩いていくこととなつた。

石山城。またの名を岡山城。  
桃寿丸は現在こここの領主となつていて。代理といつ肩書きがついているが。

それは1ヶ月前のことだつた。

「桃寿丸。俺は少し出かけてくる」

「どこ行くの？ また船でも見に行くの？」

「いや、今回は少し長くなる。3ヶ月ぐらいは帰つて来れないかも」

「ええ！ その間、城はどうすんのさ」

「ん？ お前に任せた」

「ええ！ ぼく！？」

僕は決して有能ではない。それは八郎の側にいれば常に感じていることだつた。

「ぼくには無理だよ。」

「大丈夫。大丈夫。又兵衛と隆佐がいるから。何かあつたら一人に任せればいいよ」

「無理。それに僕がこのまま城を取っちゃつて八郎に返さないかもしれないよ？」

そういうこと考えないの？」

もちろん本当に城をとろうとは思っていない。義父には感謝しているし、八郎も本当の弟のように思つていてる。

が、僕だって野心がある。年も16歳だ。武門に生まれたものと

して武功も上げたい。

「それならそれでいいよ。あーでもそりしたら俺の衣食住だけは保証してね。

俺はお香と楽しくキャツキャツウフフしてるから

八郎は最近良く見せるようになつたところのやうな笑いを顔に浮かべる。

僕は頭を抱えた。八郎は一度言い出したことは必ずやり遂げる。  
しかのすけ  
鹿之助がいい例だ。

今度ももう止まらないだろ？

「わかった。精一杯はやつてみるよ。でも、どうなつても知らな

いからね」  
「忠家さんが戻ってきたときは忠家さんの。それ以外は隆佐じゅうさと又

兵衛たべえの言つ事を聞けば大丈夫さ。鹿之助と行長と五右衛門は連れて

行くからね」

そう言つて八郎はすぐに出かけようとする。

やはり前から計画していたようだ。今日出発するのだろ？

「あつ！ 忘れるところだつた。」

八郎は部屋に戻ってきて、ぼくに1通の手紙を渡した。

「なにこれ？」

「今は意味のないものだ。だけど、もし毛利に行つた我ら宇喜多軍が想像より早くこの城に戻ってきたときこの手紙の通りにすれば大丈夫だ。

くれぐれも頼んだぞ」

「まあよくわからないけど。わかつた」

「んつ。よしつ。くれぐれもなくさないよつにね」

そういうと八郎は後ろを振り向かずにして行つた。

ている。

最初はやる気があった。

領主として国を治めるとは思つていなかつたが、できる限り最善をつくそうと思つていた。

しかし、いきなり領主といつ立場になつても何をしていいのかわからない。

忠家はいないので、隆佐と又兵衛を頼ることになった。

隆佐に疑問をぶつけたところ返ってきたのは全くの予想外だつた。

「桃寿丸様。何もしなくともよろしいのです。当主といつものまゝいるだけで十分な役割を果たしています。

特に今は忠家様が軍事面を一手に引き受けていますので安心してくださいください」

「でも、八郎は色々やつていたよ」

「あれば、特別です。くれぐれも真似しないようにしてください。長生きできなくなりますよ。

私も正直言いますと八郎様がいなくなつて清々していませんよ」

「そうなの?」

「そうです。お願いですから、何もしないでくださいね」

というような感じで一ヶ月が過ぎたのだ。

「ひまだー」

最近では独り言が多くなつてしまつた。

なんかいいことないかなあー。

と考えていると隆佐が慌てて入つてきた。

「桃寿丸様！ 戸川とがわのものが帰つてきました。」

「え？ まだ高松にいるはずじやないの？」

「どうやら、毛利との和議をなしたそつです

隆佐が説明をする。

「秀吉殿が帰還されるようですね」

又兵衛がどかどかと入つてくる。

「戦が終わったならいいことだね」

「それでもないな。このような中途半端なときに帰つてくるなど信長が許すはずないだろうて。

何があつたのかもしけぬな

又兵衛がどかつと腰を下ろし髪をかいだ。

「なにかつて、何？」

「そんなこと某にはわかるはずもあるまいと」

「そうなんだ……」

どうしたらしいんだ。こんなときこそ僕がしつかりしないと。領主の役目を果たさないと。

でも、なにをしたらしいんだ。だめだ、全然わからないや。

「今は意味のないものだ。だけど、もし毛利に行つた我ら宇喜多軍が想像より早くこの城に戻ってきたときの手紙の通りにすれば大丈夫だ。

くれぐれも頼んだぞ」

八郎の声が聞こえたきがした。

そうだつ！ そういえば八郎から貰つた手紙があるじゃないか。あれは確か、僕の部屋の机の引き出しの中に大切にしまつておいたはずだ。

「隆佐、僕の部屋の机の引き出しに手紙があるはずだ。取つてくれない？」

「わかりました」

隆佐はすぐに部屋から退出した。

「なんなのですか？」

「さあ？ でも、たぶんきっと何とかなると思つよ」

そう。あれは八郎が書いた手紙だ。そして八郎はこのことを予測していた。

そならばきっとあの手紙が何か道を指し示してくれるだろう。

「もつきました」

隆佐が急いでやつてきた。

軽く息が荒れている。

手紙を貰つと、早速中を開け書いてある文に目を通していく。

桃寿丸。この手紙をお前が読んでいるということは俺は既にこの世には存在しないだろ？

え？ うそ？

冗談はそのくらいにして、本題を開始しよう。

この手紙を読んでいるということは、秀吉軍が宇喜多家に撤退を開始していることだろ？

そして桃寿丸、君はどうしたらいいかわからなくなつていてると思う。

だが、心配しなくていい。下に行動指針を書き並べておいた。

- 1、お湯を沸かし風呂を用意すること。できるだけ多く。
- 2、ご飯、握り飯かなんかを秀吉軍1万程度にいきわたるよう手配すること。
- 3、今回の秀吉軍の撤退を大いに盛り上げること。できるだけ派手に。
- 4、桃寿丸は秀吉を城門まで迎えにいき、できる限り言つ事を聞くよ。
- 5、秀吉軍の殿に黒田官兵衛がいるはずだ。彼に手勢を『『える』』と。旗も。指揮は又兵衛辺りが良いと思つ。

以上

追伸：これらのことが成功したら全て桃寿丸の功績としな。失敗したら俺が責任を取る。

「んんー？ 正直よくわからない。」

「風呂と同じ飯を用意することは兵を休ませるためなのだろ？ なぜ、撤退を盛り上げなくてはならないのか。よくわからない。」

「桃寿丸様。何と記されておるのです？」

又兵衛が僕に聞いてきた。

「同じ飯を用意しろ。お風呂も。あと盛り上げろって

「そうですか。で、どうなさるので？」

又兵衛は僕を試している？

「隆佐。握り飯をできるだけ多く作れる？ あとお風呂もできる限り」

「わかりました。なんとかしましょ」「う」

隆佐は了解するとすぐに準備をするため部屋から出て行った。

隆佐が部屋から出て行ったあと、ゆつくつと答える。

盛り上げろか。何をすればいいんだろう。盛り上げる……

「祭りなんてどう？ お祭りすれば盛り上がるんじゃない？」

「ほう、祭りですか。面白いですね。よろしかろう。私が指揮致します」

します

幸いにして八郎のおかげで宇喜多家は好景気真っ最中である。宇喜多家が財源をじぶん捨てるよつて放出していいるためだ。

隆佐が嘆いていた。

この状態なら祭りも盛り上гарること間違いないしだ。

また暇になつちやつたなあ。

「そうか！ 領主はそういうものなのだ。」

方向、行き先を決めるだけなんだ。後は任せればいい。そういうものなのだ。

祭りの準備は又兵衛主導で行われた。

又兵衛はその大きな体をいっぱいに使い指導した。

大名主催の祭りである。

人が行きかい、太鼓を打つもの、鉦を鳴らすもの、陣貝を吹くものなどが乱れている。

誰もどがめるものはいない。

元々、又兵衛はこういうものが好きなのだろう。

「戦も祭りも要領は同じだ。桃寿丸様、お任せあれ」と豪語したので安心して任せている。

うん。又兵衛は頼りになる。

着々と準備が進んでいく中で、続々と宇喜多家家臣たちが戻ってきた。

戸川を筆頭に家臣たちが続々と帰つてくる。

その中には忠家も混じっている。

もちろんこれらの家臣全員城門まで迎えに行つた。

「桃寿丸様。ありがとうございます。わざわざ迎えに来てください」とは、「

という具合に予想外に感謝されてしまった。

そしてついに秀吉を迎えることとなつた。

既に祭りは始まつていてる。

岡山城下はこれまでに喧騒に包まれ、商人、近くの農民、旅

人などであふれかえつている。

秀吉は輿に乗ってきた。

僕は岡山城付近の野田というところまで近習と共に迎えにいった。

秀吉は引き戸を開け、僕の顔を見ると

「よう来て下された」

とうれしそうにいった。

そして、怪訝そうな顔をして聞いてきた。

「八郎殿は、来られないのか？」

「八郎は用事があるといって今ここにはおられません。今は僕が領主代行です」

と答え、八郎の出て行つた経緯を説明した。

申し訳ない気持ちがいっぱいだ。なぜ八郎はここにいないのだ。初めて気づく。これは八郎の仕事ではないのか。

もちろん僕も秀吉も田で語るだけでそれ以上は口にしなかった。

秀吉としてはここで八郎に会えないのは厳しかった。宇喜多家は既に信長の詫報を知っているかも知れない。そしたら秀吉軍に向けて兵を擧げることも不思議ではない。この地が敵地になつた場合全滅する。宇喜多の人質として八郎を自分の輿に入れておこうと思つたのが、いないのならそれもできない。

氣まずい沈黙の中秀吉を乗せた輿は岡山城までつくるとなつた。

岡山城城下の喧騒を田の当たりにした秀吉は苦い顔をしたあと  
「これは、いつたい何が始まるのだ？」  
と口にした。

「祭りをしているのです。秀吉様にも是非参加してもらいたいと思いますが」  
秀吉は困惑したような表情でこちらを見たが、含蓄したように頷く。

戦が始まるのか、宇喜多が寝返ったか、と思ったが違うらしい。どうも本当に純粋な祭りなのだろう。城下にこれほどの人がいることからもわかる。

なら、なぜ？ という疑問が出てくる。

「これはこれは、」好意かたじけない。私も参加したいがなにぶん急ぐ身の上として。

一泊して部下には英気を養つてもらいたいと思うが、どうだらうか？」

「大丈夫です。すでに部下の方にも風呂と飯の準備はありますから」

これは、わしの軍への慰撫なのだ。士氣を落とさないよう宇喜多が気を使っているのか。

秀吉軍は日本史史上類のない大掛かりな撤退を演じている。

そう、撤退なのだ。

信長が破れ、毛利家との戦線を支えきれなくなつた。つまり敗軍というわけだ。

しかし、それを兵に悟らせてはいけない。むしろこれから戦で天下を取れるということをわからせなくてはならない。

撤退でなく、天下への行軍としたい。秀吉の本心だ。

撤退とは兵が敵兵にかかるて死ぬよりも多く兵の士気が下がつて軍を離脱する方が多い。

一人離脱したら千人は離脱する。金ヶ崎の戦いで秀吉は身にしみ

てわかっている。

宇喜多は我が軍の士気の低下を防ぐとしている。宇喜多が信長の詫報を知っているのかわからないが裏切ることはない見ていいいだう。これが策略でない限りは。しかし、そうであるならば、わしが天下を取つたとき、毛利だけではなく宇喜多にも貸しを作つてしまうことになる。これはまずい。

「ほう。そうか。してこれは桃寿丸殿が考え付かれたのですか？」

盛り上げるといわれたのは八郎の手紙からだ。しかし追伸には僕の手柄にして良いとあつた。

これは手柄になるのか？ 秀吉の表情からはわからない。もともとこうしろといったのは八郎なのだ。これを自分の手柄にすることはできない。

「いえ、八郎が命じました。僕はそれに従つただけです」

「八郎殿はいつごろでかけていったのですか？」

「ええ一つと……一ヶ月前ぐらいですね」

一ヶ月前！ 八郎は既に予想していたのか。信長が本能寺で討たれること。わしが撤退すること。

いいや、そんなことありえるはずがない。

秀吉にかすかな悪寒が走った。

「しかし、実行に移したのはおんじだうへ、なら手柄はおんじのもんだ。わしから感謝しよつ」

「それは……」

そのとおりだ。と桃寿丸は思つ。だが手柄を横取りした気分だ。あまりいい気分ではない。

その後秀吉は一泊した後、すぐさま岡山城から姫路城まで進んでいった。

あとから来るであろう大勢の部下をねぎらってやつてくれと桃寿丸に懇願した。

その秀吉の心中に苦々しい思いがなかつたとは言い切れない。

中国大返し in 桃寿丸 20話（後書き）

更新が遅くなつて申し訳ないです。リアルがどうしようもないことになつています。マジでつらいです。

今後も更新が遅くなります。ご理解ください

殿の官兵衛は秀吉から半日ほど遅れている。

行軍による街道の混雑のため予定より遅れている状況だ。

官兵衛が宇喜多領に入り、岡山城に着いたとき、これようやく一仕事が終わったと思つた。

岡山城は一大要塞である。もし毛利が今から攻撃してきたとしても岡山城で腰を下ろさなくてはならない。

宇喜多家の反逆は気がかりだが、秀吉が無事通過できていることから問題ないであろう。

反逆するのなら秀吉が岡山城に入ったときを逃すはずがない。

官兵衛は岡山城に近づいて初めてその喧騒を目の当たりにした。ふむ。あの小童はあれでなかなか戦というものをわかっている。秀吉軍には秀吉しかいない、秀吉とわし、次に小一郎殿しかいないと思っていたのがこれは楽しみだ。

岡山城城下につくと桃寿丸殿とうじゅまるが迎えに来てくれた。

確かに、八郎の義兄だったなど記憶を掘り起こす。

「八郎殿は？ それとこの騒ぎは？」

桃寿丸は苦笑いした後

「八郎は一ヶ月前に出かけました。今は所在不明です。

これは今祭りの真っ最中でして。部下の方も粗末ではありますが歓迎の用意をしてますので」

官兵衛の部隊は疲れていた。

風呂と握り飯と平時では粗末であるがこんなときにはこれほどありがたいものはない。

これは気が聞く。祭りでの士気低下防止、細かな気遣い。なかなか

ができるものではない。

「これは桃寿丸殿が？」

「いえ、八郎の命令です」

「八郎殿はいないと聞きましたが？」

「手紙を書いてくれたのでそれに従つただけです」

「そうですか。その手紙見せてもらつても？」

「いいですよ」

桃寿丸は官兵衛に手紙を渡した。

ふむ。これは……

「これは届いたのはいつですか？」

「いえ、これは届いたのではなくて八郎が行方不明になる前に書いていったものです」

「というと、一ヶ月前？」

「そうです」

秀吉の行動もわしの考えもあの小童はわかっていたとでもいうのか……

本能寺の変さえも。

手放しでよろこぶわけにもいかんな。

「桃寿丸殿、この手紙の通りに今回は桃寿丸殿の手柄になされよ。この手紙はすぐに燃やしてしまった方がいいでしょう」

官兵衛も秀吉も残酷な面が強調されることの多い人物であるが、本来は人の命を惜しむ人物である。  
無用な殺生はさけるにこしたことはないと思つている。  
今回も純粹に桃寿丸、八郎を思つての言葉である。

「私は部隊をつけてくださいると手紙にありましたが？」

「そうだった。忘れるところだつた。又兵衛またべえを呼んできてくれ」

桃寿丸は近習に命じた。

そうするとすぐによしもと又兵衛はやつてきた。  
自身も祭りを楽しんできたのだらう。上半身の着物ははだけ、汗  
が滴つている。

「お呼びに」とかりました」

手ぬぐいで汗をぬぐいながら又兵衛は言つた。

「久しいな、又兵衛」

「」無沙汰しております。又兵衛殿

官兵衛は元又兵衛の上司である。

いろいろあつて又兵衛は官兵衛の元を離れる」ととなつてしまつ  
たが、官兵衛は又兵衛のことをかつている。

「それじゃあ、又兵衛。忠家のところに行つてきて。話はついて  
いるから。じゃあ又兵衛殿、こゆること」

桃寿丸はそういうと官兵衛の下を去つていった。

秀吉殿なら賛成はすまい。

毛利だけでなく宇喜多にも恩を売ることになつてしまつからだ。  
毛利はすでに我々秀吉軍を追撃しないことで、秀吉の天下取りを  
応援している。

ここで宇喜多軍の兵士を光秀征伐に参加させる」とは宇喜多に多  
大な恩を与えてしまうことになる。

といつても官兵衛には秀吉が天下をとつた後のことなど大して関  
係ない。

秀吉に天下を取らせさえすればいいのだ。

そのためならどのよほなものも使うつもりだ。

休息を終えた官兵衛の部隊はすぐに出発した。

部隊は高松城出発時よりも増大している。又兵衛率いる五百名が部隊に加わったからだ。

さらに宇喜多の旗も貸してもらい官兵衛自身の部隊にも持たせている。

我々の背後に宇喜多家がいると光秀への警告である。

官兵衛が急行軍して姫路城に着いたのは8日の夜である。

姫路城は元々官兵衛が居住していた城である。しかし、信長の進出、秀吉の出世を早期に見抜いていた官兵衛は秀吉の播磨進出を後押しし、さらにその足がかりとして姫路城を秀吉に与えた。自身は姫路城よりも田舎にある屋敷に住むことになった。城全体に篝火が焚かれており、昼間のように明るかった。あちこちに幕がはられており、出っ張ったところに秀吉自身がいた。

「おお、官兵衛。ご苦労であった」

秀吉自身が手を叩いて迎えに来た。

秀吉は官兵衛にねぎらいの言葉を大声ではやし立てた。

秀吉もこの撤退の殿を勤めた官兵衛の苦労をわかっているのだろう。

う。

秀吉が官兵衛の部隊を見たときに、宇喜多の旗、宇喜多家から連れてきた部隊を見ることになった。

これらの行為は全て官兵衛の独断である。

「官兵衛。良いことをしてくれた」

といつたが田は笑つていなかつた。

この時期、官兵衛の献策はことじとく秀吉に採用された。  
それほど秀吉が官兵衛に信頼を置いていたところではない。

「姫路に軍勢をどどまらせることはなりません」

この時期の秀吉の拠点は姫路城である。

当然、士卒の家族は姫路城下に住んでいる。

いつたん家族の下に部下を返してしまひと、士氣に影響が出る。  
逃亡もあるかもしれない。

これらを懸念することである。

1人として家族の元に立ち寄ることは許さない。破つたものは死刑である。

このようなふれが出され、実際秀吉の軍勢は皆旅籠に泊まることとなつた。

この時期の秀吉の織田家の立場を少し紹介しておこう。

秀吉は織田家諸将に好かれることが少なかつた。

元は得体の知れないものが天を上るように出世していくのだ。織田家臣としては気持ちのいいものではなかつただろう。

柴田勝家は無論のこと、滝川一益などは口もきかなつたらしい。

例外として前田利家、丹羽長秀ぐらいだらう。

その丹羽長秀は現在大阪にいる。

最も京に近い。これは最も明智光秀に近いと同意義である。

丹羽長秀は織田信孝とともに四国にあたつていた。

阿波の國を足がかりとして四国の切り取りとしろ信長から命令されていた。

阿波とは四国の右、つまり今の香川、徳島は近畿経済圏の一角をなしている。経済的にも重要拠点である。

応仁の乱時代、戦国初期には三好氏などが京から逃れた後四国に逃亡し力を蓄え、再び京へ攻め上つたこともある。京という地理性を考えれば切り取つておかなくてはいけないところである。

信長の配下の増大もこれに拍車をかけている。

信長が天下を取つた後、部下に土地を配分しなくてはならない。四国は絶好の刈り取り場であった。

四国の領主は長宗我部元親である。信長は長宗我部元親をあまりかつていなかつた。

信長の訃報を聞いたとき信孝、丹羽長秀は大阪で四国征伐の人員を集めているところだった。

当然、四国征伐はできず、長宗我部元親の手に落ちることとなる。光秀に最も近い位置にいながら信孝が出陣しなかつた。

その理由として挙げられるのは人員不足である。

堺で兵を集めていた信孝の軍は当初一万の兵を持っていた。

しかし、信孝は出陣しようとなかつた。

ぐずぐずしているうちに兵は減つていき、一万いた兵が2千まで減つていた。

歴史に上りを求めるのならここで信孝が無理をして出陣していれば歴史は変わっていたのかもしない。

たとえ兵力が少なかろうと光秀に対し果敢に兵を上げるべきだつた。

そうすれば、日和見を決め込んでいる筒井順慶、細川藤孝らを動かすこともできたのかもしない。

そして天下継承への発言力を増大することも可能だつただりつ。兵は刻一刻と減つていく。

そのような中で秀吉東進の報が入る。

信孝、秀長両名はほっとしたに違いない。

特に信孝は秀吉の上に君臨し、次代の天下人となることを夢想した。

信孝は摂津に入ったという秀吉の報を聞き、高山右近らを迎えてやられた。

決して自分からおもむこじとはしなかつた。

織田信孝率いる軍勢と羽柴秀吉率いる軍勢が合流したのは尼崎の寺であった。

秀吉の軍は中国からの強行軍のため皆疲れていた。

地面につなだれるもの、たおれているもの、そこら中にあふれていた。

大阪から信孝、秀長がやつてきたのはこのよくなときであった。信孝は馬でやつてきた。

普通、信孝ほどの、君主の三男ほどのものが馬上に見えたのなら最低、どれほど粗野なものであれ目礼ぐらいするものである。

しかし、秀吉軍には目礼どころか目をあわすものもいなかつた。

信孝は黙つていた。

信孝は自分が大阪から動けなかつたのを攻めているようを感じた

だろひ。

秀吉はここまでしているのに自分は大阪で兵を減らしただけなのだから。

信孝が来訪してすぐに評定が開かれることとなつた。

上座に信孝が座り、ついで丹羽長秀、そして羽柴秀吉が座り、その下に堀久太郎、池田恒興そして高山右近らが座っている。

秀吉が最初に口火を切つた。

「上様の仇をとらなくてはなりません。

逆賊、光秀を討ち上様の御靈をしずめなければなりません。

私はこの戦に命を懸けて降りますれば、この命たとえ朽ちようとも果たさせていただきたい。

たとえこの首が落ちたとしても首」と光秀めの喉にくらいついてやりましょう。」

といつたことをひづひづと、こんこんと語つた。

他の諸将、丹羽長秀を含め、信長の敵を討つことに批判はない。唯一、織田信孝のみが難色を示していた。

言葉にして批判しないが言外に含んでいる。

この会議の争点は奇妙なことに光秀をどう打ち破るのかといつことには一切触れられなかつた。

この軍勢を率いるのは誰か。総大将はだれかといつことである。ゆえに秀吉は戦に引き込んだかつた。

戦さえおこせば、多くの兵を抱える秀吉が光秀を討ち取つたことになる。

勝つこと。戦をおこし光秀の首級を上げさえすればよい。

結局、評定は秀吉に押されることとなる。

秀満は重い体をあげた。

本能寺の変での戦闘で意識を失つたものの、すぐに兵をまとめ撤退した。

殿はそこはわかつたもので

「勝敗は兵法の常。秀満、おぬしでも敗北するのだな。茶のようにはいかんか」

といつてから笑った。

殿は元来部下に対してはこのような側面も見せることがある。信長がこのことを知つていれば殿への扱いも変わつたかも知れない。

せんないことか。すでに火蓋は討つて落とされたのだ。幸い体に支障が残る怪我は残らなかつた。

すでに殿は京にいる。

京では殿も苦労しているだらう。

すでに近江は殿が完全に制覇しておられる。

美濃も稻葉一鉄との不可侵条約が成立した。

筒井順慶、細川藤孝らの諸将の集まりが悪い」とは気になるが、これも時間の問題だらう。

光秀、殿は本能寺の変以来変わられた。

元来がそうだつたのか、信長の抑圧から解放されのことなのかはわからない、無理をしているのかもしれない。

明るくなられた。底抜けなほどに。

理財には明るい殿であったのに安土に残つた金銀を京の寺社などに寄進した。

きたるべき一戦に勝てば、どれほど金銀を喪失しようが再び集めることができる。

殿はすでに天下を取つておられるのだ。あとはこれを維持するだ

けでよい。

「とのー、とのー、殿、一大事でござります」

「どうした、何事だ」

「秀吉殿が姫路に向かつております」

「姫路に？ 毛利はどうなつたのじや」

「毛利とは和議を結んだもよつゆえ」

「すでに？ 信じられん」

秀満は呟いた。

まさか！ と思わずにはいられない。

秀吉が京につくのは早くて一ヶ月を見積もっていたのだが。

織田の諸将はすぐには動けないと判断していたのだが。

一番恐いのは上杉を当たつていた武闘派の多い柴田勝家だといふことで自分が安土に居座っているわけだが。

「殿は？」

「日向守殿はすでに手勢を集められております。

反織田勢力を手際よく集めておられます。秀満殿、どうなさいますか？」

「どうするも何も決まつておるわ、後詰に出るや」

この時代、軍師という明確な職業は存在しない。

常に軍を指揮する大将に仕え、戦略、戦術の面で能力を發揮する  
といつわけではない。

もちろんそれに似た役目を果たすことになるのだが、明確な職業  
定義もなければ、軍師という役割を構築する組織体形もない。  
特権も存在しない。

簡単にいってしまえば軍師とは部下の中で戦略、戦術において大  
將から最も寵愛を受けて、献策を採用されることが多いというだけ  
に過ぎない。

よつて軍師といえど部下を指揮して戦場に行くこともあるし、戦  
闘もこなさなければならぬ。

官兵衛も戦場の一端を背負わされている。

足が悪いため輿に揺られているので、自身が槍働きできるわけ  
もない。

それでも部下の指揮は行う。

もともと官兵衛は最前線で部下を叱咤して戦うタイプの武将では  
ない。

足を患つ前と後で変わつてはいない。

宇喜多家から預かつていいる兵は官兵衛の指揮下に置かれている。  
幸いなことに後藤又兵衛じとうまたべえとは旧知の間柄で、彼本人の能力も官兵  
衛はかつているため支障はない。

もちろんこの天下分け目の、山崎での戦いでもわいてくる戦術、  
戦略はいくつもある。

が、私が任されているのは秀吉の軍の一部、左翼に過ぎない。

私の役目も終わったのだ。

官兵衛にさびしいような、わびいしいような感情が芽生えてくる。

私の役目は秀吉をここまで連れてくることこそであつたに違ない。

幼少のころから智謀があり、才覚もあつたが、君主や同僚、地理に恵まれなかつた。

何かを成し遂げたいとも思つていた。それで失敗したこともある。

秀吉を使い、天下に絵を書く、十分すぎる役目だった。

後は秀吉自身が行わなくてはならない。

天下を取る足がかりは作つた。これを維持するには織田家への切り崩しが必要だ。

今後の秀吉の相手は柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益、前田利家、佐々成政、細川幽斎などの大名である。

そこには私は必要とされていない。

わかつていて、自身で望んだことではあるがさびしいような気持ちはとめることができない。

中国大返しから一気に光秀との戦端を開いたかのように見られる山崎の戦であるが実は両軍にらみ合つては数刻の時間を費やしている。

光秀の方は防衛戦争であるから、相手の出方を伺つことは理になつていて、

光秀の方が寡兵であつたのでその点からもおかしいところはない。

信孝、秀吉は4万、光秀一万6千である。

光秀は兵を北方に移して、柴田勝家の備えとした。

このことから光秀の兵力は寡少となつていて、

光秀の方はわかるのだが秀吉の方は不思議なことがある。  
本營が山崎から遠すぎるるのである。

これでは秀吉は前線を指揮することはできない。合戦を見る」とい  
もできない。それでは士気に影響が出る。

もちろん秀吉がこんな簡単なことわからないはずがない。

秀吉は

「三七殿はまだ来られぬのか」

と方々に叫んでいるらしい。

三七とは織田信長の三男である、のぶたか信孝のことである。

これを聞いて官兵衛は合戦がいつた。

信孝殿を待つておられるのか。

信孝殿は先の軍議で秀吉を総大将とすることを認めた形になつた。  
よつていつたん軍に参陣すれば一武将となる。

嫌なのだろう。

秀吉の下につき、自信の実益が全く得られない合戦に参加する。  
たとえ飾り物としても総大将として参加できれば喜び勇んだで  
あらうが、それも適わない。

拗ねているのだ。まったく子供である。

もつともこのまま来ないといつ心配はない。

秀吉が信長の敵討ちをしていくときに自身はただ大阪で遊んでいたなどと通るわけではない。

ただ精一杯の抵抗として、参陣するのを渉っているにすぎない。

まあこんなことは私には関係のないことだ。秀吉が解決すべき政  
治問題だ。

おおつとー

あやうく輿から落ちそうになってしまった。

思考が別のことについていた。

山道で輿に乗っているのは辛いものである。

官兵衛は左翼を任せている。よって天王山を登らなくてはならない。

他にも直発的にあれ、命令されてあれ多くの部隊が天王山を登っている。

天王山。

秀吉軍から見て左に位置するこの山は非常に気になる山であった。戦術的にそれほど重要なわけでもない。大勢に影響するほどの価値はないと思っている。

気になる山という表現がもつとも的確だろう。

とつておいて損はない。ということで登っている。

両軍が衝突したさい、この山から鉄砲を撃ちかけることができる。

「殿！ 殿！」

「どうした？ まだ光秀が動くには早いだろ？」

「それが、物見が戻ってきたのですが。

幾分要領を得ないようにして。もしよければあつていただけないかと」

「どうか、通せ」

物見とは今で言つ所候である。

本隊が通過するところの道を前もって調べ、敵兵の有無、その他情報を得るためのものである。

物見の重要性がわかつているだけに彼らの言ひ事を粗末にはできない。

「この者が、この先で兵を見たそうで、

「兵？ 光秀がすでに陣取つてゐるのか？」

「いえ、どうも違うようです。詳しく述べこの者に」

「なにがあつた？」

物見に問いかける。

「私が見たのは、五十五歳の兵です。非常に規律正しく、この先に布陣しております。」

「光秀の軍ではないのか？」

「いえ……私も最初そうではないかと思つてゐたのですが、どうも様子が違うようでして」

「よくわからんな。旗は、旗は見たのか？」

「それが……」

官兵衛は今まで登つてきた山を少数の兵を率い、全速力でかけ戻つた。

輿を担ぐものが一歩歩くごとに激しく揺れるがそんなことは一向に気にならなかつた。

わしが描いたものを、描こうとしたものが崩れていくのを感じた。しかし、不思議と先ほどまで抱いていたさびしい感情は霧散していた。

やつてくれた。やつてくれたわ。

わしも、秀吉もあの小童の手のひらで踊つていたといふことか。なぜか爽快感に浸されている。

後ろではすでに合戦が始まつたらし。

鉄砲の音、陣笛の音がこだましている。

信孝殿がやつてきたことによつて、秀吉本陣が前方に移動する」とで、前線が押し上げられる形となり戦端が開かれた。しかし、官兵衛はそんなこときにしていない。

今は秀吉の本陣に向かうべきだ。

それも早急に、迅速に。

「かける。足が折れてもかける」

兵に叱咤激励する。

わしの役目もまだ終わっていない。これからまたこき使われることにならう。

官兵衛の顔には笑みが浮かんでいた。

秀吉の本營に着いたときにはすでに戦も佳境の時であった。  
どちらかといえば秀吉軍がおされてい。

光秀の軍は、光秀の教育の成果であろう。足軽まで精強で、手ご  
わい兵である。

それもここまでだ。

帷幕の中に入つていくと秀吉が驚いたよつてひりを見てきた。

「官兵衛、そちは左翼だつたはずだが？」

官兵衛は質問には答えず。ゆつくりと指を上に指し示した。

「まさか！」

「そのまさかでござります」

秀吉は驚愕し、呆け、泣いた。  
そして最後に笑つたあどいった。

「我らの勝ちは決まつたぞ」

時は少し遡る。

本能寺。

洛中、京都において信長が拠点としている場所である。

ちなみに現在本能寺は一大城塞として生まれ変わりつつある。元々、足利幕府の庇護の下栄えた寺であるが、応仁の乱、天文法華の乱により2度の焼失にあっている。

信長が目をつける前は再建もままならなく半壊の状態であった。しかし信長の拠点となつてから急速に軍事要塞化しつつある。堀や空掘りも作られている。

まだ製作途中であるため、堀はむき出しで、空掘りも浅いところがちらほらと目立つている。

なぜ本能寺なのか。

信長ほどの地位を持つてゐる人物であるのなら、京に自分の拠点となる場所をすでに作つていてもおかしくない。

朝廷との会合、交通の便からしても京に信長専用の屋敷を持つておくことは利となるだろう。

しかし本能寺を使うといつゝ一見不合理ともいえる行動を取つてい る。

本能寺の周辺は市街地となつていない。

閑散としており、兵の集合に適切である場所だった。

さらに浄土宗に対する政治的均衡を配慮してのものでもあった。

しかし、一番重要なことは京という地形に存在する。京ところのは非常に守りにくい地形である。

盆地で四方が山に囲まれている。

一見すると守りやすいように感じじるこの地形であるが、侵攻ルートが複数存在する。

守備側はその全てに兵力を配置しなくてはならない。兵の集中ができないのだ。

これは歴史が証明している。

源平、南北朝これらを信長が知っているのかどうかはわからない、が天性の才で気づいたのだろう。

「春長軒様、急ぎましょ」

小西行長は八郎に信長の脱出を命じられてからすぐには本能寺に行かずに向かいの春長軒の自宅に寄っている。  
春長軒。別名村井貞勝、信長に京都所司代を任せられている男である。

「脱出の手はひとつあるのだろうな」「ぬかりなく」

信長から京に関する全てを任せられた男である。行長から知らせを聞いた後、すぐに信長の元に使者を送り、春長軒自信も迅雷のごとく本能寺へ向かつた。

本能寺の本堂には信長と森蘭丸が待っていた。

「何事だ」

雷のような怒号が響き渡った。

「謀反にござります」

春長軒殿が答える。行長も隣に平伏している。

頭の上から声が響いた。

「城介が別心か！」

城介とは織田信忠のことである。

「惟任日向守殿でござります」

「たわけ！」

行長はビクッと肩を震わせた。

そもそも行長は信長に謁見をする身分にはない。

行長は陪臣であるためだ。

直卒、陪臣、この2つには明確な違いがある。

簡単にいってしまえば、秀吉は直卒、官兵衛は陪臣である。直卒は信長に対し、直々の謁見を許される身分であるが、陪臣は直卒の家臣であることが多い信長と謁見するには数々の手続きを踏まねばならない。

ものすこく簡単であるがこのような感じである。

よつて礼儀として顔を上げるわけにも行かない。

行長は、信長が言った「たわけ！」も自分がここにいることに対しての怒りなのだと思った。

ちなみにこの「たわけ！」はなぜもつと早く云えなかつたという意味である。

信長とこう男をよく理解している春長軒はすぐさま返答した。

「恐れながら、私も至急かけてきました」

「申せ！」

再び頭上から怒声が響いた。

これは行長に向けての言葉である。

なぜ今まで伝えようとしたのか行長に尋ねている。

極端に言葉を惜しむ、長い言葉をしゃべることのできない、必要性を感じていない信長独特の会話である。

もちろん行長は自分が問われていることとは思わない。

信長とともに会話することは長く仕えたものでさえ相当難しい。そもそも行長は信長に対しても発言できるとは思っていない。

陪臣とは面会も直答も信長の許可をいちいち得てからしなくてはならないものだと思つている。

事実、普通の大名の場合行長の考えは間違つていない。宇喜多家ですらそうなのだ。

「小西殿、小西殿」

小声で春長軒が行長に早く答えるよう促す。

それでようやく自分が発言を求められているのだと気づいた。あわてて言葉を発した。

「事が起るまで上様は納得されなかつたでしょ。わが主君、八郎様が申しておりました」

信長のこめかみに血管が浮き出た。

春長軒は頭を抱えた。

横に控えている森蘭丸も表情が変わっている。

「何なのだ

「宇喜多八郎でござります」

「宇喜多の倅であるか、いかよにして謀反を知ったのだ」

森蘭丸が機先を制した。

信長は怒つている。

その矛先は今行長一人に向かっている。

いつ切られてもおかしくない。そもそも信長が今まで行長の首を残していることが不思議なくらいだった。

森蘭丸は行長をかばつた。

「私にはわかりません。八郎様の下地どおり、手はずを整えたのみでござります」

「宇喜多はなぜ」「おる?」「

信長の眉間にじわがいつそつ深く寄せられた。

「現在、明智の手のものの侵攻を防いであります」

沈黙が流れた。

行長は平伏したまま答えていため、信長の顔を見ることができ  
ない。

しかし視線は執拗なまでに感じられた。

生きた心地がしない。ここで首をはねられるのかと思つた。

「そうか、手筈は!」

行長と春長軒は顔を見合わせる。

手筈とは先に謀反のことを知っていたのなら、今後の考えもある  
だろう、それを申してみろといふことだ。

春長軒は面を上げた。

「それについては某に腹案がござります。

されば、上様、御装束をいただければと

「討ち死にする気か

「左様でござります。

逃げ道はここおります行長殿が心得ております。

明智が上様をみすみす見過すとも考えにくひじやります。

私が適任かと

信長はこめかみを押さえながら少し沈黙した後、相変わらず、短

く、甲高く、言つた。

「恩は忘れぬ

「えー！ やばい！ やばいよ！ 僕死んじゃう！」

わかつていたのに。覚悟はしていたのだが、かなり恐い。  
夜の闇の中ひたひたと足音だけが聞こえてくる。

いくつものたいまつがゆらゆらと揺れながらだんだん近づいてくるのは身が凍る思いがする。

こちらも相手も奇襲を狙っているので音は一切聞こえない。  
さつきまで聞こえていた夏特有の虫の音もすでに聞こえなくなっている。

辺りには硝煙独特の火薬臭い臭いと、汗の臭いで充満している。

とりあえず、おざなり程度ではあるが障害物を使いなんちゃってバリケードを作った。

少數で大勢を迎撃つのだ。あるものは精一杯使わせてもらひ。京の西方、本能寺からの見て鴨川の反対側、つまり現在地は未だ応仁の乱の傷跡から回復しきっていない。

廃屋と空き地しかない。民間人がいないのは幸いだらう。

戦いの火蓋は轟音と閃光によつて開かれた。

左右から一斉にフラツシューの如き閃光がはためく。  
もちろん味方のある。

そのあと敵の足軽がバタバタとたおれていく。

もちろん夜の闇の中では確認できるわけが無い。  
が、俺には敵が倒れていると思い込んだ。

よしつ！ 思わずガツツポーズをとる。

ひとまず奇襲は成功した。

「次の弾込めー！ 急げー！」

声を張り上げる。

将の条件としてよく通り、大きい声とこのうのを聞いたことがあるがそれをつづづく感じられる。

練習しておけば良かつた。

岡山城のてっぺんから発声練習をしてくる自分の姿を思い浮かべる。

シユールだな。

「よし！ もう一回！ うへー！」

再度射撃の号令をする。

敵がバタバタと倒れていぐ。

混乱しているのがここからでもわかる。

ワレ奇襲ニ成功セリ。

なんか楽しくなってきた。

気分がうきうきしてきた。

今まで恐くて遮蔽物に隠れていたのだが、俺に敵の弾は当たるものか！

遮蔽物から体を出す。

敵の将が兵をまとめて突進してくるのが見えた。

狙い通り、わざと粗く造つておいたバリケードに向かつて突進してくる。

ふはははは。

笑いながら大きな手振りと身振りをし

「レツシウウウウウ、パアアアツリイイイイイイイイ  
叫んだ。

廃屋に隠しておいた左右の兵から一斉に射撃が行われた。距離がかなり近かつたため、先ほどまでと打つて変わつて多くの兵が倒れていった。

思わず踊りだしたくなつた。

敵兵は総崩れを起こし背後に逃げ出していった。

よしつ！ 今なら何でもできる！ なせばなる！

「おえー！ 一気に片付けろ！ これを逃すなー！」

ハイテンションのまま命令を飛ばす。

「ゼーんぐーん、とーつーげーきーーーー！」

といいかけたところで

ゴツンッ

と後頭部に衝撃がかかつた。

「いっつう……」

頭を抱えてそのまま地面にのた打ち回る。

慌てて背後を振り返ると鬼の形相をした山中鹿之助がいた。

「あれ？ 鹿之助？ 信忠はどうしたの？ 何でここにいるの？」

「なんでもどうしてもありません。直ちに先ほどの命令を撤回してください。兵を無駄死にさせんつもりですか！！！」

「えーーーー！ 今が好機だよ。一気に押すことでしょ

「ダメです！ 直ちに撤退命令を。すでに目的は果たしました。我々も逃げますよ」

不満は残るが、しあわがない。鹿之助の方が戦場において何年も、何十年も先輩という事実を思い出す。

「わかつたよ。全軍撤退するべ。直ちに白装束の上から元着てた服に着替えるんだ」

元着ていた服とは、京に潜入するときに来ていた服のことである。つまり商人や馬借、農民の服のことだ。  
田ぐらまし程度にはなるだろう。

リュックや、ポケット付きの服、迷彩服、リバーシブルの服など

も揃えると今後戦闘が楽になるのかもしない。

特にこのような小規模の部隊戦を今後も行う機会があるのなら考  
えておく必要がありそうだ。

「早かつたね。2部隊に別れたって聞いたけど、そっちにはそん  
なに兵がいかなかつた？」

俺はだいぶ落ち着いてきたので鹿之助に聞いた。

「千名ほどはいましたな。主殿も突撃するなら最初から突撃すれ  
ばよかつたんですよ。

なんせ今回は奇襲なのであるから。流れは最初は拙者ひのむづにき  
ますからね。そこで一気にたたみこめばいいんですね」

それ、できるのお前だから。

撤退は比較的スムーズに行われた。

岡山から京まで小部隊で長距離行軍をなしてきた精銳部隊なのだ  
から兵の練度はかなり高い。

実戦を超えることで精銳部隊が出来上がった。

もちろん全く問題がないわけではない。

上官、小部隊の隊長が京につかず、部下のみ京に集まつた隊もい  
れば、上官の命令をどう見ても聞いてなく勝手に振舞つていい隊も  
いる。

この時代では実現不可能とも言えることをしようとしているのだ。

問題が出るのは当たり前のである。

それでも、満足できる出来だといえる。

八郎と鹿之助、その部下が京郊外の寺に着いたのは明け方ほどのことだった。

「やつとついたー、つかれたー」

ほぼ夜通し歩いたので足はガクガクだ。

軍勢、5百人の兵は全て俺の指揮からはずれ、鹿之助に任せである。

鹿之助は寺の境内に兵に休むよう告げた後、ひからに向かつてきた。

「主、ここですか？」

「うん。行長が手配した寺だ。間違いない」

「そうですか。ここに前右大臣がいらっしゃるのはなんとも奇妙ですね」

行長が手配した寺はぼろい。俺の人質生活時代の寺よりぼろい。所々崩れかかっているし、庭も手入れがされていないため草が生え放題だ。

ちなみに前右大臣というのは役職名である。

地位の高い人を呼ぶ場合は官職名で言つのがこの時代の常識という奴である。

社長さんというのと同じようなものだ。

「まあこんなところに信長が隠れているとは誰も思わないだろくな。その点では正解だらう」

「これからどうなさるつもりで？ 拙者らは孤立無援の情勢です。報告を聞く限り、明智光秀が信長は死んだと信じていれば搜索の手が入ることはないと思いますが、京や近江あたりは明智の手に落ちるのも時間の問題でしょう。

動くのならば早い方がよろしいかと」

「そうだな。一応考へはある。それも含めてこの寺にやつてきたんだから。これから説明するよ

そういうひらじを脱ぐ。

寺は小さいため、庭からすぐ屋内に入つたところが本堂だ。  
そこに信長が待つてゐるはずだ。

兵たちの声が聞こえたのか行長がすぐにやつてきた。

「やつと来てくださいました。いまか、いまかとお待ちしておりました」

行長の顔はやつれている。戦に参加したわけでもないのにつかれきつてゐるのがわかる。

「おおっ 無事だつたみたいだな。やつれたようだけど大丈夫か？」

「それより、境内の方に待たせてあります。早く来てください」  
行長が半分涙目になつてゐる。

「もしかして信長、「機嫌斜め？」

「会えればわかります」

見方を変えれば俺たちは信長を拉致してきたことになる。仕方なかつたとしてもだ。

殺されるかも……

いや、大丈夫だろ。命を助けたわけだから、俺、信長の命の恩人なんだから。

うん。大丈夫なはずだ。たぶん……。

寺は大きくない。境内は広いが寺自体の建物は小さい。  
よつて寺の境内、庭からすぐそこに本堂がある。

本堂への扉を開けるとすぐに信長と信忠が待つていた。  
俺はすぐさま平伏した。

気まずい沈黙があたりを支配した。

え？ なんかしゃべつてよ。

もしかしてじゃなくてお怒りですか？

俺の独断専行に対しても立腹ですか？

……

「わいよー。

とガクガクブルブルしていたら頭の上から声が聞こえた。

「申せ！」

甲高く歯切れのいい大声である。

え？

信長が極端に言葉を短くするところとは前世で知っていたのだが……

「申せ」つて何をどう申せばいいんだよ！

あれか？ 僕の今日の朝食でも申せばいいのか！

残念でした。今日は朝から震えてたんで何も食べてません。

胃が受け付けません。

いやいやいや、さすがに朝食はないだろ。

と脳内で突っ込みを入れているうちもあたりは気まずくなつてい  
く。

軽くトンツトンツトンツと音が聞こえる。

頭の上からだ。

ばれないようにそっと頭を少し上げるとリズムを刻んでいる足  
が見えた。

俺の真正面なので多分信長だ。

やばい！ いらだつて！

何か、何かいわなくては。

俺はふと胸元に目をやる。

ええ～い。ままで。

「前右大臣様に買つていただきたいものがござります。こちらな  
んですが」

俺は懐から紙を取り出した。

「これはただの紙ですが。ここには信用と契約が入っています。

先日、船を異国より購入したことによりわが領内に造船工場を作りました。

まだ作りかけなのですが、完成したときには全長27間（約50メートル）ほどになり両側に大砲を配し、さらに両側に配した大砲は40問程度配置する予定です。それに、なんといっても一番違うのは積載量です。今までの船とは圧倒的に違う積載量を持つはずです。軍事においても貿易においても変革をもたらすはずです。完成すれば遠洋まで航海することが可能です。わが国の海洋貿易は変わりますよ。

ただ、今現在金策に困つておりまして、月賦で買ったもののまだ返済が多く残っております。

さらに作業するための人夫、材料費も全く足りません。

そこで、この紙です。

この紙は私が今回買った船を作っている造船工場の所有権です。この紙に値段をつけることで私どもは資金を得ることができ、船を作れます。

そして船を売れて利益が出たらその何割かをお返しします。」

俺は一気にまくし立てた。

「つまり、私どもに投資していただきたいのです」

俺は言い切ると下げる頭をよりいつそう下げた。

言つてしまつた。最初に言うべきことじやあ絶対にない。挨拶も何もかもすっ飛ばしてしまつた。

しばらくまた沈黙が続いた。

「といふと、その船を作るのが失敗した場合はどうなるのだ？」

これは先ほどの先ほどの信長の声とは別の声である。少し面白そう、といふか笑いをこらえているようだ。

信長でも、鹿之助でも、行長でもない。

といふと残つてゐるのは信忠だけとなる。

「もし私どもが失敗した場合はその紙は本当のただの紙切れにな

つてしまします」

俺は少し安堵した。信忠は俺に助け舟を出してくれた。

「所有權といつたが、所有權とは具体的にどのようなことができるのだ？」

「はつ まず、今現在造船工場の当主はここにいます、小西行長です。

望みであれば、彼を当主から退かせることができます。さりげなく経営に口を出すことができます。」

「その船は、鉄甲船よりも大きいと申すか」

今度は甲高い声が聞こえた。信長だ。乗ってきたてくれたのか？

ちなみに鉄甲船とは信長が本願寺や毛利水軍、村上水軍に対抗して九鬼嘉隆に命じて作らせた船のことである。

鉄砲、火矢を通さないよう、鉄で装甲をほどこしてあるものである。

「鉄甲船を見たことはないやうこませんが、おそれくはまさつてているでしょ？」

俺は答えた。

「いいおるわ」

信長が声を出して笑った。

「よからう、買ってやる

「ありがとうございます」

信長は小さく頷くと

「面を上げる」

と再び声を出した。

俺は言われるままに平伏をといった。

目の前には2人の人物がいた。

正面が信長で、横にいるのが信忠だろう。

思ったほどイケメンでも荒々しい風貌でもない。

切れ長の目、ちぢみ髪、細長い顔つきからは市井にあつたら信長とはわからなかつただろう。

しかし、やはりその雰囲気といつたらいいだろうか、重圧を感じられる。

これが信長か。

俺は嘆息した。

「後は！ 申せ！」

と信長は再び声を出した。

後？ 何のことだ？ 俺は信長と相対して何度目かになる短い言葉を考える作業に戻される。

「今後の策はいかようか？」

信忠がすかさずフォローを入れてくれた。

信忠のほうに目を移す。

顔には信長の風貌を残しているが、幾分厳しいところがないのは今信忠が笑っているからなのだろうか。

信長と違い疲れが顔に浮かんでいる。

本能寺の変の後、まだ一夜明けたばかりなのだからそれも当然である。

俺も鏡を見れば同じように疲れている顔なのだろう。

ということは同じ状況であるのにかかわらず未だに精力的な顔をしている信長は化物か！

いかん、いかん、今後の策だ。説明しなくては。

「今後ですが……」

俺は横にいる行長の方を向く。

「行長、地図を持つていて、出してくれ」

行長は平伏したまま俺のほうに来て、地図を出した。

この地図は先ほどの京市外を記した地図ではない。

俺の偽り記憶を頼りに作成した近畿地方の地図である。そこに俺

の家臣の情報をを集め作成した。

中国地方、近畿地方はなかなかの完成度になつてゐると思う。他はかなり大まかであるが今後、頑張つていくつもりだ。もちろん一朝一石でできるものではない。蟄居生活、人質生活で暇をもてあました故の結果であろう。

「近くによつても？」

「よい！」

「それでは、失礼仕る」

俺の信長に近づいて、地図を広げた。

その地図を見た信長と信忠から

「ほう」

と声が上がる。

「我々は今、このあたりです。」「

俺は地図の一点を指で指す。

「光秀は、早急に京付近を制圧し、さらには美濃、近江にも手を伸ばしていくでしょう。

もし頼るものあげるとしたら、丹後の細川氏、大和の筒井氏などがあげられるでしょう。

両者とも光秀とは縁が深いでしょうが、今回の光秀に加担する可能性は無いと思います」

なぜ光秀が秀吉に敗れたのか。

秀吉の思いがけない迅速な行動、時間的制限などももちろんある。そのうちの一つに諸勢力が光秀軍に参加しなかつたことがある。もちろん光秀が何もしなかつたわけではない。

細川にも筒井にも手紙を出しているし、美濃との講和も取り纏めている。

十分に手抜かりは無い。

しかし、なぜ諸勢力が参加しなかつたのか？

信長を殺したこと、主君殺し、謀反、これらが悪影響を与えていたことも事実だ。

しかしそれ以上に面白いことがある。

光秀は謀略、謀反、これらのことに入一倍、いや、人の数段優れていたということである。

光秀は優れているがゆえに、謀略、謀反が漏れやすく、もういことをわかつていた。

ゆえに徹底的に秘密主義にこだわった。そして諸勢力の逡巡につながるわけである。

「ここで諸勢力を頼るのも決して悪くありません。

たぶん、私の考えより十分以上に良い策です。

しかし私はあえて、ここで後世の歴史に残る事をしていただきたいと存じます。

前右大臣様急死を知り、真つ先に駆けつけてくるのは筑前守様に間違いないでしょう。

ゆえに合戦はこの山崎で起ると考えて間違いないよ存じます。そして我々はそれに合わせて行動したいと存じます。

そうした場合、最適な場所は

俺は京から指を下に移動させ山崎を指す。そして少し左上に上げる。

「うー、天王山で高みの見物と参りましよう」

俺は一気に説明し終え、恐る恐る地図から顔を上げる。

信長は無表情であり、その表情からは何も読み取れない。

信忠のほうは対照的に楽しそうに地図を見ている。

再び沈黙が訪れた。

どれだけ時間がたつただろう。

10秒、いや10分かも知れない。時間の感覚がなくなっている。

「で、あるか」

信長が発した。

「励め」

続けて聞こえる。

これは了承ということでいいのだろうか？

信忠のほうを不安そうに見ると、目が合つた。

信忠は軽く頷いた後、微笑んだ。

どうやら了承らしい。

「ありがとうございます。僭越ながら今回の報酬として、此度信忠様救出のため励んでくれました山中鹿之助、失礼、山中幸盛に尼子氏再興をお許し願いとついでございます。」

でしゃばりすぎかと思つたがこれを機会にいわなくては他に機会は訪れないだろつ。

「欲張りめ！ 許す！」

信長はそれだけいった。

「ははっ ありがとうございます」

「盛り返してるな、一時は危なかつたがこのままだと勝てるか。  
「の、よつですね」

合流した後藤又兵衛が答えた。

「まさか真っ先に官兵衛の部隊に合ふるとは思わなかつたが、これも日頃の行いがいいからかなあ」

「それは、どうかと」

又兵衛は率直にものを言つ男である。いつこいつひま追従べら  
いしてくれてもいいのに。

空には織田の旗印である永楽錢が無数にはためいてゐる。  
無数といつても、そんなに多くは無い。

が、戦場での効果はおおきかつた。

戦場では噂というものが広がるのは普段とは比べ物にならないぐ  
らい早い。

そして士氣、しいては勝敗につながる。

当初、俺たちが姿を現す前は秀吉軍は押されぎみだつた。

秀吉軍の先鋒は高山右近と中川瀬兵衛である。

対する光秀軍は斎藤内蔵助利三となつてゐる。

斎藤内蔵助利三の指揮統率能力は高山右近、中川瀬兵衛を大いに  
勝つっていた。

高山右近も善戦したがそれでも先鋒はほぼ壊滅状態までになつて  
いた。

光秀は防戦であるが、敵の侵入路を押さえている。

向かつてくる軍勢を迎え撃てばよい、むろに予備隊も出しやすか  
つた。

それに対しても秀吉軍は予備隊が出しつくい。

出そつとしても、入り口、侵入路で渋滞をおこしてしまつからだ。

よく言われることであるが、遊軍を作らないことは軍事において  
初步である。

そしてもう一つ言われることは、予備隊によつて勝利が決まる。

遊軍とは何もしていない兵、もしくは戦略上無駄と化している兵である。

予備隊とは不利になつた部隊に兵を補つため手元においておくための兵である。

遊軍を極力少なくし（なくすることは限りなく）に近い）、予備隊をできるだけ多く手元に残す。

この点において言えば秀吉軍より光秀軍のほうがより基本に忠実だつた。

さうして兵の強さは圧倒的に光秀に分があった。

足軽鉄砲というものは通常の足軽より勇敢なものが多い。

足軽大将の号令に従い鉄砲を放つことが足軽鉄砲の大部分を占める役割なのだが、それとは別に単独で戦場を駆け抜け士卒（戦場において命令を出す人）を暗殺するものもいる。

もちろんこの場合、誰が討ち取つたかわからないため褒章に預かる機会は無い。

よつて好んでするものは多くないのだが、光秀軍にはこのようなものが多くいた。

光秀の兵の教育は一人一人に行き届いていたということだ。

それに対して秀吉軍は田先の恩賞に預かるのが目的の兵が多い。それも大部分は、秀吉独自の軍ではなく、信長から秀吉に預けられた軍である。

これらのことから秀吉軍は苦戦に追い込まれることとなつた。

戦況が一変したのは一つの噂からであつた。

まずは秀吉軍に伝わつていつた。

「信長が生きている。我らには御大将がついている」

先にも述べたように戦場では噂が伝わるのは早い。急速に光秀軍にも伝わっていった。

これを受け秀吉軍の士気は大いに盛り上がった。光秀軍は大いにもちこたえた。

が、その光秀軍にさらに絶望が襲つた。

空に、天王山に高々と掲げられた永楽鏡の旗印である。高々と上ったこの旗が両軍の士気に与えた影響は大きかった。

「前右大臣」帰還。勝利は我らに」

のような口上が兵の隅々から聞かれるよになつた。

大将というものは、特にこの時代は最初ある程度の采配をしたあと、つまり戦が始まってしまった後はやることが無くなる。

秀吉も例外ではない。

やれるだけのことはやつた秀吉は今、官兵衛の横でポカーンとしていた。

「のう、かんべえ」

秀吉が唐突に口を開いた。

「はい」

「夢を見させてもらつたわ」

「ゆめ、ですか」

「そう、夢だ。壮大な」

官兵衛はなんと答えたらしいのかわからない。

秀吉は深々とため息をついた後、言った。

「まあ、こんなもんかもしれんわな」

「こんなのですか」

「そうじや、百姓の身分から」「今まで来れた」とじたいでめつけ  
もんだわい

これからも下手な考えはするもんじやないわな。猿じや。わしへ

猿じや

負け戦とはひどいものだ。

見渡せるほどどの兵数になつてしまつた自軍を見て嘆息をつかずに  
はいられない。

「坂本城までだ。そこまで我慢いたせ。じき殿も見えられる」  
山崎の合戦で後詰を担つていた秀満は退却を余儀なくされている。  
坂本城まで落ち延びたとしてもそれからの計画は一切あてが無い。  
兵もわかっているのであるが、日一日と兵は少なくなつていく。  
残つているのは傷をおつた兵が多い。負け戦の定めといったところか。

それでも殿、光秀様さえ生きておられるならまだ再起の道はある。  
なかば絶望のふちではあるが最後の希望としてすがりつかずには  
いられない。

殿が落ちのびられる場所を確保しておかなくては。

情報は一切入つてこず、光秀様が生きているのか、すでに自刃さ  
れているのかも定かではないが家臣の務めとしてやらなくてはなら  
ないことである。

坂本城に秀満が到着したのは約一日がたつたころだった。

「申し上げます。勝竜寺におちのびられた上様はここ坂本城を日指す途中に自刃なされました」

「間違いないか」

「はつ、共にいたものが報告をよこしましたゆえ、間違いないものと思われます」

「そうか、あいわかつた」

すで坂本城も囲まれている。

殿が着ても城に入ることは難しかつただろう。  
残つたのはわしだけか  
わしが後始末をつけねばなるまい。

秀満は陰鬱な気持ちを隠すことはできなかつた。

秀満は坂本城の奥の間に行き、ひろ子と会つたときも表情はすぐれなかつた。

すでに羽柴と織田の兵が城を幾重にも囲んでいる。

秀満は事の次第を光秀の妻であるひろ子に説明した。

「わかりました、覚悟はできております」

ちなみにこの時代、戦国時代の後半になると夫がおつた責任の一端を妻子が取ることが一般的になつてくる。

それでは前半はどうであつたのか、戦国時代の前半、織田が大頭していくる前までは妻子にまで罪が及ぶことは少なかつた。

戦国時代の前半では攻める方も守るほうも親戚の立場なことが多く暗黙の了解のうちに妻子の命は助けられることとなつていた。

奥州等は織田が出てきてからもこの風習が残つている。

しかし、織田が大頭していくる中で諸勢力は全くのつながりの無い敵と相見えることとなる。

そこに情は存在しなくなり、負けた場合は妻子ともどもこの形となつてくる。

覚悟していたのであらう。

泣きつかれることが無いのだけが秀満の救いだつた。

毅然とした態度のひろ子と相対したときそれだけが救いだつた。

このような場合婦人から始まる。

明智光秀の妻、ひろ子、さらには自身の妻も含まれる。  
装束は白羽一重の小袖である。

「秀満殿になら」

というひろ子のたつての願いで秀満自身が見届け人を勤めることとなつた。

「みなさま、後よりおこしなされよ」

そういつたあと光秀の妻、ひろ子は自身の子どもを一突きした。後、  
作法どおり乳房の下を突いてさらに刃を戻し喉を一突きした。

はかなさを誰か惜しまむ朝顔の　さかりを見せし花も一時

秀満の妻、ひろ子の辞世の句である。

ついで、秀光の子、妻という順である。

秀満は妻子が果てたのを見届けると天主に火を放つた。  
死体がさらし者とならないようにである。

財宝は全て包囲軍に渡した。  
わしのできることは既に終わつた。

「わしも後世に名を残すことができる。明智家の最後としてな」秀満は甲高い笑い声を出しながら自身を鮮血に染め上げた。

もともと生誕、出自でさえ定かでなかつた明智秀満の最後であつた。

秀満の墓はない。

なぞに包まれた人物であつたが能力、生まれから最期まで、謎に包まれた人物であつたことは疑いない。

これにより、明智氏は僧籍にいた者などを除いてほとんど滅んだ。

山崎の戦い 23話（後書き）

大名の配置の地図とか組織の配置などの図を載せたいと思っているのですがいい方法知りませんか？

え？ そんなことより続きを書けって？

妄想とはこうこう無駄かもしないことから湧き上がってくるものです。

イラストがほしいよー。

「いつたい、どういうことだ。わずか数ヶ月、数ヶ月だけだぞ。  
なにも1年や2年留守にしていたわけではない。

どうして我らが毛利と対していいた数ヶ月でここまで国内が変わつ  
てしまつたのだ。

国の蔵は空になるは。我らに恩賞を渡さぬは。

これでは私が父の後を継いだ後、どうやってこの国をまとめれば  
いいのだ。

明石全登！―― どうしてこつなつているのだ！！！」

上座から立ち上がつた宇喜多詮家は壁を殴り散らしている。

毛利との死闘を終えた後、詮家を迎えたのは八郎の初陣、大勝利  
の報であった。

それだけならまだしもその後、加増となつた領地を八郎は独占し  
た。

詮家としては面白くない。

「これもひとえにあの男、八郎様でしょう」

下座に控えている唯一の男、明石全登が平伏したままの姿で答えた。

詮家と明石全登はこのところ急速に接近していた。

きっかけは八郎の当主就任のときである。

同じ不満を持つた一人が意気投合するには長い時間はかかるなか  
つた。

「そうだ！ あの男！ 八郎！ あいつのせいだ。なぜあの男が  
まだ当主なのだ。諸将はなぜまだ従つている」

宇喜多家は戦国大名といつても国人の代表に過ぎないとこうがあ  
る。

各地の豪族の力が強いのだ。

一世代で成り上がつたものの宿命といつてよいだろ。」

大名というよりも豪族の代表といった方がしつくり来るかもしない。

「このようなところは織田家よりも毛利家に近い。」

「恐れながら申し上げます。本能寺の変の功により八郎様は多大な功績を挙げられました。」

内政での失敗を外交で取り戻したのでしょうか？」

「あいつに様などつけるな！ いまいましい！ ここには私とお前しかいない！」

詮家はドスンッと元の場所に座りなおした。

「クソッ！ 八郎にここまでやる権利など無いわ。いつたい何様のつもりなのだ。」

当主といつても我々の支持があつての宇喜多家当主だ。そこのところがわかつていないので」

詮家は膝を扇子で叩く。

「ですからそこを突きましょ。我々の他にも不満を持っているものは大勢いましょう。」

八郎の当主就任の時の花房のように恨みを持つているものもあります」

「ほう、花房が。悪くないな。明石全登、とりあえず当たりをつけておけ」

詮家は顎に当てていた扇子を大きく振り、バツと広げた。

虎と桜が彩られている。

趣味が良くない。と明石全登と思つがそのようなことはおぐびにも出さない。

「はつ、他にも少なくない数の者が不満を持つていると思われます。」

八郎は此度賜つた備中、備後を独占し、毛利あげた戦功が全く無視されております。

それにおきましても多くの不満を抱いているものがありましょう

「そうか、わかつた。そこに全てまかす」

「一命に変えましても」

「存じていろと思うが決して洩らすよつた失態は犯すなよ」

「わかつております」

それでは失礼します。と明石全登は退出しよつとする。

障子を開けたところで思い出したように付け加える。

「そういえば、成功した場合私の処遇は考慮していただけるのでしょうか？」

ハーハツハツハツハツハ。

それを聞いた詮家は大声を出して笑った。

「安心せい。わしが当主となつたら思いのままだ。

お主が成功したら片腕として十分に働いてもらひ。もちろん地位

も金も名誉も与えてやる」

「それを聞いて安心しました」

明石全登はニイッと口だけ笑つとそのまま障子を閉じた。

## 浜松城

今川氏真から徳川家康が1568年に奪い取つた城である。  
いまがわうじさね

1570年に岡崎城から浜松城まで移つてきた。今年で在位12年となる。

南北500メートル、東西450メートルの大きさである。天守閣は無い。

本丸、一の丸、三の丸が一直線となつており戦時には防御陣営として個々が独立して侵攻を妨げるようになつてゐる。

これらの本丸、二の丸、三の丸は順に高くなるよう階段状に作られており、いかにも戦国時代という時代に合わせた城である。もつとも田に付くのはその石垣だろう。

安土などの洗練された石垣とは違い、見るからに荒々しく、自然石を上下に組み合わせたものである。

人工の手が入っていないなく、隙間も多く見えるが、奥が深く堅固な作りである。

その城主は本丸でつめを噛んでいた。

「いっそ、今なら」

家康が狂気に満ちた田で本田正信を見つめた。

「殿、短気めされるな」

それだけ言つと謀臣は壁に書かれた肖像画を指差した。  
んぐつ むぐぐつ

家康は音にならないうめき声を発した。

「そうだな。まだ我らにも利用価値はある。今は我慢か」

伊賀忍軍による諜報網のおかげで信長の動きは逐次入ってくる。もちろんその他も。

「良くぞ思いとどまりました。好機は必ずきます。今しばらく辛抱なさいませ」

本能寺の変の時徳川家康は堺にいた。

日本で最も肥沃な農業地帯である駿河、遠江、三河の三州を束ねる徳川家康が堺にいるのは、信長によつて進められたからである。実際、家康は進んで堺にこよつとは思わなかつた。

同盟国ではあるが他領である。何が起こるかわからない。暗殺など珍しいことではない。家康も覚悟をしての訪問だつた。

武田討伐の後、祝賀言上のため安土城に訪れたとき、

「京、堺、おおさか、などのんびり見物されるがよい」

と有無を言わせぬ口調で告げられた。家康はそれに従うしかなか

つた。

堺で茶屋四郎次郎の屋敷にいる時もいつ襲われるのか、嵌められるのかと生きた心地がしなかつた。

そのような時に本能寺の報が伝えられた。

家康は狼狽し、

「わざかな手勢であろうが、何ほどのことがあるが、

恩多き信長殿が亡くなつたのだ。この敵を討たずして何が同盟国だ。

討ち死に覚悟の敵討ちだ

と周りに恫喝が如き声を張り上げた。

一緒に堺に入っていた本田忠勝ほんだただかつと茶屋四郎次郎ぢややしげらうじろうがこれを止めるまで本当に本能寺に討ち入り、腹を切る勢いだった。

もちろん演技である。

家臣たちの必死の説得により、いつたん三河に帰るとこついこなつた。

そこからの家康の行動は鮮やかなものだった。いや、鮮やか過ぎるものだった。

伊賀の忍びたちに守られながら、伊賀峠を超えた。

その間、野武士に襲われたりしながらもやつとのことで伊勢の海に出ることができた。

このとき別のルートを探つた家康の部下である穴山梅雪は実際に野武士に襲われ命を落としている。

そこから尾張まで海を渡り、本拠である浜松城まで駆け抜けた。

家康最大の危機であった。

本拠に帰つた家康はすぐさま兵をまとめ熱田神宮まで出兵した。

「兵たちの様子はどうだ?」

熱田神宮まで来た家康は部下である酒井忠次に尋ねた。

「現在、一萬程度集まつております。明日にはもう2千程度集まるでしょ?」

家康の今川義元時代からの付き合いで、現在東三河の旗頭、諸将の代表を任せている酒井忠次が答えた。

「そうか、それで?」

「……それだけです。すぐにでも京に出撃できます」

現在では一大勢力を築いている家康もその部下は元来田舎武者である。

微妙な問題には対応できない。

本田正信を連れてくるべきであった、と家康は後悔した。

「各地の様子はどうだ?」

「甲斐、信濃は荒れておりますが」

「荒れどるか、それはいかんな」

「いかん……ですか?」

「そうだ。足元が危ういのはいかん。足場はしつかり固めねばい  
かん。いつ背後を取られるかわからん。

背後を固め、後に上洛すべきかもしれん」

「御意。ではこのまま甲斐に向かわせましょ?」

このときの決断が今、浜松城で家康を悩ませることとなつてゐる。  
決断は間違つていない。あの状況であれば最善の一手であつた。

事実、家康は現在、三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の南半分を手に入れ、一大大名として、いや、日本の大名として最大勢力を築きあげた。

が、前提が間違っていた。

織田信長が生きていた。これだけで今の家康の状況は非常に危ういものとなってしまった。

今回、どやくさにまぎれてぶんざつた甲斐と信濃は武田の残党がまだまだ蔓延つていたとはいえ、事実上は織田家の領地であった。織田家の領地を横から掠め取つた形になってしまった。

さらに悪いことに、本能寺の影響で北条に攻められた滝川一益を徹底的に見捨てた。

これらのことにより家康は非常にまずい立場となつた。  
何よりもまずいのは織田家はこれらのことにも言つてこないのである。

事実上の黙認という形になつてゐる。  
もちろん黙認してくれたと安穩とすることはできない。  
いつこれらを言いがかりにされるかわからない。

「しばらくは大丈夫か」

家康は自分の部下の唯一の謀臣といつてよい本田正信ほんだまさのぶに確認する。「まだ態勢がたてなおつておりません。本能寺の変で織田家の文官の大半は首が飛びました。

各地では飛び火した火種がまだ燃つております。東にはまだ北条もござります。その時には殿のお力を必要とされるでしょう。

その間に

「対抗できるだけの力をつけねばなるまい  
家康は正信の言葉を引きついだ。

正信が言つていることは、織田家が文官を補充し、本能寺の変で生じた各地の反乱を納め、北条を征伐した後は織田家の矛先は家康に向かうということを明示している。

「何か良い案はあるか？」

最近では旧来の部下よりも頼りになりつつある男に尋ねた。

「これからはこうこう男」、自分には必要になつてへる。

「まずはお味方を増やされることでしょう」

「越後の上杉あたりか、早まつたときのため北条にも保険をかけておくか」

織田家と渡り合える態勢が早期に整つた場合、北条と連携を組み挾撃するのも悪くない。

家康はそこまで考えた。

「はい。北条が取られたときのためさらに北にも手を伸ばしておぐべきでしょう」

正信が補足する。

「奥州か。最上、宇都宮、伊達、佐竹、蘆名あしながあるか

「田舎大名といえども役に立つことはござこましょう。さらに申せば、此度の本能寺の変、信長様の家臣も一枚岩ではないといふことでしょう。

織田家の家臣にも慎重に渡りをつける価値はあるかと

「ほう」

「明智光秀といつ出世頭でさえ謀反を起こしました。

巷では存外に織田政権の内部は弱いのではないかといふ風評も立つております。

本能寺の火種は未だ燻り続けておるといふことでしょうな

「ふむ。消し忘れたボヤを大火事にまでできるか？」

「そう難しいことではないでしょう。横から燃料を投下すればよいだけです」

「わかつた。正信、お主は切り崩しにかかるてくれ。わしの方からも手を打つてみる」

「わかりました。ではこれにて」

正信が部屋を退出したのを見届けると家康はすぐに小姓を呼び、硯と筆を持ってさせた。

後に二百通にも及ぶ手紙の最初の一通を書き始めるためだつた。

鴉たち 24話（後書き）

しばらく更新できずすみませんでした。  
リアルの用事は一区切りつきました。  
まだまだやることは山済みですが、更新の方はもう少し早くなると  
思います。したいです。

25話 2年後

西暦 1584年 天正 12年 皇紀2244年

本能寺の変から2年が過ぎた。

本能寺での俺の奮闘も今では夢のように感じられる。もう一度やれといわれても絶対にできないだろうな。ううう。思い出したくな。

夢は夢とこつてもどうやら悪夢になってしまったみたいだ。そもそも戦争が悪夢以外になることなんてないだろう。

だが、その俺の悪夢でさえ恐れぬ働きのおかげで歴史は大きく変わった。

信長は現在でも生きている。もちろん信忠も。当初の目的である、家康による島流しの可能性は限りなく薄くなつたと考えて差しつかえないだろう。

家康が政権を握つてない、ただの大名なのに俺を島流しなどできるはずがない。

後は信長、信忠の腰巾着にでもなれば早々ひどこにこなならないはずだ。

信長は家臣にきびしい人物であるが、本能寺で見せた俺の熱い忠誠心が伝わっている。そうひどい失敗さえしなければおかしなことにはならないだろう。

うん。俺の人生は順風満帆だ。うん。そのはずだ。

「ハ郎様。浮田忠長、お呼びに『つらました』。入ってもよろしいで  
しょうか」

障子の奥から声が聞こえてきた。

浮田忠長……？？？

そんな人いたっけ？

家臣の名前と顔もこの2年だいぶわかるようになつてきたんだが、

思い出せない。

記憶に検索をかけるが一向に引っかからない。

ということは、俺を狙った曲者か！！！

家康か！！！ 家康の差し金か！！！

わざわざ本拠である岡山城まで忍び込んできたことは認めてやる。  
が、生きてここから帰れることができると思つたなよ。  
一度言つて見たかつたんだよな」の台詞。

俺は気合を入れて腹から精一杯の声を出した。

「者ども～ であえ～！ 曲者じじゃ～ 曲者があるぞ～！」

「えええええええつ 曲者！～！ どこだつ！ ハ郎、大丈夫  
か？」

素つ頓狂な声が上がると、障子が開き外から桃寿丸が入ってきた。

「なんだつ 桃寿丸か」

「そういえば桃寿丸元服して名前を変えたんだっけと今更ながら思  
い出す。

桃寿丸もすでに16歳か、それは元服ぐらいするわな。  
宇喜多忠家の忠の字と丹羽長秀の長を貰つて忠長にするとかいつてたなあ。

ずいぶんたいそうな名前であるが、ネーミングセンスは悪くない。忠の字は織田信忠にかかっているのも申し分ない。姓は宇喜多の姓を継ぐのは気がひけるといって傍流である浮田の姓にした。

俺は別に宇喜多の姓で構わないといったが気がひけるらしい。

ちなみに桃寿丸の元服のついでに俺の元服も行われた。  
もう14歳なのだから早いといふことも無いだろ？

無難に宇喜多秀家とすることにした。

本当の史実では八郎からいきなり秀家になったのかわからない。  
家康とか信玄とか何回も名前が変わっているから俺も間に何かはさんでいるのかもしね。

でもまあそんなことは些細なことである。

歴史は既に大きく変わっているのだ。

俺の名前など砂粒ほどの価値しかないだろう。

俺が考へている間も桃寿丸はひたすら慌てていた。

「八郎！ 大丈夫か？ 曲者はどこだ！？」

桃寿丸は血相を変えていた。

俺は目の前にいる桃寿丸を指差す。

桃寿丸はキヨトンとしたらあと後ろを振り返り誰もいないことを確認し、全てを理解した。

「八郎様、いえ秀家様、お戯れはよしてください。すでに元服しておられるのですからこいつた子供じみたことはそろそろ卒業し

ていただけませんと」

「お前も忠家みたいなこといつよつになつたな。桃寿丸のくせに、  
なまいきだぞお～」

「おつしゃつている意味が理解できませんが、私の名は忠家様か  
ら一字貰いましたゆえ似てくるのも致し方ないかと」

「まつたく、元服してから急に大人びちやつて」

「秀家様が子供なだけです。本能寺の活躍を聞いたときは心踊り、  
秀家様についていかなかつた自分を責め、秀家様を尊敬したのに戻  
つてきてからずつとこの調子ですから私のあのときの気持ちを返し  
てください」

他愛ない話をしているとドタッドタッドタッと音がしてすでに老

齢に達した禿頭の男が入ってきた。

「八郎様、ご無事ですか？」

「おおつー忠家、そんなに急いでどうした？ 何かあったのか  
？」

俺は心のそこから不思議がつてているように言つた。

「こちらから曲者といつ声が上がつたのですが……」

俺は両手を広げて肩をすくめて見せた。うんつ すばらしことほ  
け方だ。

忠家は周りを見回し、再度俺が無事なことを確認した。  
そして俺のほうを睨むと、ため息をついた。

ばれてしまつたらしい。

「どうやら私の勘違いだつたみたいですね」

「どうした？ もう年か？」

「はい。誰か様のおかげで内政問題が山積みしておりますので、  
最近ではともに寝ることもかないません。いつもしくては年をと  
りたくてもとれませんなあ」

うわつ 最近では忠家のお叱りも愚痴っぽく、いやいやいや間接的になつてきた。

これが結構効く。

「まあ、何も無いのならそれで結構です。ああ、忙しい、忙しい。次に無駄な用ができるのなら私も隠居を考えたくなりりますなあ」

「うう。戸川秀安が引退してからとことあるいとこに引退、引退と繰り返される。

うんざりだがここで筆頭家老だけでなく忠家も引退されてしまつてはたいへん困る。

こう言われるたびに俺は何も言えなくなつてしまつ。卑怯だ。

忠家は俺が何も言えなくなつてているのを見ると満足そうにその場を退出しようとした。

その時、パタパタパタと足音が聞こえ、もう一人の来訪者が障子を開けた。

「秀家様、大丈夫ですか！！！ こちらから叫び声が聞こえてきたのですが」

お香が血相を変えて飛び込んできた。

「うん。この通り大丈夫だよ」

お香は俺が無事でいるのを確認すると、ヘタヘタと腰を落とした。

「そうですか。よかったです。本当に良かったです」

そういう少し涙が溜まつていての田をこちらに向けた。

洗い物でもしていたのである。着物に前掛けをしている。手も濡れたままだ。

俺は罪悪感を「まかすために

「桃寿丸が勘違いしたんだ。全く、忠家を不審者と勘違いするなんて桃寿丸もそそつかしいよな。まあ不審者と間違われる忠家も忠家だけだ」

と嘘をついた。

桃寿丸と忠家が非難の目を向ける。

俺は心中で「すまん」と謝つておいた。

「桃寿丸様も元服なさったのに変わっていないんですね。とても一城の主には見られないですね」

お香は安心したのだろう。ことさらおかしそうにうつじってクスクス笑った。

「また台所にいたの？ そんなこと台所係に任せたおけばやつてくれるのに……」

「いえ、慣れますから。私、農民の出なんで得意なんですよ。いつもみえて。それに何かしていないと落ち着かなくつて。もしかして迷惑でした？」

「いや、迷惑つてことは無いけど……」

「そうですか。今晚は私が腕によりをかけて作りますから。期待してください」

「それは楽しみだな。期待しているよ」

「はい。期待していくください。それでは私は仕込があるので行きますね」

とお香は満面の笑みを向けた後、その場から離れていった。

後に残つたのは氣まずい空間だった。

俺を二人はものすゞく批判する目で見ている。

「すまん」

俺は重い空気に耐えることができなく、謝った。

「いえ、私はいいんですよ。なんせ不審者と間違われるぐらいの者ですから。いえ、全くお気になさらず。本当にいらぬ気遣いは無用です。さて、私も退出しますね。何も無かつたようですし、不審者に間違われないように身なりを整えてこないといけませんので」忠家ははき捨てるように呟いた後、お香の後を追いかけるように出て行った。

桃寿丸と俺だけが残されることとなつた。

「桃寿丸、すまん」

少しの沈黙の後、

「まあ、いいけどね。秀家様にめちゃくちゃ言われるのは今に始  
まつたことじやないし」

といわれた。

「うう……」

ぐうの音も出ない。

「しかし、八郎も……失礼、秀家様も」

「2人つきりだから八郎が秀家でいいよ。そんな固つ苦しいこと  
無し無し」

「そうですか。それじゃあ遠慮なく。八郎もベタ惚れだね」

「ん？ あー、お香のこと？」

俺は少し恥ずかしくなつて頬をぽりぽりとかいた。

「見ててわかる？」

「まさかわからぬと思つていたんですか？」

「えーっと、一応。「ごまかせているのかな……と」

「見ててわからない人はいませんよ。2人を見れば一発です。よ  
かつたですね。城下町からこちらに転居することをア承してもうえ  
て」

「まあね。五右衛門の報告を聞いたときは震え上がつたけどね」

「八郎が無防備すぎたからだろ。少しあ自分の立場を考えろよ。」

「俺も一応一国の当主なんだな。今更ながら実感がわいてきたよ。

俺はそういった。

これに関しては反省している。

俺は本能寺の変から帰つてきた後、頻繁にお香の元に、以前にまして訪れるようになつた。

たぶん、浮かれていたのだろう。

対外的成功をおさめ、織田家の金銭的支援でガレオン船の建造にも目処がつき始めたからだ。

俺が何気ない氣分で頻繁にお香の元に通つたことによりお香の立場は非常にまずいものとなつた。

俺が頻繁に通うことで近所からのやっかみ、ひがみが起つていった。

もちろんお香はそんなことおぐびにも出せなかつたため氣づくのが遅れた。

というか、俺は全く気づけなかつた。

俺に知らせてきたのは石川五右衛門である。

体制こそ整つていないものの石川五右衛門は宇喜多家の情報を全て扱う存在となりつつあつた。

本能寺の変での情報がかなり信頼できるものであつたこと、本能寺から天王山までの各地の動向などを意外に堅実に調べていたので少し重く用いることにしたからだ。

俺から権限を委任された五右衛門は良く働いてくれていた。さすがは後世に名の残る人物といったところだろう。

石川五右衛門はお香の周りで不審な動きがあると言つてきた。宇喜多家の当主の寵愛を受けているものが城下にいるということがかなり広まつていて。

このまま放置するならばお香の身に危険が及ぶこともある。といふことを報告してきた。

お香がどうかすれば、俺は救おうと精一杯頑張るであろう。

お香のためならある程度の無茶な要求なら受け入れてしまつだろ

う。

どのような不逞のやからにお香が狙われるかわからない。その危険性を俺は全く考えていなかつたのだ。

お香は俺のアキレス腱なのだ。そのようなことにつなつてもおかしくない。

それで少し様子見と不穏な動きをしている者の特定を五右衛門に頼んだところ、お香がいじめのような状況に立たされていることが新事実として発見された。

俺は五右衛門からその情報を聞くとすぐに行動を起こした。

お香に對して何らかのいじめをしていた人物を特定させ、その者を国外追放にした。

もちろんお香にはれないよう秘密裏に処理された。

それでも不安だつた俺はお香を城の中で住むように説得した。

前からそうしたいといつ話は俺からしていたのだが、お香がかたくなに拒むのを強く出れずについた。

しかし、いじめや不審者に狙われているといつ状況ではいつもつてはいられない。

無理にでも安全な場所に避難させなくてはとこゝりで、お香を半ば無理やりといつ形で城で匿つことになつた。

もちろん最初はかなり抵抗された。

「そんな、恐れ多いことです」

「私には無理です」

とか、何とかいつていたが俺が無理にでも半ば連行のといつな形で城につれてくることになつた。

城に来た当初、お香はかなり戸惑つてゐる風だったが、さつきの様子のといつに最近では自分で台所を仕切るよつにもなつてきている。いいことなのではあるが、俺は正室として迎えるつもりだつたため、そのようなこと他のものにやらせて置けばいいのにも思つてしまつ。

「それはいいとしてだ。八郎、僕が呼ばれた理由を話してもいいたいわけだが」

「ああ、そうだったな。すまん、すまん」

俺は飛んでいた思考を元の桃寿丸のほうに向ける。

「ずっと聞こづ、聞こづ。と思っていたのだがな。なかなか聞けなかつたのだが、お前秀吉に何かしたか？」

「僕が？ 秀吉様に？ いや、特に何もしてないよ」

「そうか？ ならいいんだが……どうも俺に対する扱いが正史と違う気がしてならないんだよなあ」

「正史？ なんだそれは？」

「ああ、いや……せいし、政治、そう、政治的に俺に対する扱いが違うと思つてな」

我ながら苦しいなと思わず苦笑いしてしまつ。

それでも桃寿丸は納得した。

「それは宇喜多家に対する扱いが軽いということか

「いや、そういうことではないんだよな」

秀吉の宇喜多家に対する扱いは軽いといづよりむしろ重いといつていいだろ。

丁重すぎるほど丁重に扱つてもらつていい。

むしろ秀吉が自分より下の位なのではないかと錯覚を起こすほどである。

しかしセシがおかしい。

史実では秀吉の庇護の下で宇喜多家が繁栄したのだから身内のような扱いをしてもらはずである。

秀吉がたまにこちらを見る視線も痛い。

俺が秀吉の秀の字を貰つときも喜んでくれていたのだがどこかそつけない印象を受けた。

もちろん、元服のときもある。

まあ、これはある程度予想していた。

本能寺での俺の活躍が原因だろ。

が、一応「私は秀吉様の味方ですよ」と主張しておいたはずだから大丈夫だと思つたんだが……

「お前、中国大返しのときに秀吉に何かした?」

「え? 僕? 何もしてないと思うよ。でも、秀吉様って良い人だよね。手紙を見せたら僕の手柄にしていいって言つてくれたんだよ」

「見せたの……あの手紙……」

俺は口をあんぐりと開けた。

「見せてくれって頼まれたからね」

桃寿丸は平然と言つ。

「見せたんだ……見せちゃったのかよ」

「え? いけなかつた?」

あれは俺が秀吉に嫌われたときのためにつておいた策だったのに見せちゃつたのかよ。

まず一手として、秀吉の中国大返しをスムーズに行わせるために兵たちの食料と休養を確保する。

そして、負け戦を負け戦とならないように士気を高めるために盛り上げさせる。

毛利家との戦争という限定的な条件でのみ考えればあれはまじつことなく負け戦なのだ。

負け戦では兵の脱走など心配すべき点が多くある。

その後の明智光秀との戦が待つてゐる秀吉としてはそれは許されないことだった。

少しでも助けるために、勝ち戦と錯覚させるように仕組んだ。

これをしてることで秀吉の宇喜多家への心象が悪くならないようこううと思つた。

織田家が滅んでも秀吉様についていくといつアピールをしたつも

りだった。

一手ではそれを桃寿丸に頼んだ点である。

俺は本能寺で事を起こすため、秀吉の心象が悪くなる可能性がある。

桃寿丸がすることにより、そして、本能寺の変が終わつた後で俺が桃寿丸を重く用いることによって、桃寿丸を秀吉が抱え込むように仕向けたつもりだつた。

桃寿丸を秀吉が抱え込むことで宇喜多家は御しやすいと思つてくれればという展望を抱いていたのだが……

「見せちゃったのかよ……」

俺は頭を抱えた。

いや、ここで桃寿丸をせめるのは間違いか。  
せつかく自信をつけ始めたところなのだ。

まだまだポカはするが……

「でも、八郎の手柄を俺のものに横取りするようで嫌だつたんだ  
よね」

「まあいいよ。原因がわかつたのなら対処の方法は何とかなるで  
しょ。お前は何にも気にするな。後は俺の問題だからな」

「すまん……」

やばい、落ち込ませてしまつたか。

「いいつて、いいつて。そんな重要なことじやあないから。俺が  
個人的に気になつただけだから」

「そうか、それならいいか」

桃寿丸は能天気に答えた。

いいぜ。お前のそういう物事を深く考へないと好きだぜ。

「ああ、気にするな」

「用事はそれだけ？ なら俺も忙しいから城に帰るよ

「おお、頑張ってな」

そういうと桃寿丸は退出した。

桃寿丸も忙しそうで何よりだ。

俺はここにのとこねずっと暇だからなあ。

俺にとつては願つたりかなつたりだが、周りが忙しそうにしているといじぢぢが悪い。

暇をつぶす道具、テレビもパソコンも無ければよけいにである。お香が相手してくれればなあ……

今回、桃寿丸を呼び出したのも秀吉のことが気になつたのもあるが、誰かにかまつて欲しいところが多分にあつた。

恥ずかしいのでそんなことおぐびにも出したくないが。

秀吉の件は覚悟しておかないとけないかもしれない。何かしらの障害になるかもしれないだる。

「暇だ。暇すぎる」

俺は読みかけのたいして面白くない本を閉じるとねっこりがつたまま無駄に叫んだ。

もちろん誰の返事も返つてこない。

あたりはシーンと静まり返つている。

別の本を取り上げてパラパラとめぐつてみるととても読む気にはなれない。

俺がここまで暇をもてあましているには理由がある。

織田信長が国内の「タタタタにかかりつきりでいるおかげで俺に何の命令も無いのである。

すでに俺は織田家の外様の家臣なのでどこかで大きな戦争が起つた場合駆けつけなくてはならないのだが、現在織田領内で起つてている戦しかため外様で新参の俺がしゃしゃり出るわけにはいかない。

本能寺の変の後、織田家はその火消しに戸惑っていた。

各地で消極的な反乱が起こつた。

消極的というのは俺の見解だ。本能寺の変の時、勝手な行動を取つたり、明智光秀方に付くそぶりを見せたものが山崎の戦の後でも徹底抗戦した。

そうとう信長が恐かつたのだろう。

戦いたいのではない。ただ降伏した場合、信長は確実に許さないだろう。

今までの信長の例を見れば切腹は確実だ。

紀伊、美濃、山城などが代表的なものだった。

戦うものは徹底的に戦つた。

死兵になると兵は強くなる。それを体現するかのよつた戦いぶりだつたらしい。

もう一つ信長が動けない理由に本能寺で信長の森蘭丸を筆頭にした若手官僚集団が全滅したことにある。

若手官僚集団の主な役目は租税である。

農民から税を取り立てる。もちろん彼らが直接取り立てるわけではない。

事務手続き。どこからどれくらいの米が取れるか目算したり、商人と取引したりするのだ。

それが全滅した。これはかなり痛かった。

織田家の中枢を担うべき内政集団がいなくなってしまったのだ。さらに彼らには今後、もし織田家が政権を担うときの次世代の官僚の役目も期待されていた。

明治維新に例えてみよう。

明治維新は成功した。しかし、伊藤博文いとうひろふみ、山県有朋やまがたありとも、松方正義まつかたまさよしなどの次世代を担うべき者たちが全滅したことになるだろう。これはかなりの被害だ。

グダグダと述べてみたが信長が動けない状況ということだ。

といつても、秀吉に大阪城の建築をさせているあたりちやつかりしている。

安土城が燃えてしまったのだから仕方ないといえば仕方ないかもしれない。

そんなわけで暇なのだ。

暇なのにはもう一つ理由があるのだが、もうひとつ理由はすぐわかることだろう。

「秀家さまー。秀家様ー」

はら来た。

「すでに皆集まつておりますぞ。何をしておいでか」  
聞きなれた声がした後、忠家ただいえが部屋に飛び込んできた。  
はげ頭からは蒸氣が噴出している。

おおっ！ おおっ！ 相変わらず忙しいことで。

「やはり、ここにおられましたか、評定はすでに始まつてありますぞ。何をしておいでか」

当たり前だが怒られてしまった。

俺は今、評議、つまり会議をボイコット中なのだ。

「俺がいようがいまいが関係ないだろ。どうせ勝手に進んでいくんだし。俺がいないことで問題など無いだろ」

俺はそっぽを向いた。

「いい年をして拗ねなさるな」

まだ14歳なのでいい年というわけでもないが、既に元服してい  
る身なので大人と扱われることも仕方ないことだ。

「とにかく、形だけでも出席されないと。今以上にお立場が悪く  
なられますぞ。秀家様もそれは望んでおりますまい」

そういうと俺の返事を待たずに俺の手を取つた。

そのまま忠家は寝転がつていた俺をズルズルと部屋から引きずり  
出した。

ながふねさだひか

広間に入ると筆頭家老の長船貞親を中心に全員すでに揃つていた。  
俺が入ってきたことに気づくと、皆一斉に今までしていた議論を  
取りやめるが、すぐにまた喋りだした。

俺が忠家と席についてもそのままだった。

「ゴホンッ」

俺がわざとらしく咳払いをすると皆一斉に今気づいたような顔を  
して、わざとらしく平伏した。

形ばかりの平伏ほど腹のたつものは無い。

「うむ、続けてよい」

俺は頷く。

皆は再び堰を切つたように議論に戻つていった。

俺はボーッと広間に集つた面々の顔を眺める。  
左から一門筆頭、宇喜多忠家。浮田宗勝。明石全登。八浜七本槍  
として毛利との対戦で名を上げた馬場などが連なつてゐる。  
右には前筆頭家老、戸川秀安から地位を受け継いだ現筆頭家老で  
政務担当、事実上の宰相である長船貞親。

そして長船と同じく俺の父の代からの重臣である岡家利。その子  
である岡利勝。

前筆頭家老戸川秀安の息子である戸川達安などが面々連なつてい  
る。

皆俺のことを半ば無視して勝手に議論している。

いつごろからこのようなことになつてしまつたのであるつか。

2年前。

本能寺の変の直後はまだ今よりも良かつた。

本能寺の変で勝ち取つた功績を盾にしてある程度思つことが実行  
できた。

信長から功績として貰つた備中、備後を直轄領とし、財務に小西  
行長の父であり、元宇喜多家の御用達商人である小西隆佐をあてた。

桃寿丸とうじゅまるにも城を一つあるあげることができた。忠家の領地を分けてもらつただけだが。

それでもこれから少しずつ俺の子飼いの家臣、小西行長、石川五右衛門ごえごもん、後藤又兵衛ごとうまたべえらを宇喜多家の要職に付け、勢力を拡大していくと思つていた。

そのつもりだった。

しかし、当時の政務担当であつた戸川秀安とがわひでやすが引退し、その戸川秀安と忠家の推薦により長船貞親ながふねさだちかが次の政務を担当しだしてからおかしくなつてきた。

父、直家からの家臣で、忠家からの絶大の信頼を得ている長船貞親はそれを傘に来て専制をふるいだした。

まず、どうやつたのか知らないが、俺が信頼を置いていて、しかも重臣として唯一ねじ込むことができた小西隆佐が長船貞親についた。

どうやつて丸め込んだのかはわからないが、小西隆佐があからさまに俺を避けるようになり、長船に追随する事が多くなつた。俺が気づいたときには既に小西隆佐は長船貞親のイエスマンに成り下がつていた。

元々、忠家から絶対の信頼を得ていた男である。直家の初期からの家臣であった男なので諸将の信頼も高い。

そして、政治において初心者な俺と百戦錬磨で経験の豊富な長船貞親である。

俺が争つて歯が立つものではなかつた。

そして何よりも悪いことにこのころから俺の内政の失敗が徐々に明るみに出だした。

多分、財政を担当している小西隆佐のせいである。

ガレオン船はどうにかなつた。

織田家からの資金提供を受けたことで、不可侵のものとなつたた

めだ。

今更やめることの方が難しくなつた。

しかし、採算の取れない活版印刷、莫大な輸入費のかかる軍馬、風土に合わないサトウキビ畑の全滅。

これらのことが諸将に知られるうちに俺の立場はだんだんと追い込まれることとなつた。

当初はそれほど気に留めず、何とかなると思つて捨て置いておいた。

そうしていろいろにのづびきならないこととなつていつた。

最終的に重臣で擁護してくる人は、忠家一人のみだつた。

そして忠家一人の力では如何ともしがたい状況になつていた。

俺が三ヶ月でした内政で今でも残っているのは資金の目処が付いたガレオン船といまさらどうしようもない軍馬ぐらいとなつた。

「との、殿！ 御採決をお願いします」

俺を現実に呼び戻したのはその張本人である長船貞親だつた。

「うん？」

俺が現実に戻ると、広間にいる全員が俺のことを見つめていた。

「すまん。聞いていなかつた。」

俺はやり場の無い視線を泳がせる。

「はあ」

長船貞親はこれ見よがしに、わざとらしく大きなため息をついた。

「殿にはどうも難しそぎたよつで」

長船貞親の言葉に周りから失笑が漏れる。

「いや。すまん。考え方をしていた」

「はあ」

長船貞親は再度今度はより大きくため息をついた。

「殿におかれましてはこのよつなこと些細なことでござりこましょ

う。

しかし既にしてみればどのよひなことであれ、いじりで語られたことは非常に重大なことです。

まあ、殿は戦において全てをかたづけてしまつもつなのでしうな。

もう少し下々のことをお考へください

再び失笑が漏れる。もはや隠そうともしない。

「悪いとは思つてこる。だから謝つてこらでないか

「謝ることなど童でもできますよ」

小西隆佐が横槍を入れてくる。

再び笑いがおこつた。

俺はイラッとした。

きつと眉間に青筋が浮かんではいることだろ？  
やはり来るべきでなかつた。

帰ろ？  
と席を立とうとする忠家と田代が合図。

忠家は「いらえてくだされ」と田代訴えている。

俺もこりえなくてはならないとこりうことはわかつてゐるが、今回  
のことが初めてではない。

我慢できる限界はとつに超えていた。

俺が立ち上がろうと腰を浮かすと、機先を長船貞親に制された。

「私を花房正幸のように鞭ででも打とうとこりうのですか。いいで  
しうとも。受けたまひましょう。私は花房のよひに簡単にはいき  
ませんよ」

俺は機先を制されたことでこりから立ち上がることも、家臣にハ  
ツ当たりすることもできなくなつた。

「すまん。本当に聞いていなかつたのだ。もう一度説明してくれ。  
この通りだ」

俺は仕方なく頭を下げた。

忠家がすかさず助け舟を出してくれた。

「旭川の治水のことです。旭川の河川の氾濫が頻繁に起つてい

ると報告があります」

「ですから旭川付近の年貢を他と比べ低くしようとあります  
続けるのは戸川達安。前の筆頭家老兼政務担当の戸川秀安の息子  
である。

戸川秀安の後任といつ形で重臣に迎えられた。

初陣で小早川隆景を撃破したこともある軍事面においては申し分  
の無い男である。

俺にも少なからず応援してくれている人がいるのかと感動した。

「旭川といつこの岡山城のすぐ東にある旭川か？」

「それ以外に」「やりますか？」

長船がすかさず茶々を入れに来た。

どうも北海道の旭川が最初に頭に浮かんでしまひ。

「いここのところ被害が多発するようになつておりますので、早急  
な対策を。ということです」

戸川達安が補足する。

俺は少し考えた後、発言した。

一応発言する機会は与えられている。

「忠家、達安。旭川の氾濫は昔からのことなのか？」

「じうでしたかな。私が子供のころもたびたびあつたような気も  
しますが、最近ほど頻繁というわけではなかつたような気もします  
忠家は答えた。

「達安は？　じう思つ？」

「私は忠家様ほど長く知つてゐるわけではありませんが、過去  
の文献からはそこまで氾濫する川では無いよつに思われます」

達安は少し考えた後、自信がなさそうに答えた。

「ふむ。そうか。よくわかつた」

「いつたいそのようなことを聞いてどうすると。既に既、年貢の  
軽減と旭川の治水工事ということで評定は決しておるので。  
あとは秀家様が頷けばそれで良しといつまでもてるのです。

今更蒸し返すようなことなど……」

長船貞親は大きく首を振る。

俺は途中で手を前に出して会話をとめた。

「長船。確かに旭川は上流でたら製鉄をおこなつておつたな？」

「はあ。そうですが」

それが何か？　と言わんばかりの顔だ。

たら製鉄。

この時代の一般的な製鉄法である。

製鉄に必要な空気を送り込む機会をたらと読んでいたためたら  
ら製鉄と呼ばれるようになつた。

砂鉄などをとかし、刀などの原料にするものだ。

これは大量の木炭と砂鉄が必要である。中国の産地はこの条件に  
適した地が多かつた。宇喜多家領地も例外ではない。

わかりやすいのは、某アニメ映画の大手が放映した映画だらう。  
狼に育てられた少女（なぜか美少女）とイケメン男子との恋愛の  
やつである。

イケメンが憎い。

驚いたことは俺は一度驚いたことはあの映画、かなり忠実に作ら  
れているということだ。

つまり、あの映画の現状そのままなのだ。

違うところといえば、狼に育てられた美少女がいないということ  
ぐらいか。

俺のところにも来ないかな……

「少しの間たら製鉄を中止させてみてはどうだ？」

皆が一様にポカーンとする。

「たぶん、旭川の氾濫は上流の森林の伐採が原因だらう。

たら製鉄を少しの間中止させて見てはどうだ?

森林の機能を取り戻すことができれば自然と旭川の氾濫も少なく

なるわ」

俺は得意げに一気に続けた。

ジ リ様様だ。

「どうだ長船?」

俺は勝つた。

しばらくの沈黙があつた後

「はーはっはっはっはっは

と長船貞親は笑い出した。

それにつられて他の重臣も最初のしのび笑いからだんだん笑い声  
が大きくなつた。

笑つていなのは忠家と達安のみである。

忠家は頭を抱えている。

「笑わせてくれあるわ。たら製鉄の中止だと? ふざけるな小

童め! ! !

我らの領地は他と比べて石高が少ないことを知るつておるのか!

! !

そしてどれほどたら製鉄に我らが依存しているのか考えたこと  
があるのか。

我らがやつていけるのは製鉄に伴う産業があるからなのだと。  
それを少しでも考えたことがあるのならそのようなこと口が裂け  
てもいいえぬわ。

そもそも、なぜたら製鉄が旭川の氾濫につながるのだ。いつも  
でも夢の続きを見ておるようではどうしようもないわ

長船は怒りの形相で俺を睨みつけた。

「いえ、それはわかっているのだが……」

「わかっている? わかっているのならそのようなこと言えます  
まい。

少しは民の暮らしも考えるがよろしかね。既に評定は決しているのです。今更蒸し返すようなことはせんでも良いわ！

誰もお主の様な少し戦ができるだけで鼻が高くなっているような小童の意見など当てにしておらんは。我らの言ひことに頷いておればそれで良いのだ」

俺は血相を変えて反論する。

自分でも顔の色が変わつていいくのがわかる。

俺は精一杯反論しようとする。

自分でもそのようなこと認めたくは無い。

「しかし、俺にも……」

そこで言葉は切れてしまった。

考えがあるのだが

とはいえたかった。

誰も俺のことを見てくれていない。

それ以上に長船に同調するように相槌をうつたり、忍び笑いをしているものもいる。

自分がここで何を言つても無駄だとわかる。

なんとも腹の底がむせ返るような嫌な気分になつた。

そもそも環境問題など明治でさえ問題にされてなかつたことなのだ。戦国時代に認知されているはずも無い。

たら製鉄には大量の木炭を使用する。

その木炭は砂鉄が採取される、渓流の山間部を中心に利用されることとなる。

禿山となつた山から土砂が流出する」とによって下流の農業に影響を与える。

これらくんは某アニメのおかげで間違つてないと断言できるだ  
う。

俺は嫌な気持ちを何とか飲み込み、話を進めようとした。

「それで、旭川の治水はどうするのだ？ 農民に負担させるのか、商人に頼むのか？」

「商人？ どうしてそこに商人が出てくるのだ？ 商人如きがこのようなこと役に立つとお思いか！！！」

商人など金勘定しかできぬ輩ではないか

「うう……」

俺はもう言葉を発することができなくなつた。  
できなかつたし、したくもなかつた。

俺が発言することはどのようなことであれ否定されるだらう。  
一考もしてくれない。

そう思うと気力も体力も奪われてしまつた。  
後の会議の内容は覚えていない。

皆なにやらこの後もいろいろしゃべつていたのが俺がしたことは

「ううむ」

といつ頷きとも、うめきとも聞こえるような返事と

「長船の好きにするが良い」

といつ投げやりな返事だけだつた。

こうなると評定はスムーズに進んだ。

基本的に誰も長船貞親の意見に反対することなく、長船貞親の意見が通るためである。

最近はいつもこのパターンだ。

俺が最初頑張るのだけれど、打ちのめされてしまい、後は長船の思つがままというわけだ。

そして評定が終わつた後、俺が自室に帰ると忠家がやつてくる。

「殿、入りますぞ」

ほら来た。

「なんだ。また説教か。もう評定で聞き飽きたよ

「殿。ですが、もう少し殿のほうでも考えるよう促してもよいのではないか？」

長船の意見を通す

「じゃあいつたいじうじうとこうのだ。そもそもお前は長船のこと

とを信頼しておるのだろう？」

俺はやつあたりだとわかつてゐるがブ干切れ。

「それは……」

長船様とは殿のお父上からの付き合いですし、人柄は存じてあります。信頼できる人物だと思つておりますが

何が信頼できる人物だ。

そのうち宇喜多家がのつとられるわ。

「なら良いではないか。信頼できるものの意見を通して何が悪い」

俺が声を荒げる。

「いえ、それは重要なことです。あまりに一人に任せることい

かがなものかと」

「他のものは長船に追随するばかりではないか。それに、評定のたびにああまで言われる俺のみにもなつてみろ」

「それは殿にも悪い面がございましょう」

俺は鼻で笑う。

「はつ 僕にも悪いところがあると。俺が意見を言つても誰も耳を傾けてくれない。そもそも傾ける気が無いというのに。

だいたい一人に任せるなというが、筆頭家老の長船に任せて何が悪い。

お前も信頼してゐみたいだし、家臣からの信頼も厚い。良いことずくめではないか

俺は思つてもいなことを口に出す。

「岡家利の意見を聞いてみてもよろしかつたでしょ。」

彼は自分から発言することはありませんが、冷静な人物です。長船様と同じく殿の父からの家臣であります。

きつと殿にとつて良い意見を述べてくださつたでしょ

「お前が言えよかったではないか。なぜ評定のときに言わなかつたのだ」

「私が言つてもどうじょうもありますまい。殿には前々から言つていたはずなのですが」

「そんなもん、忘れてしまつたわ。評定の前に言ふ。そのようなことは」

「殿が遅刻なさるからいう機会も無かつたのですよ」

そういうと忠家は何かを諦めるように

はあ

とため息をついた。

「今日はこれぐらいで帰ります。ぐれぐれも今後評定には出席なさるよ。形だけでもいいですから」

そういうと忠家は出て行つた。

もうため息は聞き飽きた。

これでやつと自分の時間を取りることになる。  
この後來客が訪れる事はないだろう。

評定が早く終わることとなつたのでまだ日は高い。  
しかし今回の評定はいつものことであるが精神的にこたえた。  
このまま部屋にいよう。

と考えていると思いがけず来訪が訪れたこととなつた。

「入つてもよろしいですか？」

聞きなれない声だ。

珍しい。

俺に忠家やお香や桃寿丸以外の来訪者が訪れるとは。  
拒む理由は無い。

「どうぞ」

俺は外向けの返事を返す。

「失礼いたします」

そういうつて2人の若い男が入ってきた。

「戸川達安と岡利勝か。どうした?」

戸川秀安と岡利家の息子である。

両名とも若いながら宇喜多家の重臣である。

先ほどの評定にも参加している。

両名は平伏している。

「面を上げてよいぞ」

こう言わないと普通の会話もできやしない。めんどくさいことだ。

「で、一体なんのようだ?」

両名はかしこまつて答える。

「此度の評定で思うところがございまして。ぜひお人払いを」

「大丈夫だ。ここには俺以外にいない」

もともとここには俺の世話をする人や護衛などが何人かいたのだが俺が追っ払った。

基本的に現代人の気質である俺には四六時中誰かと一緒にいることは耐えられない。

例え何も言われなくてもただ他人に見られるというのは思つた以上に辛いものがある。

「单刀直入に申します。最近の長船様の言動は目にあまるものがあると思いまして。

殿はいかがお考えか。是非殿のお考えをお聞かせ願いたい

戸川達安が口上を述べる。

「利勝も同じ意見か?」

「はい。私も最近の長船様はあまりにも殿を蔑ろにしていると思います」

俺以外にもこのように思つていてくれる人がいるというのは嬉しいことだ。

「確かに長船は最近專制が過ぎると思つてはいるが、……すまん。今の俺にはどうにもできん。おぬしたちも知つていると

思うが今の俺にはあまり家臣たちへの求心力が無いのだ。

俺にもう少し力があればこんなことにはならなかつたのに、……

「殿がそのように嘆かれることはございません」

岡利勝が俺のフォローをしてくれる。

「そうです。殿の責任ではござりますまい。

私は何時でも殿の味方です。いかなることがあらうと殿のため  
に馳せ参じましよう」

戸川達安はこういつてくれた。

俺にはかなり嬉しい一言である。

「良くぞ言つてくれた！！！」

そちたちの忠誠俺は忘れんぞ

「殿もこのまま黙つているおつもりではないということですね」

戸川達安が念を押してくる。

「もちろんだ」

俺は即答する。

「その時は是非私どもに人働きをさせて頂きたい」

それが狙いか。可愛いものだ。

「うむ。お主達にも頼ることになろう。その時はよろしく頼んだ

ぞ」

「はつ 命に代えましても

そう言つと2人は俺の部屋から出て行つた。

俺は先ほどとは違つた晴れ晴れとした表情になつていた。

次代の重臣となる2人が俺の味方だと知れたのはでかい。

まだ宇喜多家の中にも俺の味方はいる。

まだまだ懸念はたくさんあるが、少しは気持ちが楽になることが

できた。

まだ田も沈んでいないしお香を誘つてどこかへ言つてみようかな。

どこに行こうか？

今からだとあまり遠くに行けないのが痛いところか。

たしか後藤又兵衛が兵の鍛錬をしていたよ。

しかし、デートに鍛錬を見るとはどうなんだらうな。

水族館も遊園地もない戦国時代ではどうじょうもなにとか。

とりあえず、お香を誘つてみるか。

お香を見つけることはそう難しくなかつた。

いつものように台所にいたからだ。

ちょうど手が空いたところだったらしく喜んで俺に付き合つてくれた。

「どこか行きたいところある？」

「八郎様が行きたいところならどいいでも」

いつも、ついついこの言葉に甘えてしまつくなる。

どこへ行つてもうれしそうにしてくれる。

いつも樂しい。

「ちょっと兵の様子を見に行つて思つてこらんだけど……」

「兵ですか？」

お香が小首をかしげる。

「ごめん。女の子を連れて行くところじゃあなかったね」

「いえ、私は大丈夫です。お仕事ですからね」

「そう。つらくなつたらいつでも言つてよ」

最近はそつでもなくなつたが、お香は侍を恐がつていたこともあ

る。

「大丈夫です。最近はもう慣れました」

そういうて胸を張る。

俺はその胸を凝視した。男の性で。

それに気づいたお香は慌てて両手で胸を隠した。

「何見てるんですか。もう」

そう言つてこっちは見てくれる。

「いや、すまん。そんなつもりは無かつたんだ」

「もう。慣れてきたのもハ郎様のおかげなんですからね

「ん？ 何か言つた？」

「いいえ、何も」

他愛ない会話であるが今の俺にはかけがえの無いものだ。  
幸せを実感できる唯一のひと時である。

つた。

長船貞親である。

ちょうど本丸前の門で出合つことになつた。

長船は俺がいることを確認するとすぐこいつらの方にやつってきた。  
さりげなくお香を俺の後ろに追いやる。

まずいところで会つ。

「これは殿どちらに行かれるとつもりですか？」

長船は俺が何か言つ前に先に発言した。

俺は身構えて答える。

「いや、兵の様子でも見に行こうかなと

「本当に戦がお好きなようだ

嫌味な奴だ。

長船は俺の後ろを覗く。

そしてすぐに眉をひそめた。

やばい。気づかれた。

「秀家様。またそのような下賤の者と共におられるのですか。いいかげん、自分の立場を考えなされ。城下ではあらぬ噂が横行してますぞ。

殿に取り入った女狐やら、宇喜多の殿は下賤のものを囲っているとか。

宇喜多家の威信に関わります。そのような者、即刻城から追い出して頂きたい」

「貞親！！！ 言葉が過ぎるぞ…… 僕を侮辱するか……！」

俺は怒鳴りつけた。

「いえいえ、ただただ殿を案じておるだけでござります。それもこれも、殿が側室を1人も持たぬがため。

側室の1人でも持ち、女を知り申せばこのような女への執着も晴れるでしよう」

「考えておく」

俺は投げ捨てるようにいい、この場を早く離れようとする。

そんな俺の気持ちを知つてか知らずか長船貞親はそ知らぬ顔で話を続ける。

「まさか、その女を側室にするつもりではないでしょうね。そのようなこと、まさか無いでしちゃうが。

いやいや、殿ならばそれもありえましょウ！」

長船は大げさに首を振る。

そしてさらに続ける。

「元服したものに言つことではないでしちゃうが、側室とは、特に一国の領主の側室は家臣から娶るものです。

家臣から側室を貰うことでその家臣との絆を深めるものです。そのような下賤の者など言つに値しません。

どうです？ 私の娘に手ごろな年齢のものがおります。是非これを機会に」

それが言いたかつたわけか。

お前の娘など死んでも嫌だわ。

それで子供など生まれてはたまつたものじゃがない。

「そのような心配無用じや」

俺は言ひ捨てる。

「そうですか。それは安心しました。是非殿には私たち家臣がしつかりとした者を選ばせていただきますゆえ」

長船は「うんうん」と頷いている。

「ふん。好きにせい」

長船は機嫌良さそうに頷いていたが、いきなり俺を睨みつける。

「まさか殿。その者を正室にするおつもりではないでしょうね」

図星をつかれてしまった。

「えつ んん、それは」

言いよどんでしまつ。

長船はますます表情を険しくした。

「殿ははつつけだうつけだと思っておりましたがまさかこれほどとは。

一国の領主の嫁取りとは外交です。しかるべかといひ、しかるべき地位の者から正室を迎えるくてはなりません。

まあ、つつけ者に言つても無駄でしょうがな」

長船はそういうと深いため息をついた。

「はあ」

そうしてこれ以上は何を言つても無駄だと言つよつに肩をすくめると城に向かつて帰つていった。

「お香、大丈夫？」

長船が去つていったのを確認すると背後を振り返る。

「はい。私は。もう言われ慣れておりますか?」

そういうて氣丈にもお香は笑つて見せた。

「そうか。すまんな。俺がふがいないばかりに」

「いいえ。そんなことは……」

その後はたいして会話も無く田的原まで移動することとなつた。城からはなれたところで後藤又兵衛は指揮を取つていた。

辺りには轟音が鳴り響いていた。

お香は目をパチクリさせてびっくりしている。

無理も無い。

鉄砲の音でさえ一般人には刺激が強すぎるのだ。

俺は又兵衛の近くにまで行くと大声を張り上げた。

「どうだ！！！ 調子は！！！」

「これは殿！！！ いらしたのですか！！！」

又兵衛も同じく声を張り上げる。

「總員、休め！！！ しばらく休息とする」

又兵衛は傍らにいた兵にそう告げる。

それを聞いた兵が旗を揚げた。

すると全員の砲撃がぴたりとやんだ。

見事なものだった。

「これで大丈夫です。おちおち話すこともできませんな

そういうてがつはつはと笑う。

「また評定で何かありましたか？」

「よくわかるな」

「それはもう。評定で何がある度にここに来られれば嫌でもわかりますよ」

「お前には隠し事できんな

「殿はわかりやすいですかね」

「そんなにわかりやすいのか。

なんかショックだ。

「相変わらずですか？」

「相変わらずだねえ。鹿之助がいたらなあと思つてしまつ自分が

情けないよ

「山中鹿之助殿がいなくなつたのは確かに惜しいですね。  
しかし、行長殿は喜んでおられましたよ。

殿はどうのような約束でも守るお方だ。私もよおろづけに行ける日  
も近い。とか言つてましたよ」

山中鹿之助は本能寺の変の功により尼子家の再興を許された。  
領地は出雲東部の月山富田城を与えられた。

大豪族を抑えるために小勢力をいくつか大豪族の側に置いておく。  
信長は統治政策として郡県制をなそとじていたことはよく知ら  
れていることである。

全國に郡県制をしき、代官を任命し、代官がその地区を統治する。  
いわゆる中央集権制である。

しかし、それでも今まで功績のあつた武将、柴田勝家や丹羽長秀、  
滝川一益、羽柴秀吉などはそもそもいかない。

彼らには土地を与えないければ納得しない。  
そこで彼らにはその抑えとして信長自身の配下である武将を小大  
名として側に土地を持たせるわけである。

柴田勝家の例を上げよう。

北陸総司令官であり、越前を任せていた柴田勝家は信長から部  
下を与えられていた。

前田利家と佐々成政である。

彼らは信長の命によつて柴田勝家に仕えている。

そして領土を与えられている。いざとなつた時の抑えとするため  
である。

「鹿之助の方はうまくいつておるのか?」

「うまくいつておるようですよ。

毛利家から尼子義久殿を解放して当主としました。もちろん倫久  
殿、秀久殿は未だに人質のままでですが。

もともと民からの人気が高い人物ですからね。山中鹿之助殿は、山陰では尼子家のの人気も未だに強いですから。当分は順調でしょ

う

ちなみに尼子義久は尼子晴久の嫡男である。

尼子晴久が有名な尼子常久の孫であるから義久はひ孫となる。

毛利との戦により毛利家に幽閉されていた。倫久、秀久は義久の弟たちである。

彼ら三人を含わせて尼子三兄弟という。

「どうか、俺がうまくいっていない分、嬉しいものがあるな」

「鹿之助殿でしたら、心配無用でしょう」

「そうだな」

「せっかく来たのですから兵を見ていかれますか？ 大分形にはなってきましたよ」

「いや、いい。お香が驚いてしまうからな」

お香はやつと驚きが収まったようだ。

それでも胸に手をやっている。

「調子は良さそうだな」

「まあ、形にはなりました。問題はまだまだありますか？」

そういうてがつはつはと又兵衛は笑つ。

「やはり問題は多いか……」

最近良いことなしの俺は自然と顔が暗くなる。

「そうですね。いろいろ御座いますが。一番は輸送面ですね。やはり厳しいですね。とても実戦に耐えられるものとは」

「実戦では無理か……」

「行軍にはとても付いてはいけないでしょうね」

「行軍は無理か。それについては俺に少し考えがある。つまづいたら儲けと思うぞ」

「船ですか」

「いつ、俺と同じ考え方をしてやがる。

「そうだな。次の戦は地形は有効に使えそうだからな」「島津ですか」

「いっ……さすがとしか言いようがない。

「輸送はいいとして他は?」

「そうですな、やはり技術が追いついてませんね。

織田家でやつているように大々的にできないのが痛いです

「ふむ……資金力が圧倒的に違うからな。技術提供してもらえるかな?」

それも次の戦しだいといったところか

「なんとか数だけはそろえることができましたから。何とかして見せますよ」

「悪いな。頼む

お互いまつめるとひまは一つだ。

不意に又兵衛が聞いてきた。

「次の戦が楽しみですか?」

「うん? いきなりどうした? まあ評定よりかは好きにできそうだしな。

年寄りどもが来なければのびのびとできるだらうし」

又兵衛は俺の答えを聞くと何か言いたそうにしたが、口をつぐんでしまう。

「じゃあ、俺は帰るわ。そろそろ日も沈んできたし。又兵衛もあり兵を疲れさせるなよ」

「加減はしております」

夕日に向かって去つていく秀家を見て又兵衛は不安を覚えた。

「殿は戦を待ち望んでおられる」

先ほど言えなかつたことを口にする。

あの年で家中をまとめることはさぞ大変だろ。

殿の精神はわしが思うよりずっと脆くなつてゐるのかもしない。

次の戦、殿自信が出られる必要は無い。

もちろん殿自ら出たほうが織田家への対応としては正解だ。

しかし、いつも家中がまとまつていない中、国元を離れることは

危うい。

いや、殿は今、次の戦とお香とでなんとか踏ん張つてゐに過ぎない。

「危ういな」

再び咳く。

もしどじらかが崩れたら殿自信も崩れてしまつのではないか。

そつまで考えて後藤又兵衛は自嘲氣味に笑つた。  
らしくない。

もともと、ここも腰掛程度にしか考えていなかつたはずだ。

戦功を立てる場があつさえすればよい。そのつもりで黒田家を飛び出したのだ。

眼下にいる兵を見つめる。

鍊度も悪くない。いや、申し分無いぐらいだらう。なによりわしはあるの殿の構想を見てみたいと思う。

「官兵衛様。もう戻ることは無いかもせぬ」

そういうと後藤又兵衛は再び兵の指揮に戻るのだった。

帰り道。

お香と俺は気まずい中を帰ることとなつた。

どう考へても長船との一件が後を引いているといつゝとはわかる。

「八郎様」

ふいにお香から話しかけてきた。

「私、ここを出ることにいたします」

お香の急な言葉に俺は動転した。

「どう、どう、どうしたの？ 急に？」

「やはり私がここにいてはハ郎様に迷惑がかかります。  
そのようなこと私には耐えられません」

「ちよ、ちよっと待つてよ。ここを出てどこへ行ってこつんだ。慶明さんはまだ帰つてきていなし」

ちなみに慶明さんはまだ毛利との交渉中である。  
領地の引渡しは無事に済んだが、毛利との戦後処理はまだいくつか残つてゐる。

あと少しで終わるとの連絡はあったのでそのまま帰つてくるだらう。  
「私一人でもお寺に帰らうと思ひます」

「そんな……」

俺は放心する。

「長船が言ったことを気にしてこむのか？ あんなの気にする」となつて。

どちらかといえば俺の力が足りないのが悪いんだし

「いえ、そういうことでは……」

お香はそうこうとうつむく。

「やはり私は身分が違います。城に来ることも私は気が進みませ  
んでした。

私は耐えられません。八郎様がこのまま離れていつてしまつ」と  
に

「そんなこと無によ。俺はずつといこなゆ。どじこも行かな  
いし」

「やはり勘違いしておられます」

「じゃあこいつはさつまつてくわなきや  
わかんないつて」

お香はしばらく黙り込んだ。

そして意を決したようにしゃべりだした。

「八郎様にはお立場がござります。長船様がおっしゃっていたよう にそのうち正室をとられになります。

側室も何人も抱えられるでしょう。それをまじかで見ているのが 辛いのです。

そのような方には私より身分も容姿もふさわしい方がたくさんお られます。

八郎様もきっと心変わりされるでしょう。それを見ているのはつ らいんです。

「わかつてください」

お香は一気につまくし立てた。

目には涙が浮かんんでいる。

俺はその涙を手でぬぐつ。

「ばかだなあ」

「バカとはなんですか。私なりに必死に考えたのです。

私たちはふさわしくありません」

「大丈夫。長船は俺が何とかする。家臣どもには何も言わせない だけの力を見せ付けてやる。

それをやるだけの覚悟も準備もしてきた。さつとつまくつづく 俺は自信を持つて答える。

「お香は何も心配しなくていい。そのうち正室に迎えてやる。 だからそれまで待つていてくれないか?」

お香は涙をためたままの顔で精一杯の笑顔で

「はい」

と微笑んだ。

## 27話 九州征伐1

同年 8月 厳島 安芸

「さすがは大毛利家」

俺の横にいる秀吉は素直に褒めちぎった。

厳島の富尾城から眺める広島湾は絶景だった。

日本三景と名高い景色なのだから感動もひとしおである。

景色もそうだが、厳島神社の影響力、海上交易の利点から日本の歴史にもたびたび登場する。

波がまだ出てから時間の経つていない太陽に反射してきらめいている。

「殿様、これは」

秀吉は傍らにいる人物に視線を移す。

「おお」

陽光差し込むような笑みを浮かべて信忠は答えた。

信忠も眼下に広がる景色に驚きを隠せていない。

ここにいる人物で例外はないだろう。

広島湾には織田家の幟をたてた軍船で埋まっていた。

数百名をのせた大安宅船、鋭い船首の関舟、海面をイナゴのよう

に無数に飛び回っている小早船。

その数はおそらく千隻を超えていた。

これらの船は外洋に出る能力は低い。しかし、日本近海では圧倒的な力を持っているだろう。

もちろん忘れてはいけない。

俺の手勢。

宇喜多水軍のガレオン船もこの中に含まれている。

質では負けていない。いや、むしろ勝つていて自信があるが数ではとても太刀打ちできない。できるものではない。

千隻を超えるであろう大船団が湾一杯に広がっている。

信忠は2代目にふさわしい、素直な心をそのまま出した。

「 もすがは毛利軍！ ！」

織田水軍の主力である九鬼水軍が今北条に向かっている。だというのにそのはるかに離れた西でこれほどの艦隊を編成することができるのだ。

この時代、日本最強の水軍の名をほしいままでしていた毛利だからこそだらう。

敵にするにはこの上なく恐ろしいが、味方となるとこれほど頼もしいものは無い。

先年（とはいっても1581年なので3年前）の織田との戦からここまで立ち直った。

毛利水軍、完全復活といつてよい。

秀吉も信忠も俺と同じ意見だらう。

目と顔の表情も見ればわかる。

秀吉は小早川隆景の方に振り向く

「 こりゃあ」

と呟いた。

それ以上は何もいわない。

褒め言葉は秀吉の主である信忠に言わせたほうが良いという配慮である。

秀吉はこうこうとこみく氣の回る男だった。

「 又四郎殿。見事な働き、感謝する」

信忠は秀吉の意図を汲み、信長譲りの高く、するどい声で言った。しかし、天性のものである、天真爛漫な明るさが自然と備わっている。

2代目氣質らしい信長には無いものだつた。

小早川隆景は思慮深そうな顔に控えめな忍び笑いを添えて答えた。  
「全てはわが主、輝元様が上様のために一意専心に頑張った故で  
ござります」

わざわざ輝元の名を出す。

先代の毛利家当主、毛利元就の教育が行き届いていたのか、  
律儀なのか。

凡将である輝元をいちいち立てる。

いずれにしよ小早川隆景といつも人柄がよくわかる。

真面目な男だ。

「うむ。上様もこれを聞けば喜ぶこと間違ひなかろう。よう伝えておぐ」

もし、本当に信長がこれを見る。もしくは知つたらどうなるのだ  
らうか。

毛利をいつかは滅ぼそうとするに違いない。

いや、まずはあの手この手を使い毛利の力を削ぎ、その後ゆっくりと毛利を追い込んでいくだらう。

どちらにしろ毛利に生き残る道は無い。

「宇喜多殿のがれおん船といったか。あれも見事のものよ。見よ。  
ひときわ大きく、異彩を放つてあるわ。期待した以上のものであつ  
た」

信忠、いや信忠様はありがたくも俺へのフォローも忘れなかつた。

「は、全ては上様のご意向と信忠様の徳、故にござります」

俺は答える。

「うむ、うむ。父上にもしかと云えおぐ

信忠は満足げに頷いた。

俺や信忠、秀吉が安芸にいるのはもちろん戦のためだ。

九州征伐。

もしくは九州攻め、島津攻め、九州平定など呼び名はいろいろある。

史実では近畿、四国、中国を平定し天下統一への道を順調に進んでいた秀吉と島津との戦いである。

しかし、今総大将は織田信忠であり、副大将として羽柴秀吉が任命されている。

信忠と秀吉は安芸に来る前、俺の領地である備前にも足を運んだ。当然である。通り道なのだから。

俺はこれを機会に信忠にガレオン船を見せた。

性能の面ではまだまだポルトガルから取り寄せたガレオン船にはとてもかなうものではない。

しかし、形だけはしっかりとしたものができるている。

信忠は素直に驚いてくれた。

「おお、これは船なのか。わしはこのような巨大な船始めてみたぞ。

これを見れただけでも父上に取り成したかいはあったものだ」と子供のように目を輝かせてくれた。

その後、九州で戦ということだった。

俺はこれをいい機会ととらえ、城を飛び出した。

信忠と秀吉を伴って喜んで安芸までガレオン船で案内した。後の領地の運営は長船貞親に任せることとなつた。

不本意ではあるが……

そこで俺はなんともいえない不満と不安を消し去るために城に詰めている兵の指揮権を戸川達安と岡利勝に任せることにした。

長船の悔しそうな顔といったら。

ざまあwww

そんなこんなで安芸まで来ることとなつたわけである。

元に戻そう。

信忠はそのまま広島湾に日を向けたまま子供のころからの呼び方で

「籐、申せ」

そう秀吉に言った。

九州征伐の作戦概要を述べよといふことだった。

すでに作戦計画は評定を経ており、皆も承知である。

俺も出席した。

もちろん信忠も参加している。

もう一度、この景色、艦隊を眺めながら聞きたくなつたのだろう。  
気持ちはずいぶくわかる。  
無邪気なものだ。

「へつ」

秀吉は素つ頓狂な声を出した。

が、目は真剣だ。頭はフルに回転しているのだろう。

「わが方は四国の長宗我部元親の軍を合わせますと15万になり申す」

ちょうそかべもとちか  
長宗我部元親。

土佐の小さな、そして貧乏な国人からいつぱしの戦国大名に出世し、四国の霸者となつたころには、自信のあざかり知らぬところで既に天下の情勢は決していた。

この不幸は男は、信長という才能を最も早く気づき、評価していた人物の1人である。

信長がまだ地方の1大名に過ぎないうちから親交を深めていた。

彼の不幸はその地理的情勢から始まる。

戦国時代の土佐、いや、現在の土佐もそつであるが山地率は90パーセントに及ぶ。

ちなみに全国平均は約50パーセントと考えればその険しさがわかるだろう。

これは耕地面積が日本で最低であるといふことである。

長宗我部元親は家臣を食わせていくために土佐の統一を決意する。この当時土佐は土佐七雄、もしくは土佐七豪族といわれる本山氏、安芸市、一条氏、吉良氏、津野氏、長宗我部氏、香宗我部氏等の群雄割拠であった。

この中で長宗我部元親は一代で勢力を拡大し、土佐を統一する。土佐を統一した長宗我部元親が次に目指すのは四国の統一だった。特に阿波、讃岐は混沌としていた。

京に近かつたためである。

京で敗れた魑魅魍魎の輩（三好氏など）がいつたん讃岐や阿波に逃れ再び力をつけようと雌伏の時を過ごすことが繰り返されてきたからである。

しかしそれらも武力と調略を織り交ぜ突破する。

そしてあと少しで四国統一も目前といつところまでいじつける。

しかし、彼の本当の敵は時流にあった。

既に信長が畿内を統一し、その手は四国にまで及ぼうとしていたからだ。

四国という京に近い地理上、信長にとっては四国はただ刈り取る場であった。

譜代の家臣への領地、自信の直轄領を増やすための選択だった。

そして何より不幸なことは信長が長宗我部元親への評価としてただの地方の一大名としてしか見ていなかつたことにある。

信長は長宗我部元親に向かつて「あれは鳥なき島の蝙蝠いわむつ」と揶揄した。

「鳥なき島の蝙蝠」という慣用句をもじつた言葉である。

優れた武将のいない島（四国）で幅を利かせている蠍（長宗我部元親）ということである。

本能寺の直前、ちょうど信長は正にそれを実行しようとしていた。信長は三男、信孝、丹羽長秀に命じて四国の切り取りを実行しようとした。

しかしそこで本能寺の変が起こる。

信長自信は辛くも落ち延びることとなつたが他のものはさうではなかつた。

一時は近畿一帯を支配することとなつた明智光秀によつて政権の中核を担うべく育ててきた官僚がいなくなつた。

森蘭丸もりらんまるといふと信長の小姓として、けつを差し出すぐらいの価値しかないと見られがちだが、それ以上に膨れ上がつた信長の領地の行政担当の面のほうが大きかつた。

さらに各地に飛び火した反乱の目を消す必要も出てきた。

信孝、丹羽長秀の軍勢は本能寺の変で自然と立ち消えることとなる。

信長に四国の相手をしている暇は無かつた。

この空白のときを狙い、長宗我部元親は四国を統一する。

信長はこれを見て昨年、嫡男信忠と羽柴秀吉に命じて四国征伐を命じる。

俺、宇喜多家にも四国征伐への参加を命じられるかと思ったが案外あつけなく四国征伐は終わつた。

もともと信長について他者よりも高い評価を持っていた男である。戦国の習いにしたがい、勝てないとわかると和平交渉を早急に進めだす。

もちろん、信長はすぐには納得しない。

長宗我部元親は苦渋の決断をする。

自身の息子、それも嫡男を和平交渉の使者として使つた。暗黙の無条件の人質である。

この時代人質は珍しいことない。

が、嫡男はめったに無い。それもまだ敵国であるのにだ。

俺など母しか出していない。

桃寿丸を出さなくてはいけないとは思つてゐるし、催促もきているのだがなんとか待つて貰つていい。

少し渋つたほうが桃寿丸の価値も上がるし、宇喜多家で少し実績を積んだほうが織田家での待遇も良くなると判断したからだ。信長はこの長宗我部元親の覚悟を受けて和平を受け入れる。もちろんただではない。

阿波、讃岐さぬき、一伊予（伊予）の一部を条件とした。

長宗我部元親も粘るに粘つたが最終的には受け入れることとなつた。

これにより、長宗我部元親は織田家の外様となつた。

「まず吉川元春が、大友宗麟と合流し東から豊前、豊後に進みます。

備後の日向において長宗我部元親ら四国勢と合流しありに日向に向かつて進捗いたします。

わが弟、小一郎らは筑後、肥後の西を行きます。途中龍造寺と合わさります」

そういうて秀吉は自身の2本の手をつなうねと動かす。

九州は2本の手でからめると言いたいのだらう。

簡単にいえば九州北部の在郷勢力と手を結び、東と西から2手に分けて進軍するつもりだということだ。

「この軍勢は各々3万5千。合わせて7万になります。

島津10万にはちと足りませぬ

ここで秀吉は手を叩いた。

「島津はこれぞ好機と見、うつてでるりやあす。

これを見てわしらはあの波のようにむらむらただよいまする」

そういうて広島湾を指差した。

「島津が勝どきを上げんとする」が、殿様率いる1・2万が錦江湾へとなだれ込みまする

そういうて広島湾に集結している大船団を両手で包み込んで抱き上げた。

うん。わかりづらい。

簡単にしよう。

秀吉が言いたいことを要約するならば、織田軍は手勢を3つに分けることになる。

大分から富城へと東のルートを行く吉川勢。西から佐賀、熊本と下がっていく小一郎秀長の部隊。

この2つが陸のルートを行うことになる。

この2つの部隊はそれぞれ約3万程度。島津は総勢10万ある。

島津はこのチャンスを逃すはずがない。

各個撃破の好機と取り、軍勢を北へと動かすに違いない。

もちろん陸のルートを行く2つの部隊は勝てないだろう。

いや、負ける。

しかしこの計画の立案者、秀吉、もしくは官兵衛その両名はそれでいいと考えている。

負けたら引けばよい。相手が出てきたら引く。

相手が引いたら出て行く。これを繰り返せばいい。

島津はどちらかに戦力を集中させ一方を叩いた後、もう一方を叩こうとする。

各個撃破の習いどおりに。

島津が戦力を集中させたほうは逃げ、その隙にもう一方がより深くに侵入する。

これを繰り返せばよい。

そして北部に釘付けになつてゐるうちに信忠率いる主力軍が鹿児島湾に上陸し内城を包囲、殲滅する。

前線で戦つてゐる兵は、いきなり本拠地が落とされるとなる。

おどり部隊が敵をひきつけその隙に敵の根拠地を奪つ。

なんてことは無い。良くある、従来の戦である。常識といつてもいい。

それを陸と海でやつてのけることと、総勢12万と言う大群でやつてのけることが秀吉の懸念しただらう。

秀吉の得意げな様子はここにいるもの皆に静かな笑いを誘つた。信忠も例外ではなかつたのだろう。

「見事な策だな。しかし島津がそれに乗つてこなければいかがする」

信忠は微笑とともに質問した。

本氣で問つてゐるのではない。それがはたから見てもわかるものだつた。

「せん無き」と。そのような時は陸から押し出す軍勢が島津の支城を落とし、ゆるゆると進みましようぞ」「

真面目な小早川隆景さえも自然と笑みが漏れている。

「簾、よう言つた」

信忠は信長譲りの褒め言葉を口にした。

如何に強兵でもつてなる島津兵でもこれではどうしようもないだらう。

九州が織田の傘下となることは決まったも同然である。あとはどれほどの時間がかかるかだけだつた。

「行つたか」

長船貞親はボソリと呟いた。

「左様で、じいじとばかりに嬉々として飛んでいかれたようですね。

いやはや、そうとう嫌われたようですね」傍に控えていた小西隆佐は主である長船貞親の顔色をつかがうように見上げた。

「ふんっ」

長船貞親は鼻で笑う。

「支障なく進んでおらつな」

長船は立ち上がり西の方角を見下ろした。

岡山城には未だ天守閣はない。

しかし城の頂上、今、長船貞親がいる場所からは城下一円が見渡せた。

本来なら、秀家のみが座れる席に長船は座っている。

止めるべき唯一の人物である忠家は岡利家と共に安芸まで軍を率いているので止めるものもいない。

「それがですね……」

小西隆佐は言いにくそうに続ける。

「それが、秀家様は留守役の内政を長船様に任せることを了承されましたが、城に残る兵の統治権を岡利勝様と川達安様に譲られました」

長船は苦味をつぶしたような顔をする。

「秀家め。愚作だな。わしへの牽制といふことか。それ以上の含みがあるのか……」

長船は思考をめぐらした。

「あの小倅どもは秀家派といふことか?」

「いえ、表立つてそのような態度を示したことはないと思いますが。」

多分、少し性急に事を起しそすぎたのでしょうか。長船様に対する不満が出てきたのもしれません

「我らには時間が無いのだ。わかつておらつな」

「はい。幸い計画の障害とはならないと」

「まあ小倅どもに何ができるというわけでもないが」

そういうと高笑いをする。

「御意。それと詮家様から不穏な動きがあるといつ報告も上がっています」

「それも問題ないだろ。早急に何かを動かすわけでもないだろ

う

「はい。まだ、そこまでには至っていないかと」

忠家の息子も困ったものだ。

一門なら何をしても良いこと思つていいのか。

秀家への対抗心が強すぎるな。

詮家の父である忠家が秀家にべつたりなのが許せないのだろ。

捻じ曲がつてゐるな。

それにして高をくくりすぎてゐる。

いつかは、対処が必要だろ。

今はまだいい。今はまだ。

「しかし、長船様ももまるで奸臣ですな。主の留守を喜んで、その間に計をめぐらす」

小西隆佐は目を伏せたまま言つ。顔は歪んでいた。

「まるで？ 奸臣そのものだよわしは。少なくともこれかうそつなる」

長船は西を眺めながら答えた。

「何と言つてきた？」

「小一郎様が総員、隈本の城まで退却とのことです」

岡家利が報告を受けてきた。

「既に準備はできておりますゆえ、後は殿の一聲のみでございます」

準備のいい奴だ。

「わかつた。全軍に撤退の命令をだせ。大筒を優先的にな

それにして驚くぐらいに弱いな織田の兵は。

安芸（あき）の一ヶ島で本軍をつれてきた岡家利と合流した後、俺は九州まで乗り込むこととなつた。

ちなみに一緒に厳島まで訪れた忠家は後のことを岡家利に任せて岡山まで帰つていった。

俺は岡家利を副官に迎え、船に揺られ、陸をテクテクと歩き九州までやつてきた。

今所、九州征伐は順調にいつてよいだろ。

今回の遠征は北九州の在郷の勢力、大友義鎮や龍造寺隆信などが織田家に協力的だつたため上陸するさいにも障害は無かつた。

正確には両勢力は既に九州を統一しかけている島津に対して織田家に救援を求めたというところだらう。

退却なのに順調？と疑問があるかもしれないがこれが本当の戦略的撤退ということだらう。

撤退が戦術の中に含まれている。

西と東で両方から攻めているため損害を免げなければいくらでも撤退して問題ない。

俺たちのいる西ルートが撤退したら島津の兵力は西に集まるといふことなので東のルートからはやすやすと侵攻できるといふわけだ。

まあ、実際は今俺がいる西よりは東のほうが大変らしい。どちらかといえば島津家は東のほうに兵力を集中させているし、東のほうが地理的にも侵攻しづらいからだ。

島津としては先に東から南下ルートをとっている軍をつぶしたあと俺たちのほうに来るつもりなのだろう。

背筋にゾクッと怖気が走った。

俺は当初東のルートを行くはずだったからだ。

そう秀吉に告げられた。

最初の評定での秀吉の案の段階では俺は吉川と共に東を南下し、長宗我部ら四国勢と合流するはずだった。

それを止めてくれたのは織田信忠だった。

「宇喜多殿はまだ若い。小一郎殿に学ぶこともあろう」といつてくれたことで危うく難を逃れることとなつた。

その時にはわからなかつたが今になるとどうしたことかよくわかる。

信忠は俺を庇つてくれたのだろう。

秀吉は自身に不利となるであろう軍勢を東に集め、これを機会に勢力の削減を狙つたのである。

面子を見てみればわかる。

小早川と比べ秀吉に対し好意を持つていらない吉川。

最近織田勢力の外様となつた宇喜多。ちなみに宇喜多はまともに織田家と戦争していないため戦力はそのまま保持している。

東のルートを南下している味方は俺たちよりかなり深くまで進撃している。

多分俺たちより撤退も簡単にはできないだろう。  
本当に危ないとこうだったのだ。

「撤退は順調か？」

「はい。われらもそろそろ」

岡家利が立ち上がりて言つ。

「どうか、では陣を引き払うか。大筒は？」

「壊れたものもございましてその回収に手間取つているようですが」

「捨て置け。欲しいのはノウハウだ」

「ノウハウ？」

不思議そうに岡利家は首をかしげる。

「今回の戦を体験した兵のほうが重要ということだ。物はまた作ればいい。総指揮は任せる。連絡だけは徹底させてくれ」

「馬廻を貸していただきても？」

「既に任せた」

もう全権は岡家利に任せている。

俺はそういうて立ち上がる。

そして近習がもつてきた馬に乗り込むと北に向けて出発した。  
前線基地である隈本城まで撤退のためだ。

城にいるより全然いい。

軍事状況下では俺をのけ者にすることなどできない。

さすがに不満はあってもこのような状況では表に出することは無い。宇喜多家の諸将は親父の時代からさまざまな経験をつんだものが多いためそれぐらいのことはわきまえてくれていてる。

すがすがしい気分だった。

岡利家がお目付け役としてくることもいやいや引き受けたこととなつたが、今ではなくてはならない存在である。

俺の言つことを反対することはしない。

間違つてゐる場合、ゆつくりと気づかせてくれる。さらに冷静な判断力に大局的な視野も持つてゐる。

こつちへ来てから知つた大きな収穫だ。

長船がいないうだで氣分が晴れ晴れとしてくる。空もいつもより青い氣がする。

お香には悪いが城に帰りたくない。ずっとこのまま続けばいいの

にと思つてしまふ。

内政だけゲームのよつこリセッタしてやり直すことができるの

……

というかゲームならやり直し決定だな。

何より今回の戦には俺にかかる責任は限りなく薄まつてゐる。さらには命の危険も少ない。

味方が心強すぎるためだ。

織田信忠、羽柴秀吉、黒田考高、蜂須賀正勝（小六）、羽柴秀長、

小早川隆景、吉川元春らの秀吉との結びつきが強い兵とさらに

長宗我部元親らの四国勢。そして九州の大名である龍造寺隆信、

大友義鎮らも加わつてゐる。

戦国時代のオールスター勢ぞろいといつてもいいだらう。

俺1人が失敗してもたいした問題にはならない。

これを機会にいろいろと実験しても罰は当たらないだらう。

俺はふと思い立つて近くにいる兵に呼びかけた。

俺はこれを機会に高みの見物としゃれ込むことができるのだが、俺の領民である兵たちはそうはいかない。

戦は戦だ。

どのような戦であれ真っ先に死ぬのは末端の兵、つまり足軽であ

る。

ちなみにこのころ、戦国の末期になると足軽といわれる末端の兵はより軽装になってくる。

無論戦国時代の初期と比較しての話だ。

陣笠に鉄の鎧、籠手、陣羽織などが装備としてあげられる。

最近では鉄の鎧ではなく、和紙、皮などのより軽いものに変わつていつている。

守備力よりも機動力を重視していつた結果である。その反対で武将クラス、より地位の高いものは重装備になつていている。

鉄砲の普及により、大将クラスの人物でもやすやすと討ち取られることが多くなつたためだ。

士氣をするものが死んだ場合、その者の兵は四散する。鉄砲で撃たれてもある程度耐えられる作りとなつていて。なので上から下まで鉄の塊として歩いているようなものである。満足に動くこともできない。

他間に漏れず俺の前を歩く兵も軽装だつた。

言い方は悪いが肉の壁要因だ。

「なんで今回の戦に参加しようと思った？」

俺は同情から出た言葉を口にする。

一步間違えば俺も似たようにに戦に狩り出されていたのかもしれない。

運良く宇喜多家の当主として生きることができるだけだ。

呼び止められた兵は驚いた。

いきなり呼びかけたため当然の反応だ。

呼ばれた兵はしばらく逡巡した後、答えた。

「あつしは農家の三男坊として、継ぐ土地がありやあせん。戦で手柄を上げれば土地も貰える聞いたもんで」

「そうか、家族も心配しているだろうな」

「いえ、余計な食い扶持が無くなつたと喜んでります」

兵は照れたように頭をかき、苦笑いをする。

「長男ならまだよかつたんですがね。無事帰つたら流行の商いで  
もするか土地を買おうとと思つります」

そう付け加えた。

「怖くないのか？」

「そりやあ、怖いつちゃあ嘘になりますがね。

他にどうしようもないですし、何よりどうせ一度つきりの人生華  
々しく散つてみるのもわるかねえです」

そういうてこの時代特有のさっぱりした自棄とも底抜けに明るい  
ともつかない笑いで返した。

農民もたいへんだ。

好んで戦に出ているというわけではないといふことか。

それにしても百姓になるために戦に参加するといふのは皮肉が利  
いている。

無事撤退が終了し、隈本城に戻つた俺たちを迎えてくれたのは先  
に撤退した後藤又兵衛と桃寿丸だつた。

両名とも元気そうである。

問題なく撤退できたみたいだ。

又兵衛は火薬の影響かこころもち煤けて見える。

俺は馬から助けを貰つてずり落ちると声をかけた。

「桃寿丸、初陣の感想はどうだ？」

俺は気を使つていう。

「ううん。あんまり実感ないなあ。馬場職家に任せっぱなしだし、  
僕が何かしなくちゃいけないといふことはあんまりないし」

岸本惣次郎、国富貞次、小森三郎右衛門、宍甘太郎兵衛、能勢頼  
吉、栗井三郎兵衛、馬場職家。

彼ら七人を八浜七本槍という。

一昨年、俺が内政を散々に好き勝手やつていたとき、毛利と戦つ

て勇名を上げた男たちである。

八浜七本槍と聞くと若く、豪傑な武将といつ印象を受けるがその実態は平均年齢50歳ぐらいの年寄りが多い。

その分、俺の親父、直家以来の家臣であり、経験に裏打ちされた老練した戦の運びは頼りになる。

俺が思つていたよりも頼りになる。

「余裕だな。そのうち後ろからブスツとやられるぞ」

桃寿丸はビクッとして後ろを振り返つた。

相変わらずからかいがいがあるなあ。

「今言うと冗談に聞こえないからやめて」

桃寿丸が泣き声をあげた。

「まあ、緊張してないならいいよ。肩の力を抜いて楽にいけば。

なかなかこんな戦ができるときなんてないよ。危なくなつたらすぐ逃げれるし」

俺はへラへラと笑つて手を振つてみせる。

上が撤退を推奨しているため俺らが撤退する」とになんら負い目が無い。

というか俺らが頑張つて踏ん張つていると織田家の兵はボロボロと面白いぐらいに逃げていく。

もう少し踏ん張れよと突つ込みたくなるぐらいいだ。

すごいところは逃げた兵が前線基地に戻ると続々集まつてくるところだ。

「キブリ並みのしぶとさだ。

「又兵衛、どうだ?」

俺は視線を隣の煤けた男に目を向ける。

「あー、耳をやられてますんでもっと大きな声で頼みます

又兵衛は手に耳を添えた。

自分が聞こえないためだろうか、声を大きく張り上げている。ものすごく大声になっている。

「お前耳栓とかしなかったの?」

俺も声を張り上げた。

「すっかり忘れておりました。めんぼくない」

又兵衛はそういうてガツハツハツと笑つた。

「大筒はどうだ？ まあある程度は俺の位置からでも確認できたが、やはり壊れたのもあるみたいだな」

又兵衛はあたりを見回して

「ここでよろしいのですか？」

と耳打ちした。相変わらず声がでかくなっているため耳がキーンツとなる。

俺も同じように見回す。傍にいるのは桃寿丸ぐらいただ。

少しほなれたところに兵に指示を出している岡家利の姿が見えた。俺は利家の名前を呼んでこっちに招いた。

「今更機密も何も無いだろ？ あんだけ派手にやつたんだ」と俺が言つと、まあそれもそつかと又兵衛は頷いた。

「見てらっしゃつたのである程度わかると思いますが、思つた以上に使いづらいですな。

途中で動かなくなる物があさります。一発打つた後、時間も喰りますし、安定した使用は無理でしうな。

なにより輸送が大変です。いくらある程度海上から輸送されるといつても行軍にかかる兵の負担などを考えますと割に合っていませんね」

ショッパながら手厳しい批判が飛んできた。

まあ、ある程度予想できていたことではある。

「ですが、はまれば効果は絶対です。見ました？ 島津の兵ども明らかにこちらに仕掛けてくる兵は足がすくんでいましたよ」

事実である。

足がすくむところではないが、意図的にこちらに攻めてくる兵は少なかつた。

その分砲火が無い地帯、俺の軍の両隣に突撃していく兵は多くなつてしまつたが、まあそんなことは俺には関係ない。

まさかそれで撤退じゃないよな……

「わしとしてはできればこれつきりにしたいですね。いや、こっちも楽しいのですが、やはり軍の駆け引きの楽しさには比べられません」

そういうて又兵衛は締めくくつた。

「わかつてている。此度の戦で適任だろうと思われるものをしたら引き上げてくれればそれでいい。

もちろんそれを率いるものはこちらで用意させてもらうが、その者が凡将としても下で勝手にやっていけそつなもののが欲しいな

「めぼしはつけてありますねば」

「大丈夫そうだな。家利、何かあるか?」

「いえ、殿の行いたいことは此度の戦で大体わかりました。私個人の葛藤はあるけど、今後有効になるかと」

岡家利は不承不承ながらも賛同の意を表した。

「それと大筒部隊を率いるものではありませんが、私の部下で推挙したいものがあります。

この場を借りて是非に

「ほう。まあ見るだけは見てみるか」

「すぐ呼んでまいります」

そういうと岡家利は一礼し、推挙するものを呼びにいった。

「桃寿丸はなにがあるか?」

先ほどから参加できていない桃寿丸に話を振る。

「僕にはよくわからないけど大筒つてずいぶん苦労していたやつですね」

「そうそう。何とか製造にまでこぎつけたんだけどなあ。あれはなかなか大変だったなあ

「ああ」

大砲、現在ではこう呼ばれている兵器は戦国時代では大筒と呼ばれていた。

大砲を想像してはいけない。

大筒という名の通りどちらかといえば大きい鉄砲といった方が近いだろう。

ちなみに大きい鉄砲のことは大鉄砲という名がついたものがある。これは本当に大きい鉄砲と考えてもらつて構わない。

城の城壁、壁などの破壊に使われる。

では、大筒とはいつたものなのか。

大筒は前装式、前から火薬と玉を入れるものだ。

形としては大砲を想像していいだろう。

担ぐことなどできないし、大きさも相当なものである。

射程も破壊力も十分すぎるほどある。

では、何を持つて大きい鉄砲と言い表したのか。

それは砲口の大きさと玉の大きさ、そして玉の種類に関係する。

今回なんとか製造にこぎつけることができたのは口径20cm、

3貫（約12kg）であった。

10cmの玉と大砲と言い表すにはずいぶんと小さいものだつた。俺の感覚からしたら小さいだけであつて戦国時代の人から見れば十分に大きいものであることは又兵衛や家利の反応からもうかがえる。

それでももう少しどうにかならなかつたのかと欲を出したくなるところではある。

10cm……

この時代の鍛造技術ではかなりの肉厚の砲身で無いと玉を飛ばす爆発に耐えうることができない。

大砲を飛ばす穴に比べて、その周りの部分を重厚に丈夫にしないとならなかつた。

しかもそれでやつと飛ばした玉は一切爆発しない。

ゴロゴロと転がるだけである。

地面に落下した後に爆発する、前世では一般的な玉は榴弾りゅう弾といわれる。

榴弾……だつたとおもづ。

すでにオスマン帝国では実用していたような気がする。

オスマンといったら大砲だし大砲といったらオスマンだからな。

そう考えると日本すでに遅れてんな。引き離されてんな。

こう述べていくと兵器として使い物にならないのではないか。  
何を持つて有効とするのか疑問が出てくる。

事実、実際的に相手に被害を与える効果は少ない。  
それよりも相手に与える心理的影響が大きい。

この点は鉄砲と大差ない。

10cmの砲弾が轟音と共に空から降つてくる。  
誰がわざわざその中を突っ込みたいと思うだろ？  
兵に与える心理的なものは大きい。

四散するまではいかなくとも、意図的にもしくは無意識に弾着  
地点には近づかなくなる。

それだけで十分なのだ。

敵の指揮を削るだけで効果は十分に發揮されている。

「最初は鉄で作ろうとしてたんだよねえ」

桃寿丸はしみじみと遠くを眺めた。

こいつ、なかなか見てんな。

「あれは失敗だつたな。

俺の領地は結構鉄が出るからそれでいけたらやりいつと思つてた  
んだがなあ」

「結局、青銅器になつたんだつけ」

「鉄がダメなら青銅器、青銅器がダメなら銅、銅がダメなら石と  
手当たりしだいいつもりだつたからな

青銅器で何とかなったのは幸運だった

俺は素直に認めた。

「僕は八郎様が苦労しているの知っていますから。批判は無いです  
よ」

そういうて二口二口と笑う。

俺はそう言われて一瞬啞然となつた。

そして桃寿丸の頭を「ゴツン」と殴つた。

照れ隠しだ。

「何するんですかよ」

敬語がおかしくなつていて

「いや、なんとなく」

少し救われた気がしたのは絶対に桃寿丸には知られたくない。

「もう。すぐ手が出るんだから

と文句を口にする。

俺は聞こえない振りをした。

戦場の中の日常を精一杯に謳歌していると岡家利が戻ってきた。  
推挙するつもりであろう人物を伴つていて

20代後半から30代ぐらいだろうか。

体格は細身だ。戦場で駆け回るには向いていなさそうだ。

足軽特有の薄っぺらい防具をつけていたところを見ると身分はそ  
う高くないみたいだ。

良くて足軽大将といったところだらう。

近づいてくる。

よく見てみると防具はよく手入れが行き届いていた。戦闘の後  
ため汚れているのは否めないがそれでも綺麗なほうだらう。  
誰かに似ている気がするのだが、どうも思い出せない。

「そいつか?」

俺は岡家利に尋ねる。

「はい。できれば殿の元で召し抱えていただけないかと思いまし

て」

「確認するが、見込みはあるのだろうな」

「そう思ったからこそその推挙です」

「うむ。俺は領くと岡家利の横で平伏している男に向かう。

「その方、なんと申す」

「権兵衛でござります。殿様」

苗字は無いか。武士でないものや商人でも許されていないものは苗字を名乗ることは許されていなし。

お香のように。

「この男もそうなのだろう。

「何ができる?」

「一通りできまする」

大きく出たものだ。若いからだろうか。

俺がいえたことではないか。

「そうか、では……そうだな。今は何をしておる?」

「足軽です」

「そうか、とりあえず足軽大将あたりか。この戦で役に立つのなら続きを考えてやる。

家利の期待を裏切ることなきよう励め」

「ははっ」

「どうも誰かに似ているような気がしてならない。

記憶を頭の中で掘り返そうとしたが、それはすぐに中断せられ

た。

「殿

岡家利の方から俺に呼びかけてきたからだ。

珍しいこともあるものだ。

俺は最近信頼を置くようになつてきたこの年寄りに耳を傾けた。

「傍によつても?」

「許す」

「くだんの話、上に伝えましたところ」

俺はすぐにピンと来た。

「どうなつた！――！」

「秀吉様にご判断を仰ぐとの事です」

俺は少し落胆する。

「そうか、何か動きがあつたら教えてくれ。  
あつ！ そうだ。それから小西行長いりにしじゅうながに今回の戦が終わつたらすべ  
にヨーロッパに向かえと伝えておけ」

「わかりました」

岡家利が少し不満そうな顔をする。

口では賛同しているがたぶん反対なのだろう。

「すまんが、譲れないぞ。

約束してしまつたことだからな。それにこれから海外に渡航する  
のは少し厳しくなりそうだ。

今しかない。織田政権もまだ、まだ今なら見逃してくれる「

「そこまでわかっているなら私が言えることはなにもありません  
といつて岡家利は不承不承ながら同意した。

約束は後1つ残つている……

## 29話（前書き）

27話における溢作では誠に申し訳ござらぬませんでした。  
私の認識が甘かつたことを痛感しました。

できるだけ早く、正式な謝罪文と27話の差し替えをおこないます  
ので少々お待ちいただきたいと思います。

本当に申し訳ござりませんでした。

少々不謹慎ですが、この回はR-18のような過激な描写が出てきます。

嫌な方は飛ばし読みを推奨いたします。

時間は半月前まで遡る。

船から第一歩を踏み出す。

自分の故郷に足を踏み入れたのは約一年ぶりのことだった。次に戻つてこれるのはいつのことだろうか。もうここに来ることは無いのかもしれない。

そう思つと、たいしていい思い出があつたわけでもない、むしろ悪い思い出のほうが多いこの故郷も感慨深いものに変わつていった。感慨深い？ 僕が？ まだそのようなことを考へえることができることに自分自身で驚く。

肺には船倉の火薬特有の臭いがこびりついていた。ゆつくりとゆつくりと肺に溜まつた空気を吐き出し、新鮮な外気と入れ替えていく。

潮風特有のネバッとした生暖かい空氣であったが、贅沢はいつていられない。

ここぞとばかりに精一杯胸を膨らませる。

「何をしている！ ちんたらするな。遊びに来たわけじゃがないんだぞ」

先を歩く大男に怒号を浴びせられた。しまつた。

距離をかなり離されてしまった。

先を歩く男はただでさえ歩幅が大きい。

まだ体が成長しきっていない僕には迫りつくることは一苦労だ。  
それでも縦にも大きく、横にも大きいため大人としては比較的歩くのは遅い。

港の喧騒を縫うようにして走る。

目標は目立つため、はぐれたり見失う心配は無い。  
そんなことより追いつくことが遅れて、鞭で打たれるほうがよほど怖い。

せつかくあの狭い船の中から出てきたのだ。今田ぐらには鞭に怯えることなく過ごしたい。

できれば屋根のあるところで眠らせてくればそれに越したことは無い。

ドンッ！

考え事をしながら走っていたため道行く人にぶつかってしまう。  
しかし、そんなことに構つていられない。わき田も振ることなく走る。

「こらあ、クソガキ！！！　どこに田えつけんだ！！！」

僕の背中に向けてであろう罵声が飛んで来る。

すいません。過去の僕なら謝つただろう。

残念ながらそのような心の余裕は持ち合わせていない。

最初はもつていたのかもしれないが、多分どこかに置き忘れてしまったのだろう。

未来を捨てたのはいつからだろう。

明日を考えなくなつてからどれぐらいたつただろうか。

今日を生きるということはそれほどまでに得難く困難だ。

「このガキ。どれだけ迷惑をかければ気がすむんだ。貴様のよくな者は今日の飯を吃えるだけありがたいと思えよ」

頭上から罵声が飛んでくる。

よかつた。今日はご飯を抜かれることはなさそうだ。

例え残飯同然のものだろうと。

「ありがとうございます。『主人様』

僕は安堵と共にいいなれた言葉を口にする。

「だが、その前に罰として鞭をうたなくてはな」

大男は青い目と分厚い唇を歪ませて小気味良さそうに顔を崩した。  
僕は落胆し、顔を暗くする。

その反応に満足したのだろう。

それ以上の罰は追加されることは無かつた。

宿屋は港町のはずれにあった。

宿屋の人には最初から何かしらの連絡があつたのだろう、すんなりと中に通してくれた。

「この、たたみというのはいつ来ても慣れんな。いちいち靴を脱がなくてはいけないなどと野蛮な国なだけのことはある」

忌々しそうに靴を脱ぎ捨てると青い目をした大男は畳の上に胡坐をかいた。

「こんな辺境の戦争しかしない蛮族のところまで来なくてはなんとは」

なら来なければいいのに。と思うがそのようなことはおぐびにも出せない。

「ひとつとやることを終わらせて植民地に帰りたいぜ」

「ですが、今しばらく時間がかかると思いますよ。領主様に話を通さなくてはなりませんし」

ギロツと男はこちらに青く大きい瞳を向ける。  
しまつた。

後悔したがもう遅い。

「貴様っ！ 口答えするきか！ いい度胸だな。奴隸の分際で」  
僕は慌てて訂正する。

「いえ……そのようなつもりは」

男は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「そうだったな。先ほどの罰がまだだったな。服を脱いで背中を

向ける「

有無を言わせぬ口調でそう告げる。

僕は黙つて言われたとおりにした。

反抗したところで今以上に辛い罰が待つていいことは明白だ。

「ほら、猿轡だ」

男は布を放り投げる。

素直に従うことが最良だ。

経験からの判断だ。

せめて前の罰の傷がいえてからにしてもらいたかった。

背中には何本もの鞭後ど、最近できた新しい赤い痣が残っている。肌色の部分などかすかにしか残っていない。

男はそのようなことお構いなしに輿に常備している奴隸用の鞭を取り出すと躊躇無く振り下ろした。

「ングッ」

ぐぐもつた悲鳴が部屋に立ち込める。

男は鞭を振るわせるたびに息を荒くしている。

疲れているためではない。興奮しているのだ。

意識を失つたほうが楽なだが、男はそこは心得たもので意識を失わないギリギリのところで鞭を休ませる。

男は容赦なく鞭を叩きつける。

そのたびに僕の背中に赤いみみずばれのような傷が増えしていく。

「ガツ グツ ノンノン」

猿轡の上から我慢できない悲鳴が漏れる。

どれだけ我慢したのだろうか。

限界寸前のところで拷問は終わつた。

僕はゆかに俯けに倒れていた。

既に息も絶え絶えだ。

男はそれを見ると満足そうにして、さらに息を荒くした。

そして、そのまま下腹部をまさぐり一物を取り出した。

凶悪なまでにそれは直立していた。

デブツと突き出た腹の下にいきり立つたものがあった。僕の下半身をまさぐり、着物を脱がし無理やりねじ込もうとする。すでに抵抗する気力も無い。

もしあつたとしても抵抗はしないだろう。いつものことなのだ。

後ろの穴に異物が入つてくる感触がする。

ものすごく痛いが苦痛の悲鳴を上げる体力はもう残っていない。

「猿ばつかりで文化も三流なこの国だが一つだけいいところがあるな」

そういうて僕の尻を優しくなでる。

「脱がしやすいこの服だけはわが国も参考にする価値はあるな。すぐ挿入できる」

「んっんっ」

なすがまだ。

「かわいい顔に産んでくれた両親に感謝するんだな。そうでなかつたら貴様など鉱山送りぐらいしか使い物にならんだろう?」

そういうている間にも男は容赦なく腰を動かした。

「おいつ!何とか言えよ」

男は全く反応のないぼくに嫌気がさしたのだろう。鞭でできた新しい傷跡をぐじぐじと指でかき回した。

無理やりこじ開けられる傷口から血がたれているのが僕からでもわかる。

「ぐつぐあつ」

たまらず嗚咽が漏れる。

「鉱山だけは勘弁してください。何でも望むようにいたします。ですから鉱山だけは」

僕は必死に言葉をつむいだ。

男はそれを聞いて満足したのだろう。

「そうだつ! 貴様ら猿は白人様の言つ事を聞いていればいいん

だ

男は満足そうに溜まっていたものを僕の腹の中に放出していく。

はあ。はあ。

夜の闇の中をひたすら走る。

周りは真っ暗で何も見えない。なので僕はひたすら前を走る背中を追つた。

だんだんと傾斜が激しくなる。

足がもつれて転びそうになるのを何度もこらえながらひたすら走つていく。

必死で走っているのだが前の背中に追いつくのが離されにくばかりだ。

このままでは捕まる。

僕の頭に嫌な想像が浮かぶ。

「あつ

思わず転んでしまう。

前に石があつたことに気がつかなかつた。

前のめりこむように倒れてしまつ。体が泥だらけになつてしまつ。

置いてかれる。

捕まつてしまつ。

そう思うと自然と涙が出てきた。

「ううううえっ ヒック ヒック

必死に涙を飲み込もうとするが、体は僕の言つ事を聞いてくれない。

嗚咽にも似た声が出てくる。

「だいじょうぶ?」

前を走っていたはずの、置いていかれたと思った少女がそこには

いた。

「ああっ こんなに汚れちゃって。ほら、だいじょうぶ。ね？」

そういうて僕の体中にこびりついた泥を手で払ってくれる。

「はしれる？」

少女は手を差し伸べてくれる。

「うん」

勝手に出てくる涙をこらえながら少女の手をとる。

「うん。おとこのこだ」

そう言つてこんな状況でも少女は笑顔を向けてくる。

ああっ そうだ。僕は子供のころからずっとこの笑顔に救われていたんだ。

僕を救つてくれた笑顔。そしてこれからも僕を守つてくれるだろう笑顔。

そう、このとき僕は幼いながらこの少女を守りたいと思つていた。

僕の住んでいた村は小さな、そして平和な村だった。

村の人は全員顔見知りだ。

小さく、のどかの村だった。

ここ以外では戦という恐ろしいことが起こつてゐるらしかつたが、ここではそんな心配は無用だつた。

よそ者もめつたに来ないこの地ではそのようなことに巻き込まれるはずもない。

僕はよくいじめられていた。

村の僕と年の近いの子はみんな僕より背が高く体が大きかつた。

近年の子はみんな僕より年が大きかつたからだ。

この村では僕が最年少だ。

僕より小さい子はいるがその子はまだ2歳だ。一緒に遊ぶことはまだできない。

年も大きく、体も大きい子に大勢で囲まれては何もできなかつた。

「戦」こしようぜ」

含みを持った笑顔で誘われる。

そういうつて誘われたときは最後にはいつも僕がボコボコにされてしまう。

そしていつも助けてくれるのが彼女だつた。

「コラーッ 何やつてんの！！！」

「げえ！！！ ちぬの奴だ！ みんなにげるー」

そういうつていじめつ子たちはみんな蜘蛛の子を散らしたように逃げていつた。

「この男女がー 今に見てろよー。たすけー、おまえもだー。女にばつかり助けられてそれでも玉ついてんのかー！」

「男女と女男とおにあいだー」

「ちぬとたすけはおにあいだー」

いじめつ子たちは遠くから捨て台詞をはいていく。

「うるさいぞ！ お前ら。やるならかかってーい」

ちぬと呼ばれた少女は威勢良く怒鳴つた。

「ほら、だいじょうぶ？」

いつも通りそういうつて僕に手を差し伸べてくれた。

ちぬは村一番の美人だ。

僕より5歳年上だ。

長い黒髪に肌は透き通るように白い。

大きく切れ長の目は少女として不釣合いなものだつたがそれは色気となつて表れていた。

庄屋の息子かどこぞの偉い人の側室にでもなるだらうといつのが村の大人たちの意見だつた。

そんな子がなぜ僕をいつも助けてくれるのかはわからない。  
たぶんいじめが許せないんだろう。

「かえるう」

そういうつてくれた。

僕は差し出された手をつかんだ。

夕日の中を2人で歩いていく。

「わたし隣町の庄屋の息子に結婚を申し込まれたんだ」

ちぬは突然切り出した。

「へえ、隣町つてあの大きな蔵のある?」

「そうよ」

周囲が暗くなつてきていいからだらつ。ちぬの顔が暗くなつているように見える。

「受けれるの?」

寂しくなつちゃうなあと思ひながら質問する。

「いやよ。あそこの息子、女つたらしだもの。隣町の女の子なら見境なしなんだって。

それにわたし、普通の生活がいいんだ。貧乏でも、好きな人と畠を耕して、ゆつくり暮らしたいんだ。

あつ 『じどももたくさん欲しいな』

僕は何を言つていいのかよくわからず不思議そうにちぬの顔を見上げた。

「まだ早すぎたか。君がもつと大きければいいのにね」

そう言つてちぬは少し悲しそうな顔をした。

「すぐ大きくなるよ。去年はたくさん身長が伸びたんだよ」

僕はちぬを勇気付けようと口にする。

ちぬはフフッと笑うと小さな声でそうこうひとじやないんだよなあと呟き

「期待してるぞ」

と言つてくれた。

「うん」

僕は精一杯大きな声で明るく答えた。

「わたし、待つてるから」

ちぬは再びそう呟いた。

ちぬはどこかのお金を持つている偉い人に嫁いで幸せな生活を送るだろう。

僕はたぶん父の跡を継いで農地を耕して暮らす。少し寂しいけどそういうものだと思っていた。それでいいと思っていた。

このときま。このときまでは。

それからしばらくは何も変化の無い生活だった。最初は大人たちがする噂話からだった。

「近くで戦が起ころるらしい」

詳しく述べわからぬが、戦は怖いものという認識はあった。

「この村は大丈夫だろ。とる物も無い小さな村だ」

笑い話にもならず、だんだんこの噂は人々の頭から忘れ去られていった。

次が起こったときには既に手遅れだった。

村に大量の兵が押し寄せてきた。

いや、僕は兵といえばもっと綺麗なものを着て、威厳のあるものだと思っていた。

しかし村に来たのは山賊と間違えるほど恐ろしい風貌をしたものたちだった。

村の人たちは僕たち子供を先に逃がしてくれた。

一緒に逃げてきた子供は他にもたくさんいた。

今は僕とちぬの2人だけだ。

村がどうなったのかはわからない。

後ろで煙を上げているのは多分村だろう。

最初はわざわざ僕たちなんかを追いかけてくることはないと思つ

ていた。

しかし何度も怒声が聞こえてそんな考えは甘いものだとわかった。

僕たちは必死に走った。

走り続けた。

しかしこどもの足だ。だんだんゆっくりになつていく。

走りが駆け足に変わり、歩きになり、最後にはその場から一歩も動けなくなってしまった。

僕だけではない、ちぬも既に肩で息をしていて次の一步を踏み出すこともできなさそうだった。

僕は最後の力をふりしぶり、近くに手すりに隠れることができそうな木のうろを見つけた。

その中に入ると、2人ともへたりとその場に座り込んでしまつた。もう歩くこともできない。

「ここまで来ればだいじょうぶだよね？」

僕は不安からくる恐怖を考えないようにする。

「ええ。だいじょうぶよ。きっともうあきらめたわ

「そうだよね。村のみんなだいじょうぶかな？」

「きっとだいじょうぶよ。明日には私たちを探しに来てくれるわ

」そういうちぬは僕の頭を抱きかかえてくれた。かすかに震えているのが着物ごしからわかる。

僕も抱きしめ返す。

怖いのはみんな一緒だ。

きっとだいじょうぶ。明日には何も変哲の無い生活が待っている。

」そう自分に言い聞かせて深い闇に落ちていった。

「起きて。起きて

」誰かが僕を起こそうとする。

「ん、んん」

」体を起こそうとすると体中に痛みがはしつた。

「こじり？」

「わたしよ。ちぬよ。わかる?」

僕は昨日何が起こったか改めて理解した。

確かに兵隊が押し寄せて、村はたぶん燃えていて、何とか僕たちだけ逃げることができたんだ。

僕は昨日を思い出してブルツと体を振るわせた。

「だいじょうぶ。もうだいじょうぶよ。

ほら、聞こえるでしょ。村の人たちが迎えに来てくれたのよ」

そういうちぬは耳に手を添える。

僕も同じように耳をすまして、手を添えた。

僕も同様に声が聞こえる。

「おーい。もうだいじょうぶだよー。兵たちはかえつていったぞかすかに声が聞こえる。

「でてこーい。どこにいるんだー。あとはおまえたちだけだぞー」

本当にかすかであるがうつすらと聞き取れる。

村からの迎えだ。

よかつた。みんな無事だつたんだ。

「やつた。これで帰れるね」

僕は喜び飛び跳ねながら言つ。

「そうよ。本当に良かつた。よかつた」

ちぬはへなへなとその場に崩れ落ちた。

安心して氣が抜けたのだろう。

「早く行こう。僕たちに気づかないで行っちゃうかもしれない」

僕ははやる心のままにせかすよつに言つ。

「そうね。早く行きましょう」

ちぬは起き上がり、笑顔を見せて振り向いた。

本当に良かつた。わき目も振らずに走ってきたから僕道わからなかつたんだ。実は私も。

というような他愛も無い会話をしながらかすかに聞こえる声を頬りに山道を下つていく。

だんだんと僕たちを呼ぶ声が大きくなつていいく。

はつきり聞こえるくらいになると僕たちは声を張り上げた。

「ここよー。わたしたちはここにいるわー」

「とおちやーん。かあちやーん。」

精一杯おなかから声を出す。

「おおつーーー！　いたぞ、生き残りがいたぞーーー！」

そんな驚いたような声が聞こえた後、再び声が返ってきた。

「どこだー！　どこにいるーーー！　無事なのかー？　ででーー

い！　でてきてくれー。」

あとはお前たちだけだぞー。ここまで来てくれー

とおおぜいの人人が僕たちの声に答えてくれた。

再びその声を頼りに僕たちは声の主を探していく。

「おーい。ここだよー」

そういうながら見通しの悪い山道を必死に探していく。  
声が近くなつて来ると少し開けたところに出た。

見通しもいい。

「おーい。おーい

僕は必死に叫んだ。隣にいるちぬも同じように叫ぶ。

「やつと出てきたか

そう声が聞こえた。

「え？」

と僕は声のした方角のほうに顔を向けなおす。

そこには村人ではなく、昨日村を襲った兵隊たちがいた。

皆一様に派手な着物を着込んでる。赤や黄などをたくさん使つたものだ。

鉢巻をしているものや、腰巻をしているもの、着物をわざと着崩しているものまでいる。

そしてその背後には昨日村から一緒に逃げてきて、途中で僕たちとはぐれたはずの村のこどもたちが縄でくくられていた。

「やつと、でてきたか

一番偉い人だろう。頭に赤い布を巻いていて、着物の片方をずら

していのる男が出てきた。

「このガキが。てこずらせやがつて。これもそれもおめえらの対応の悪さがいけねえ」

部下をかき分けて出てきた男は近くにいた男にハツ当たりをした。

「へい。ですがこの作戦ばつかりでしたでしょ。所詮はガキ。ノコノコとできやしたぜ。

あつしがこれを思いついたことを忘れないよつておねがえしやす

ぜ。頭領」

「ばかが。おまえらが手間取らなければ、あもつと半早くすんだんだ」

頭領と呼ばれた赤い鉢巻をしている男は部下を小突いた。

「おまえら、こんなガキ2人、ひとつと捕まえちまえ」

頭領は指示を出した。

周りにいる兵が一斉に武器を構え、僕たちを睨みつける。

僕は震える足を叩きつけた。

隣でペターンッと尻餅をついて泣きそつになつてゐるちぬの手をつかみ元来た道を走り出した。

罷だつた。

殺される。

わかつたことはこれだけだつた。

父ちゃんや母ちゃんがどうなつたか、村のみんなはどうなつたのか。

つかまつてしまつた子供たちはどうなつてしまつのか。

次々沸いてくる不安と恐怖を飲み込み、ただひたすらに足を動かした。

しかし、所詮は10にも満たないこどもの足である。

すぐに周りは塀に囲まれてしまつた。

僕は必死に抵抗した。

武器も何も持っていないが、大声を上げて手足をばたばたと動かし、捕まるまい、殺されるまいと反抗を試みた。

ちぬを守らなくては。

その思いで一杯だつた。

「うるせえ、ガキ」

ゴンツと音がした。

頭に鈍い感触がし、意識が遠くなつていいくのを感じた。

「おい、こいつらやつちやつといいよな？」

「おいおい。まずいって。頭領から止められてるだらう」

「いいって、いいって。ばれりやあしないさ。これは俺たちの戦利品なんだろう？ なんも問題ないぞ

今なら男だつてかまやあしないぞ」

「お前……衆道の氣があつたのか」

「いやいや……普段は無いさ。坊主じやあるめえし。しかしこうも溜まつてくるとな」

「まあ。気持ちはわかるぞ」

「おつ！ 兄弟話せるな」

「俺もおこぼれに預からせてもらひつとするかね」

だんだんと意識がはつきりしてくる。

うつすらと目を開けると着物をたくし上げようとしている男の姿が一番に目に入った。

「選り取りみどりだ。どいつにしようかなあ」

そういうながら男は1人1人無遠慮に物色していく。

どうやらここは小さな小屋のようなところだつた。

その狭い中に大勢が押し込められている。僕の村の人もいれば全然知らない人もいる。

そうだ！！！ ちぬは、ちぬはどうなつた。

僕はガバッと跳ね起きた。

「よかつた。気がついた」

目の前にちぬが飛び込んでくる。

「本当に良かった」

田には涙が溜まっている。

「おつとつとおつかあは？ ビーべー。」

「『めんなれ』。探したのだけビーにほこないみたい。わたしの両親も……」

田の涙を拭いながらちぬは答えてくれる。

「おいつ そこつ うるせえぞ」

そういうてむづきまで物色していた男がこいつに向かって肩を揺らしながら歩いてきた。

「このガキどもつ！ 少しほとなしくできねえのか」

そういうて男は拳を振り上げた。

「おつ！ こいつあ。田舎者ばっかりで、芋くせえ奴としょんべんクセヒやつしかいないと思つていたがこいつは……なかなかいや、上玉じやねえか」

そういうて男はちぬのあいを乱暴に持ち上げ、下種な表情を浮かべる。

「へへつ こいつはいいこやあ。おいつ！ こいつばっじうだ？」

「おおつ！ こいの見つけたなあ。俺はこいつにするぜ」

そういうながらもう1人の男は女の髪を引っ張りあげる。

「いたいつ！！！ お願い助けてつ。なんでもする。何でもするから命だけは」

「姉ちゃん。よくわかつてんじやねえか。なーにおとなしくしてれば命ばっかりは助けてやるよ」

おめえも気持ちよくしてやるよ」

もう1人の男は嬉しそうに腰の辺りをモゾモゾとさせた。

「きがはええなあ。まあいか、俺もこっちでお楽しみといくか

男はちぬの腕を引っ張り連れて行こうとする。

「いやつ！！！ やめてつ！ はなして！ ……」

させるもんか！

僕は男に掴みかかるとしたが、縄で両手がふさがれていることに今更ながら気づいた。

思うように動きがとれない。

ガブツ

僕は必死に体を動かして男の腕に噛み付いた。

「なんだつ！ こいつつ！ ちくしょー。離せよ。このガキッ」

「ふあなあふふあんが」

噛み付いたまま声を上げる。

「生意気なガキめつ 身の程を教えてやる」

男は空いているほうの手で剣を取り、手を振り上げた。

そのまま振り下ろされるかに見えたときギイイイッと扉が開く音がした。

「騒がしいな。何をしている？」

新しい男が小屋に入ってきた。

「お、お頭……これはその……」

さつきまで威勢が良かつた男たちがしじろもじろになっている。

「そう、あれです。こいつらがおとなしくしないので少し躊躇してやろうと思いまして」

僕が噛み付いていた男が必死に言い訳をする。

お頭と呼ばれた赤い鉢巻の男はジロツジロツと2人の男を交互に見る。

たぶん一番偉い人なのだろう。

「ほう、お前らの躊躇とやらは女限定なのか？」

「へへつ」

男たちは追従の笑みを浮かべた。

「お前ら、大事な商品に手をつけようとすることは何事だつ！！！」  
少し外に出て頭を冷やして来い

「お頭。それは誤解ですぜ」

「もういい。わかつたから外に出てろ。少し用があるから出てろ  
お頭は真に受けることなくしつしつと手を振つて退出を促した。

2人の男はしぶしぶちぬともう1人の女を放して小屋から出て行つた。

「あいつ！ 入つて来い」

お頭は外に向けて言い放つ。

呼ばれて出てきたのは背の小さい小太りの男だった。

「あつしに用ですかい？ 肩もみでも何でもいたしますぞ」「もみ手をしながら追従の笑みを浮かべている。

「あいつはつ

ちぬは驚きの声を上げる。またかついいえ、いくらあいつでもそこまではつ。

「知り合いなの？」

僕はちぬに質問する。

「『じめんつ。後から説明するからお願ひ。私を隠して』  
ちぬは僕の後ろに隠れる。

「お前の言つていた女はここにいるのか？」

「へいっ。拝見させてもらいやす」

男はもみ手と愛想笑いをしながら1人1人丹念に顔を確認していった。

腰を低くしたままジロジロと田を動かしていく。

ゆつくりとこちらの方に近づいてくる。

僕の前に来るとそこでピタリと止まった。

背中越しにちぬが震えているのがわかる。

「その女、こっちへ出て來い」

男はさつきまでとはつてかわって、居丈高な口調で命令する。  
「いたのか？」

赤い鉢巻を巻いた男はたいげそうに尋ねる。

「いえ、この小僧の後ろにいる女の顔がみえねえもんでして。はい……」

はあ。鉢巻の男は深くため息をついた。

「今は悪いよにはしねえからでてこい。確認だけだ。な」

僕の後ろで震えているちぬはそのようなこと聞こえていないうだつた。

「み、みのがしてください」

僕は勇気を振り絞る。

「ああ？ てめえには聞いてないんだが」

ものすごい目で僕をにらめつける。

「俺はてめえの後ろにいる姉ちゃんに話しているんだが。優しく聞いてやつてやつちに、な。俺はお前らを手荒に扱おうつていうんじやない。

むしろ丁重に扱つているほうだ」

そう言つて鉢巻の男は刀を抜いた。

トンシットンシと手持ち無沙汰に肩に刀のみねを置く。ちぬはおずおずと僕の背中からでてくる。

それでも震えているし、僕の服から手を離さない。

「こいつです。間違いありません」

小太りの男がちぬを指差す。

「ほう。ではこれで全員といつとこりか」

刀を見つめながら鉢巻の男は確認する。

「へい。たぶん。それで約束のほうは？」

「約束？ なんのことだ？」

鉢巻の男はつまらなそうに相手をしている。

「そんな！？ 旦那。忘れてもらつちや あ困りますぜ。

私のところの村と隣の村を全員差し出したらこの女を貰つてもいい。そう約束したはずですぜ」

小太りの男は形相を変える。

「ああ、全員差し出したら。な。

逃げられたじやないか。少なくともここいらを探し出したのは

俺の部下だ」

「そいつはねえですぜ。ちゃんと隣の村まで案内までしたつてい

うのに」

「うるさいやつだな。おい、入つて來い」

外に出ていた男たちが頭領の声を聞いて入つてきた。

「なんかありました？」

「こいつを縛れ。少々手荒にしてもかまわん」

「いいんですか？」

「まあ、どうせこいつは一束二文ぐらにしかならなやうだしな。ただしこいつと違つてガキと女は高く売れる。丁重に扱えよ」頭領は部下をにらみつけた。

先ほどのことがあつた負い田だり。部下たちは罰の悪がつな顔をする。

「へへっ　じゃあこいつも縛つて放り込んでおきやすね」そうじつて小太りの男を縛り上げようとする。

「何をする！？ 私は村で一番の地主だぞ。こんなこと許されるはずが無い。

父に、父に言つけてやるー。この辺を支配する大名にもあつたことがあるんだぞ。

お前らのような奴はすぐに捕まるわ。やまあみる」

小太りの男はひたすらに暴れてくる。

鉢巻の男は吐き捨てるよつて言つた後出て行つた。

「おまえの父ならあまりにもつるさかつたから切つたよ。あと今回のこの命令はその大名様とやらさ。こいら辺は近く戦争になるらしいからそれなら有効活用しようこうわけさ。運が無かつたな」

場面は変わる。

男は目を血走らせていた。

「え？ かわいがつてほしいんだろ？」

はあはあと声が出るくらい息が荒くなつていて。眼下には尻で後ずさるよく知つてゐる顔がある。ちねだ。

男は卑猥な形に似たランプを高く高く掲げた。船倉は暗いため、人の顔は良く見えない。やはり上玉だ。

男は舌なめずりをする。

乱れた黒髪と細い肌に吸い付くような着物である。肩はあらわに露出され、ランプに照らされて青く光つている。

雪のようないい肌にランプの明かりが注ぐ。

「ほら、かわいがつてほしいんだろ。いつてみな。私をかわいがつてください。おいしく頂いてください」

そういつた後、ゲラゲラゲラと笑う。

ちねは答えなかつた。

何を言つてゐるのかわからないからだ。もちろん僕にも理解できない。

ちねは円らな瞳に困惑の色をのぞかせながら後ずさるだけだつた。へへつそりやがるつきつと生娘なんだつ

言葉が通じてないことは男も承知なのだろう。さつきから盛んに呴いている。

「ほら、いつてみ。アントニオ様に初めてをさせたかつたんです。私の膜はアントニオ様にとつておいたのです」

たまんねえぜ。男は自分の言葉に酔いしれながら涎を拭う。もちろん僕には言葉などわからない。

わかるのはずっと後のこと、僕がポルトガル語をある程度しゃべれるようになつてからだつた。

しかし、今この男が何をしようとしているのかはわかる。それぐらい明白だつた。

僕が捕まつた後につれてこられたのは船だつた。

異人の船、異人、鬼のような顔をした全く違う人間に僕たちは売られた。

火薬と交換に。

異人の男は腹に樽ほどの脂肪を抱えている。

頭は卵のようにつるつるで禿げ上がり、油によってテカテカと光っている。

唯一の若かりしころの名残である髪は後頭部に少し残る程度である。

腕も足もぶくぶくに超え太り、動かすのも億劫そうである。

ピシッとしている服が余計に滑稽さをかもし出している。

誰がこのような中年男に初めてをさげたいと思うだらうか。

男はそれぐらいわかつていた。

人一倍外見にコンプレックスを抱いていた。

まともに望んで、望んだままを得られるとは思っていない。

だからこのような植民地くんだりのさらに奥の辺境までわざわざ人を買いに来ているのだ。

植民地にさえ来ればポルトガル人にかなわない望みは無いといっていい。

男もそれを望んできたのだった。

どうせこいつらのなかで本国、ヨーロッパまで生き残るのは半分もない。

ならつまみ食いしても構わない。なーに、みんなやつていい。

役得という奴だ。

15世紀以来ポルトガル王国は拡大の一途をたどっていた。

航海王子と呼ばれるエンリケ王子は多くの航海者を育てた。

1488年にアフリカ大陸最南端からインド洋に航海する道を見つけたことにより、ヴェネツィア共和国により独占されていた香料

を仕入れることに成功する。

得た利益によりさらに各地に植民地の拠点を築き上げた。

海外各地を植民地支配し、交易体制を築きあげた。

ポルトガル海上帝国の誕生である。

日本に最初にやつてきたのはキリスト教だった。

宣教師の次にやつてきたのは人買い、奴隸商人だった。

奴隸商人と普通の商人はみわける事ができない。同時に両方経営していることが普通だ。

奴隸といつても勝手に他の国人をさらっていくわけではない。そのようなことは稀だった。

その国の指導者と友好関係を築き、穩便に商品を受け取るだけだ。

男なら奴隸として鉱山かどこかに売り払う。

女なら、淫売屋に放り込むか、買い手がつけばどこかの家にメイドとして送り出す。

家畜のように手繩をかけ、連れて行く道中に、男は荷物運搬として酷使される。

それが女となれば味見を楽しむ権利も奴隸商人には当然の権利だった。

これが後300年も続くヨーロッパの植民地政策の実態だった。

「だからやめられねえ」

この土地はポルトガル人であるというだけで人としての格が1段も2段も上がった。

原住民を見下しながら、本国では王侯貴族しかできないような特権を享受することができた。

「ひへつひへつ たまんねえぜ」

下腹部に溜まったものから心地よい痺れを受ける。  
周りから嗚咽がこぼれている。

すすり泣くものもいる。

別にわざわざ船倉でこのようなことをする」とはない。

別の部屋には暖かいベッドとワインが置いてある。

アントー才といつ男の完全な趣味だった。

一番の器量良しを他の女のすすり声というスペースを聞きながら味わうことが最高の贅沢だと心得ていた。

「どうだ？　え？　見るのは初めてか？」

アントー才は前をはだけて自分の物をさらけ出した。

ちぬは涙目になりながらせつと顔を伏せる。

男はそれをみていつそう陵辱心を駆り立てられる。

「どうなんだ？　いつてみる？　え？」

太鼓腹の下についた露なものをちぬの頭の上に迫らせた。

「ひへつひへつ　ほしいんだろ？　これが、え？　このアントー才様の大きなものが欲しいといってみな。

遠慮することは無いさ。周りの皆も見てくれている。お前だけじゃない。これからもう2、3人は試したいからな」

涎を手の甲で拭う。

へへつ　まだ少女だ。

あそこ毛は生えているのか？　いや、案外剛毛かもしねない。いやいやいや、全く無いかもしねない。うん。きっとそうだ。この航海中は2、3人綺麗どころを見繕つてずっと俺に奉仕させてやるうか。

口もいいし、膣でもいい。

なーに、時間はたっぷりあるさ。ゆっくり楽しもう。

「へへつ　ちょっと見せてみな。だいじょうぶ。だいじょうぶ。何も怖いことは無い。

ちょっと確認するだけだから」

下卑た笑いと共に太い指がちぬの股に侵入する。

「いやつ」

ちぬは精一杯声を張り上げ、必死に抵抗するが2倍も3倍も大きい男の力にかなうはずも無い。

やすやすと侵入を許してしまつ。

剛毛だ。

こんなかわいい顔をして。へへつ。

男はまた別の快感を得る。

「ひへつ ひへつ ほーら、じゃあ本番だ」

アントニオは自分の股間のものをわざとちぬの顔の前にもつて言った後、下のほうに下ろしていく。

ちぬは精一杯の抵抗を示すが、抑え付けられているからどうにもならない。

鮮血が弾ける。

「おおっ なかなか使い心地がいい。誇つていいぞ。俺のもので初めてを迎えるからな」

げへげへ笑いながら男は腰を振つていた。

僕は眠りから跳ね起きた。

嫌な夢を見た。

僕は、僕は何もできなかつた

いつぶりだろうかこの夢は。懐かしい地に帰つてきたからだろうか。

嫌な汗をかいている。服も下に敷いている藁もびつしょりだ。

あの後ちぬがどうなつたかはわからない。

事が終わつた後、他の2・3人の女と共に連れて行かれてそれつきり合つことは無かつた。

僕は鉱山に売られた後、必死にポルトガル語を勉強し、今のご主人様にそれを見込まれて買われる事となつた。

「おい、お前何してゐる。早く準備しろ」

叩き起こされる。

「はい……」

寝ぼけた目をこすりながら答える。

「主人より遅いとはいひ度胸だ。いつもなら罰を下さるとこりだが……」

氣味の悪い笑顔を顔いつぱいにした。

「だが今日は機嫌がいい。早く支度しろ。港に行くぞ」

この地方を治める大名からいつもよつ早く品の受け渡しをすると連絡があつたらしい。

僕は急いでご主人様の後を追つ。

「この分だと早く帰れそうだな」

満足そうにご主人様は呟いた。

今日はかなり機嫌が良い。

「ひとつと受け取つて早く帰りたい。お前もそつ思つだろ?」

そういうて僕のほうを向く。

「はい」

とりあえずのおざなりの同意を口にする。

「うん。うん。お前もそつ思つか」

相当機嫌がいいのだろう。

自分の太鼓腹をバチンッバチンッと叩きながら僕に話しかけてくる。

普段は用を言いつけるときと罰を考え付いたときしか僕に話しかけることは無いのに……

すぐに品の引渡し人だろう男が現れた。

「待たせたな。品もすぐつくはずだ」

僕は通訳してご主人様に伝える。もちろんもつと優しい言葉には

修正している。

「それは、それは。忙しいといひすみませんね。こちらも今回はたつぱりと火薬を用意しております。

見ていかれますか?」

これは『主人様。商売だと口調が変わるものいつものことだ。

「うむ。そうだな。先に見ておこうか」

「了解しました。今運ばせます」

愛想笑いを顔に浮かべている。

水夫たちが火薬の入った樽を持つてくる。

その数は相当なものだった。

「うむ。それでは」

そういうて男は樽の1つを開けて中を確認する。

「うむ。確かに」

男はそういうて頷いた。

「あの、それでは私どもも品を確認したいのですが」

『主人様がいうのを通訳して男に伝える。

「ああ、そうだったな。すぐ来るだろ?」

そういうて男おりすぐに品はやつてきた。

手に繩をかけられた人々、大勢過ぎてどれだけいるのかわから

ない。

「ほう、これはまた集めましたね」

感心して『主人様は頷く。

「今回は多くの火薬がほしかったからな。量だけじゃなく質も良

いぞ。

こいつなんてどうだ?まだ若いぞ。いくらでも働ける

そういうて男は僕とそつ年の変わらない子を指す。

僕より薄汚れた服を着て、腕も細い。触れば折れてしまいそう

なぐらいだ。

「女はいるんでしょうね？」

「もちろん揃えたさ。今回は若いのが多い。それと丈夫だ。長い航海でも耐えられるぞ」

「種類は多いほうがこちらとしても嬉しい。いつも通り1樽50人でよろしいですか？」

「うむ。そのつもりだ」

「わかりました。また次回もよろしくお願ひしますね」

「ご主人様はそういうと水夫に命令する。

「おい、こいつらを連れて行け。いつも通り船倉に閉じ込めておけ。決して逃がすなよ」

「旦那様」

水夫は確認するようにご主人様に伺いを立てる。

「わかつとる。わかつとる。この後で選別をする。いいか？ いつも通りわしが最初だぞ」

水夫たちはそれを聞くと嬉しそうにはしゃいだ。選別と呼ばれる一種のこの船の儀式だった。

船には女性を乗せる習慣は無い。

船乗りに女というのは縁起が良くないとされている。

それでは今買つた女はどうなのかな？

今買つたのは女ではない、いやそれ以前に人ではない。商品なのだ。

長旅をしてきた水夫にとって女にありつける機会は大変限られている。

商品を仕入れた後は貴重なその機会となる。

僕が買われた時と同じように。

火薬も運び終わり、奴隸という商品も運び入れた。

後は出航を待つばかりとなつた。

その時、ちょうど周りがばたばたと忙しくなつた。

どうも戦が近くに起るらしい。

もつともそれは最初からわかつてていたことだつた。

戦があるから僕たちはここにいるのだ。

事前に情報を掴んでいたため、火薬をいつもより多く運び込むこととなつたのだ。

しかし、なにやらあわただしい雰囲気といつだけで、ただの通訳の僕には何が起こっているのか全くわからなかつた。

「積荷は全部のせたな。ならぐずぐずするな。早く出航しろ」

ご主人様の怒号が飛ぶが、急な出航のため他の水夫たちの足並みは揃わない。

「くそつ。変な因縁をつけられるのはごめんだぞ」「その場をウロウロと行ったりきたりしている。

いつたい何が起こっているのだろう。

と疑問に首をかしげる。

と、1人の若い男が大勢を伴つてこちらにやつてくるのが見えた。僕と同じくらいの年齢だろうか？

ずいぶんと若いのに、その格好は高貴なものだった。僕には一生縁の無い世界だ。

「ここか？」

「はい。そうですが…… いつたい何をするおつもりで？」

若い男の堂々とした態度に相反して案内している年を取つた男はオドオドしている。

「おい。そこのお前！ この船の所有者だな。中を見るが」

若い男はご主人様に有無を言わせぬ口調で迫つた。

「いや、それは、ちょっと……」

ご主人様は愛想笑いともみ手を崩さなかつたが、内心は頭にきているはずだ。

頭に青筋が浮かんでいる。

「まあなんといわれようと勝手に入るんだけどね」

そういうつて若い男はズンズンと勝手の中に入つていった。

「ご主人様は必死に止めようとするが後ろに伴われてきた男たちに阻まれてしまう。

「あー、やつぱりか」

若い男はいつの間にか船倉への扉を開け勝手に中を覗き込んだ。

その若い男に伴わってきた多くの男たちは中を見て絶句している。中には奴隸が所狭しと敷き詰められているはずだ。手には縄をかけられ、着るものも満足ではない。

若い男は表面上は涼しげな表情を崩さない。

「おい。切れ」

若い男は端的に言い放った。

それを受けた老人といつてもよいほどの年齢の男がすぐさま命令を出す。

すぐに命令どおり水夫の1人が切られた。

「ひいっ」

ご主人様が突然のこと驚いて悲鳴を上げた。

さっきまで平静だつた若い男がピクリと眉を上げた。

「俺は切れといったぞ」

「ですから、水夫を1人切つたまでです」

平然と老齢の男は答える。

「そのような木つ端な者な者などいくら切つたところで」声に怒りがこもっている。

「お望みとあればもう一人切りますが」

「俺はあいつを切れといったのだ。あいつを」

若い男はご主人様のことを指差した。

「そのような人手は余っておりません」

「んなバカな。ああ、もういい。わかつた。全員捕らえろ。一人も逃がすな。

あと繋がれている人たちを開放した後、事情を聞いておけ。すぐ

に上の判断を仰ぐ

「御賢明な判断。感謝します」

「ふんつ」

若い男はそのまま僕のほうに向かって歩いてきた。

「ん？　お前は？　日本人か？」

僕に気づき声をかけてきた。

日本人？　何のことだろ？

「すみません。何のことでしょう？」

「ほう。日本語ができるのか？　中国人？　というわけでもなさ  
そうだな。

お前、いつたいここで何をしている？」

「僕ですか？　僕は『ご主人様に通訳として買われただけです』

「『ご主人様」というとあいつか？」

若い男はご主人様を指差す。

『ご主人様はちょうど縄をかけられているところだった。

「はい」

「そうか。通訳といつたな。ポルトガル語ができるのか？」

「はい。必死に勉強しましたから」

ほうつと若い男は感心したように頷いた。

ご主人様に買われなかつたら今でも鉱山にいだらう。  
死んでいただろ。

「これから行くあてがあるのか？　もしないのなら一緒に来るか？」

今回のこといろいろ聞きたいこともある」

『ご主人様がとらえられた今となつてはもちろん行く当てなど無い。

「はい。お願ひします」

僕は二つ返事で答えた。

いつたい何ものなのだろ？

「失礼ですがお名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

若い男はふつきらぼうにそいつた。

「宇喜多、宇喜多秀家だ」

「とりあえずの諸将の領土分配は田処がつきました。信忠様にも田を通してください、快い言葉を承りました」

黒田官兵衛孝高は神妙な顔をして上司に当たる男、秀吉に報告をしていた。

「ほうか。ほうか。そもそもこれで少しまるつとでもいうだな」

実際ここ所、官兵衛は多忙を極めていた。

戦の最中よりも事後処理のほうが苦痛だった。

在来の豪族、手柄を上げたもの、織田軍に味方したもの、それぞれに満足するよう論功交渉をしなくてはならなかつた。

官兵衛がこのよつなことにたづねわらなくてはならなかつたことは織田家の官僚不足にある。

織田家の次代を担う官僚が本能寺の変で消失したことにより、本来秀吉の官僚役を務めるはずの石田三成、片桐且元、長束正家などが代わりとして召し抱えられることになつたためだ。

「あればよろしこのですが

「まだ仮の話ではあるが、今回どちらにも城をやることができる。わしの気も楽にならうものよ」

官兵衛は秀吉が姫路に入るときに自身の城を無償で秀吉に譲えた。織田家への忠誠を示すために。

秀吉はそのことを気にしていた。

官兵衛は豊前国の6郡を譲えられたこととなつた。やはり、秀吉なりに想つてひががあったのだらう。

「ありがたく

官兵衛は頭を下げる。

「よしよし」

秀吉は満足そうにそして満面の笑顔をうかべた。

「ところで此度の呼び出しががなされましたか?」

「ああ、そちも知つておるわ」

それだけで官兵衛は合点がいった。

「南蛮の件ですか?」

秀吉は重く頷いた。

「弟から報告があがつとりやあ

秀吉は離れた場所にいるであろう秀長を思い浮かべるような優しい眼をした。

秀吉は秀長を愛していた。

百姓上がりの身内の少ない秀吉にとっては身内は大切だったのもある。

純朴な性格な秀長は誰からも愛された。

そしてそれ以上に秀長は戦闘指揮官として並以上に優秀だった。

「早いつもり田を摘んでおくことが肝要です」

手短にそう答える。

「信忠様はいかに」

「前右大臣様の判断に任せたがうだ。今はほおつとおけと  
信忠自身の責任では決めることができない問題だった。

父である信長野判断を要した。

「的確な判断でしよう

「下につくものしだいだてえ」

秀吉の信忠への評価だった。

「どうだ? 洗礼せずによかつたんなあ

秀吉はそういうひびきと面白そうに笑った。

「少し考えさせてもらいます

官兵衛は揺れていた。

「ゆづくり選べや。急ぐ必要もあるま」  
神など何するものぞ。とでも思つてゐるかのようご軽く秀吉は言  
い流した。

「ところで……だな。官兵衛」

官兵衛は身構えた。今までのことはたいした話ではなかつた。  
といつことはここからが本当の自分を呼びつけた理由だ。

「もうひとつ摘んでおきたい芽があるのだ」

官兵衛は少し考えた後、

「私にはとんと思いつきませんな」

と、とぼけた。

「宇喜多秀家のことだ」

「秀家？ 宇喜多殿が？」

何か問題でも？ といつよつて聞き返す。

「今は特に何もありやあせん。だがちと怖い。元服も済ました」  
今まで後見人として秀吉の力を發揮できた。  
しかし、このまま維持できるとは限らない。

「織田家への忠はあると思いますが」

「そりやあ本能寺があるからな。問題は……わしの元につくかだ」

「そこまで心配ですか？」

「心配だ」

また悪い癖が出た。

たまに2人になるとこのように弱気になることがある。

いや、元々秀吉の性格はこの弱気で猜疑心の強いほうなのかもし  
れない。

信長の前で大氣者と評されている秀吉は後に作られたものと官兵  
衛は最近思つようになつた。

秀吉自身演技といふことに気がついていないかも知れないが……

「でしたら……」

官兵衛はしづしづ答える。

官兵衛は個として宇喜多秀家のことと氣に入っていた。

本能寺の時にしてやられた時はやられたと思ひと同時こどにかすがすがしかった。

そして何より、官兵衛のお氣に入りの後藤又兵衛が仕官し、重用されている。

官兵衛は息子の長政より又兵衛のほうを氣に入っていた。しかし、あくまで個人としてであつて秀吉の実質的參謀としての立場ではそうはいっていられない。

「宇喜多殿は未だに縁談の話は無いとお聞きしております。

身内にしてしまつといふのはいかがでしよう」

「わしの母ちやんでもやれといふのか。それに信忠様はまだしも前右大臣様はよく思われないだらうな」

秀吉には身内が少ない。

「前田殿、細川殿あたりからとつてこれば前右大臣様の心証もよろしかるうつと。

それを秀吉殿の養子とこい」といひて、縁談をまとめるところは

「ほひ。悪くない案だ。しかし秀家は懇意にしている女子がいるといふ話ではないか」

「懇意にしてこるとこつても正室ではあるましまこ」

「手をかまれることはないとは言い切れまい」

「それは……」

「まあそれならそれで良いか。その時は芽を摘み取つてしまでか」

柴田修理亮勝家謀反の報が伝えられたのはそれからすぐのことだった。

秀吉の思惑通りに事は運んだ。

秀吉は計画通りに島津の兵を北に釘付けにし、その隙海上から上陸した本隊により城を囲んだ。

島津義久は抗戦を早期に諦めた。

秀吉、しいては織田家に服従の姿勢をとつた。

秀吉はそれを快く受け入れる。

もちろん条件はそれなりに厳しいものであったが、それでも信長の処置と比べれば優しいものだ。

結局島津は大隈と薩摩の領土を秀吉と信忠から安堵されることで決着がついた。

と、あっけなく決着がついてしまった。

これで自分の領土、岡山に帰らなくてはならなくなってしまった。せつかくのびのびと生活できているのに、これでまた肩身の狭い環境が待っていると思うと鬱になつてくる。

俺は船に乗りながらこれからのことを考えて暗くなつていた。

ちなみに既に小西行長はヨーロッパに向けて大半の船を伴つて旅立つていった。

今残っているのは俺が乗つているこの船をいれても数えるほどしかない。

新しく建造したガレオン船は全て小西行長がもつてしまつ

たため、ここに残っているのは旧式の沿岸専用の船しかない。

「 それでも船は毛利に頼めば帰りの都合ぐらいはつけてくれるかもしれない。」

九州から岡山まで歩いて帰ることは俺には不可能だ。俺は馬に乗れないのだから。

「 帰りたくないなあ」

俺は思わず思っていたことが口につ出てしまう。

「 なんで？ お香ちゃんに会いたくないの？」

横から桃寿丸が口を挟んでくる。

いつの間にやら近くにいたようだ。

「 そりやあまあお香には会いたいけどねえ」

「 そうだよ。帰つたら一緒になるんでしょ」

初陣を終え、少し大人っぽくなつてきた桃寿丸がわかつたようなことをいう。

「 何で知つてんの？」

「 こういうことは広まりやすいからねえ。知らないのは本人たちだけかもよ。」

城下でももつぱらの噂だったよ

「 うそ！？ 俺そんなの聞いたことなかつたよ」

桃寿丸は笑つた。

「 そりやあ城主の耳に入るようにそんなこと言つ人はいないでしょ」

衝撃の事実を突きつけられた。

「 そんなものか」

「 そんなものだよ。八郎、まだ城主としての自覚が足りてないんじゃない？」

生意気なことを言つる様になつた。

そんなことを言つても帰りたくないものは仕方がない。

はあ。

俺はため息を洩らし思考に区切りをつけた。

「秀家様、秀家様はおられますか？」

岡利家が老体をおこしてやつてきた。

「利家殿。どうされましたか？」

桃寿丸が返答する。

今まで気がつかなかつたけど又兵衛つて野次馬根性が強いんだな。

「どうした秀家」

「殿、秀吉殿から使いが参られました。至急殿にお会いしたいとのことです」

船に慣れないのか足元がおぼついい。

「そうか。通せ」

「ここで、ですか？」

「至急なのであります。」

「はっ」

岡利家が後ろに振り向くとすぐに使者と思われる人物がいた。こいつ、俺の性格をわかつてきたな。あらかじめ俺がここに使者を通すことをわかつていやがった。

「これはこれは、よく来てくださいました。

それなりのものなしの準備はできておりますが、まずは用件のほうをうかがつてもよろしいですかな？」

使者は少しむつとしたが諦めたのだろう。

素直に手紙を差し出した。

俺は紙を広げ、読み進めていく。

此度の戦、そして先年の戦、宇喜多の家の忠義あつぱれである。信忠さまも大変お喜びである。

前右大臣様の御威光もよりいっそ増すばかりである。

「」から辺の前口上は飛ばす。

前右大臣様がご子息である信忠様の九州征伐と北条征伐とを平行して進められていることは貴殿も存知のことであろう。

よつて、我ら前右大臣家は東方と西方に兵を集めている。

先年の本能寺の変の例もあり中央を長期に空けておくことは危ういと存じる。

よつて我らは早急に中央に戻り後詰としたい。

前右大臣様に後顧の憂いなく存分に采配を振るつてもううようじたい。

宇喜多殿には恩賞も存分でないしぬたて次の戦に発つてもううじになる。

大変心苦しい限りである。

先年の働きと此度の働きとあわせできつむ限りのことをしたいと  
考えた末、良案を思いついた。

宇喜多殿は未だ正室がいないと聞く。

元服も済ませ、武者働きも優れる宇喜多殿に未だ正室がないのは  
は由々しき限りである。

わしが前右大臣様に掛け合おつ。

信忠様も是非にといて喜んでくださつた。

というようなことが書かれていた。

俺は読み進めるたびにワナワナと手が震えてきた。

バカな！

バカな！

こんなことが……

俺はもう一度手紙を読み返した。

が、手紙の内容が変わるはずもなかつた。  
俺はしばらくの間放心していた。

「失礼します。拝見します」

そんな俺を不思議に思ったのか岡利家が俺の手紙を奪い取つた。  
俺と同じように手紙に目を通していく。

真剣な顔で読んでいく。

「ふむ」

読み終えると一言頷く。

「悪い条件ではないな。いや……むしろいい条件ともいえる」

「どれどれ」

横から桃寿丸が手紙を覗き込んだ。

桃寿丸も前者2名と同様に読み進めていった。

「これは……ああ……そういうことか」

桃寿丸は納得するように頷いた。

場の空気が静まった。

しばらくして、桃寿丸が沈黙を破つた。

「でも、岡利家の言うと折り悪い条件ではないよね。むしろつま  
くいけば……」

というか多分秀吉殿もしくは織田家との縁組の可能性も高い」「  
桃寿丸はいつたん言葉を切つて俺の顔を見た。

「これは受けるべき条件だよ。迷う必要なんてないよ。利家殿も  
同じ考え方でしょ？」

「むしろ断ることは不可能でしょう。当家は秀吉様と前右大臣殿  
に多大の恩があり申す」

「だつてさ。八郎」

そう言ってから俺に話を振ってきた。

桃寿丸なりに俺に気を使ったのだろう。

「織田信長が今回の九州征伐と同時並行で北条征伐を行つてたことは知つていたが。

でも少しおかしいな。

本能寺の変から織田領が少し騒がしかつたのは確かだが。

それも2年たつてゐる今では大分おとなしくなつてゐるはずだ。

わざわざ秀吉が大兵力をつれて後詰に行く必要があるのか?」

「確かに。言われてみると。九州征伐での全軍をそのままということではないでしょうが、

秀吉様には秀次様も蜂須賀様もいらっしゃる

岡利家は首をかしげた。

「そうだ。わざわざ秀吉が引き返す必要はないはずだ。

九州は平定されたとはいえまだ口は浅い。反乱もおきないとは限らない」

「中央で何かあつたと」

岡利家は俺に鋭い視線を向けた。

「そう考えるのが妥当だ。本能寺ほどのことではないことを祈るだけだな」

既に歴史は大きく変わつてしまつている。

もう一度本能寺の変と同じようなことが起こつても俺に対処する手立ではない。

「まあこちらこは次期当主の信忠がいる。そこまで慌てるほどのことはないだろう」

「じゃあ、そんな感じで、今までどおりこちらから動くことはせず、上からの指令で動きましょつか」

俺はそういうてみんなの顔を見て締めくくつた。

「ちよつと待つてよハ郎。こつちはどうするの。縁談の話はどう

すんのや」

俺は苦虫を噛み潰したような表情を顔に浮かべてしまつ。

「丁重に断りの返事を書くさ」

言つたとたん場の空気が凍りついた。

「断るのですか！？」

「断るの！？」

「断るの！？」

岡利家と桃寿丸はそれぞれに声を上げた。

「そりゃあ断るさ。俺にはお香がいるんだから」

「側室でいいじゃん」

「側室ではなかつたのですか」

ハモつていい。

「いやいやいや。正室しかないのでしょ。側室なんてかわいそうじやん」

2人は頭を抱えてため息をついた。

「八郎様。本気でそのようなこと考えていらっしゃつたんですか？」

岡利家は苦言を洩らした。

「なんか悪いの？」

俺は少しずつとす。

「いや、八郎。そこはおかしいでしょ。良こ悪いの問題じやあないよ」

桃寿丸まで文句を言つてきた。

「お前らまで長船みたいなこと言つなよな。

わかつた。わかつた。返事は保留な。この内容だと今すぐ返事しろつてことはないだろ。

後から秀吉や信忠に頼んでみるよ

俺は吐き捨てるように両名に告げた。

「とりあえず、全軍移動だ。戻るぞ」

岡利家と桃寿丸は頭を抱えるしかなかつた。

### 30話（後書き）

更新遅れてしません。

引越し、新生活いろいろ大変でした。

関東にやってきました。友人が1人もいません。  
だれか友達になつてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9517/>

---

戦国異端記

2011年7月11日00時09分発行